

# 吉田南遺跡

第17・18次調査

発掘調査報告書

2006

神戸市教育委員会

# 吉田南遺跡

第17・18次調査

発掘調査報告書

2006

神戸市教育委員会



VII区全景（北東から）

巻頭写真図版2



VII区全景（北西から）



SB206・208、SD209（北東から）



SD209（東から）

巻頭写真図版4



SB208、SD209（西から）



SD209出土遺物

卷頭写真図版6



SB201出土遺物



SB208出土遺物



SB215出土遺物



SD220出土遺物

巻頭写真図版8



SB203出土遺物



SB209出土遺物

## 序

吉田南遺跡は神戸市西区森友を中心に広がる弥生時代から中世に及ぶ複合遺跡で、かつて明石郡衙と推定される掘立柱建物群が整然と並んで発見された神戸市内で最も著名な遺跡のひとつです。

今回報告します第17・18次調査は、店舗建設に伴う発掘調査です。調査の結果、弥生時代後期と古墳時代後期の住居が多数見つかり、大量の土器が出土するなど、貴重な資料が発見されました。

この調査報告がこの地域に暮らしていた先人の足跡を明らかにすることで、地域の文化財保護や普及の資料として、市民の皆様をはじめ、多くの方々に広くご活用いただければ、幸いです。

最後になりましたが、有限会社ファウンテンフォレストをはじめ、調査にご協力いただきました方々、関係諸機関に対し、厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

神戸市教育委員会

## 例　言

1. 本書は神戸市西区森友3丁目6-2、7-3、12-32、27に所在する吉田南遺跡第17・18次調査の発掘調査報告書である。ただし平成16年度実施の調査については遺物整理の段階まで第16次調査と認識していたため、次数に混乱が生じている。
2. 発掘調査は、店舗の建設に伴うもので、神戸市教育委員会が有限会社ファウンテンフォレストからの委託を受けて、現地調査を平成16年12月14日～平成17年4月25日、7月5日～7月15日まで実施した。調査対象面積は2,030m<sup>2</sup>である。また、出土遺物の整理業務については、平成17年度に委託を受けて、神戸市埋蔵文化財センターで実施している。
3. 現地での調査は中居さやかが担当し、本書の作成は中村大介の協力を得て、中居が担当した。本文はⅡ. の炭化木材・大型植物化石・漆・動物遺存体の記述については中村、それ以外の部分は中居が作成した。
4. 現地での遺構写真は文化財課主査（調査当時）丸山潔と中居が撮影した。遺物写真については奈良文化財研究所牛嶋茂氏の指導の下、西大寺フォト杉本和樹氏が撮影した。
5. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「東二見」「前開」「明石」「須磨」、神戸市発行の2,500分の1地形図「玉津」「吉田南」「高津橋」「上池」を使用した。
6. 本書で使用した方位・座標は平面直角座標系第V系（世界測地系）で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示している。
7. 今回の調査で出土した遺物は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
8. 現地での発掘調査および遺物の整理にあたって、有限会社ファウンテンフォレストには経費負担を含む御協力をいただきました。その他、下記の関係諸機関にも御協力いただきました。ここに記して感謝いたします。（敬称略）  
イズミヤ株式会社　阪神内燃機工業株式会社　株式会社大林組　中外テクノス株式会社

## 目 次

### 序

### 例言

### 目次

I.はじめに .....	1
1. 吉田南遺跡の立地と歴史的環境 .....	1
(1) 遺跡の立地 .....	1
(2) 周辺の遺跡 .....	1
2. これまでの調査成果 .....	2
3. 調査に至る経緯と経過 .....	8
(1) 調査に至る経緯 .....	8
(2) 調査組織 .....	8
(3) 発掘調査の経過 .....	8
II. 遺構と遺物 .....	11
1. 調査の概要 .....	11
(1) 調査の方法 .....	11
(2) 基本層序 .....	11
2. 弥生時代後期～後期後半 .....	13
(1) 竪穴住居 .....	14
(2) 挖立柱建物 .....	26
(3) 溝 .....	26
(4) 土坑 .....	38
(5) 遺構に伴わない遺物 .....	40
3. 古墳時代中期～後期 .....	42
(1) 竪穴住居 .....	43
(2) 溝 .....	60
(3) 土坑・落ち込み .....	63
(4) ピット .....	64
(5) 遺構に伴わない遺物 .....	64
4. 平安時代以降 .....	65
III.まとめ .....	68
1. 弥生時代後期～後期後半の上器 .....	68
2. 古墳時代中期～後期の上器 .....	72
3. おわりに .....	74

## 挿図目次

fig.1 吉田南遺跡の位置.....	1	fig.37 SD209出土遺物（4）.....	32
fig.2 吉田南遺跡と周辺の遺跡（S= 1 /25,000）.....	3	fig.38 SD209出土遺物（5）.....	33
fig.3 吉田南遺跡調査地点（S= 1 /5,000）.....	5	fig.39 SD209出土遺物（6）.....	34
fig.4 調査区地区割図.....	6	fig.40 SD209出土遺物（7）.....	35
fig.5 調査地遠景.....	9	fig.41 SD209出土遺物（8）.....	36
fig.6 作業風景.....	10	fig.42 SD209出土遺物（9）.....	36
fig.7 現地説明会.....	10	fig.43 SD218.....	37
fig.8 IV区南壁.....	11	fig.44 SD218出土遺物.....	37
fig.9 VII区北壁土層断面図.....	12	fig.45 SD220.....	38
fig.10 弥生時代後期～後期後半の遺構.....	13	fig.46 SD220出土遺物.....	39
fig.11 SB201.....	14	fig.47 SK209.....	40
fig.12 SB205.....	14	fig.48 SK209出土遺物.....	40
fig.13 SB207.....	14	fig.49 SK211.....	40
fig.14 SB201出土遺物.....	15	fig.50 SK211出土遺物.....	40
fig.15 SB205出土遺物.....	15	fig.51 遺構に伴わない遺物（1）.....	41
fig.16 SB208・SD210・211.....	16	fig.52 遺構に伴わない遺物（2）.....	41
fig.17 SB208.....	17	fig.53 古墳時代中期～後期の遺構.....	42
fig.18 SB208出土遺物（1）.....	18	fig.54 SB202.....	43
fig.19 SB208出土遺物（2）.....	19	fig.55 SB202出土遺物.....	43
fig.20 SB210.....	19	fig.56 SB203.....	44
fig.21 SB211.....	20	fig.57 SB203カマド.....	44
fig.22 SB213.....	21	fig.58 SB203出土遺物.....	44
fig.23 SB213出土遺物.....	21	fig.59 SB204.....	45
fig.24 SB215.....	23	fig.60 SB204カマド.....	45
fig.25 SB215出土遺物.....	23	fig.61 SB204出土遺物.....	45
fig.26 SB220.....	24	fig.62 SB206.....	46
fig.27 SB220出土遺物.....	24	fig.63 SB206カマド.....	47
fig.28 SB221.....	24	fig.64 SB206出土遺物（1）.....	48
fig.29 SB221出土遺物.....	25	fig.65 SB206出土遺物（2）.....	49
fig.30 SB212.....	25	fig.66 SB209.....	50
fig.31 SD206.....	26	fig.67 SB209.....	51
fig.32 SD206出土遺物.....	26	fig.68 SB209出土遺物（1）.....	52
fig.33 SD209.....	27	fig.69 SB209出土遺物（2）.....	53
fig.34 SD209出土遺物（1）.....	29	fig.70 SB209出土遺物（3）.....	53
fig.35 SD209出土遺物（2）.....	30	fig.71 SB214・218 .....	55
fig.36 SD209出土遺物（3）.....	31	fig.72 SB214カマド.....	55

fig.73	SB218カマド	55	fig.86	SK208	63
fig.74	SB214・218出土遺物	56	fig.87	SK208出土遺物	63
fig.75	SB217	57	fig.88	SX204出土遺物	63
fig.76	SB217カマド	57	fig.89	SP241出土状況	64
fig.77	SB217出土遺物	57	fig.90	ピット出土遺物・遺構に伴わない遺物	64
fig.78	SB219	58	fig.91	平安時代以降の遺構	65
fig.79	SB219北辺カマド	59	fig.92	SR01断面写真	66
fig.80	SB219西辺カマド	59	fig.93	平安時代以降の遺物	67
fig.81	SB219出土遺物	59	fig.94	遺構に伴わない遺物	67
fig.82	SD221	60	fig.95	弥生時代後期～後期後半の土器（1）	69
fig.83	SD221出土遺物（1）	61	fig.96	弥生時代後期～後期後半の土器（2）	70
fig.84	SD221出土遺物（2）	62	fig.97	弥生時代後期～後期後半の土器（3）	71
fig.85	SD222	62	fig.98	古墳時代中期～後期の土器	73

## 表目次

表1 吉田南遺跡調査一覧 ..... 4 表2 動物遺存体計測表 ..... 66

## 巻頭写真図版目次

巻頭写真図版 1	Ⅳ区全景（北東から）	巻頭写真図版 6	SB201出土遺物
巻頭写真図版 2	Ⅳ区全景（北西から）		SB208出土遺物
	SB206・208、SD209（北東から）	巻頭写真図版 7	SB215出土遺物
巻頭写真図版 3	SD209（東から）		SD220出土遺物
巻頭写真図版 4	SB208、SD209（西から）	巻頭写真図版 8	SB203出土遺物
巻頭写真図版 5	SD209出土遺物		SB209出土遺物

## 写真図版目次

図版 1	Ⅳ区全景（北西から）	SB208北西隅検出状況（南西から）
図版 2	Ⅳ区全景（東から）	SB208-p 12（南西から）
	Ⅰ区全景（南から）	図版 5 SB213（南西から）
	Ⅴ区全景（東から）	SB213検出状況（南西から）
	Ⅲ区全景（南から）	図版 6 SB215炭化材検出状況（北東から）
図版 3	SB208（北西から）	SB215（東から）
	SB208（西から）	図版 7 SB220（北東から）
図版 4	SB208に伴うSD211（南西から）	SB212（南西から）

図版8	SD209（東から）	図版32	SD209出土遺物（11）
図版9	SD209	図版33	SD209出土遺物（12）
図版10	SD218（南から）	図版34	SD209出土遺物（13）
	SD220（北東から）	図版35	SD209出土遺物（14）
図版11	SB206炭化層検出状況（南東から）		SD218出土遺物
	SB206（南東から）		SD220出土遺物（1）
図版12	SB206カマド（南西から）	図版36	SD220出土遺物（2）
	SB206貯蔵穴（北東から）		SK211出土遺物
図版13	SB202（北西から）		遺構に伴わない遺物（1）
	SB203（南西から）	図版37	SD220出土遺物（3）
	SB204（北東から）		遺構に伴わない遺物（2）
図版14	SB209（古）（北西から）		SB202出土遺物（1）
	SB209（新）（北西から）	図版38	SB202出土遺物（2）
図版15	SB214（南東から）		SB203出土遺物
	SB218（北東から）		SB204出土遺物（1）
図版16	SB217（南西から）	図版39	SB204出土遺物（2）
	SD221（北東から）		SB206出土遺物（1）
図版17	SB201出土遺物	図版40	SB206出土遺物（2）
	SB208出土遺物（1）		SB209出土遺物（1）
図版18	SB208出土遺物（2）	図版41	SB209出土遺物（2）
図版19	SB208出土遺物（3）	図版42	SB209出土遺物（3）
図版20	SB208出土遺物（4）	図版43	SB209出土遺物（4）
	SB213出土遺物		SB214・218出土遺物
	SB215出土遺物（1）	図版44	SB217出土遺物
図版21	SB215出土遺物（2）		SB219出土遺物（1）
図版22	SB220・221出土遺物		SD221出土遺物（1）
	SD209出土遺物（1）	図版45	SB219出土遺物（2）
図版23	SD209出土遺物（2）		SD221出土遺物（2）
図版24	SD209出土遺物（3）	図版46	SD221出土遺物（3）
図版25	SD209出土遺物（4）	図版47	SD221出土遺物（4）
図版26	SD209出土遺物（5）		SX204出土遺物
図版27	SD209出土遺物（6）	図版48	SP241出土遺物
図版28	SD209出土遺物（7）		SP257出土遺物
図版29	SD209出土遺物（8）		遺構に伴わない遺物
図版30	SD209出土遺物（9）		SR01出土遺物
図版31	SD209出土遺物（10）	図版49	自然系遺物

## I. はじめに

### 1. 吉田南遺跡の立地と歴史的環境

#### (1) 遺跡の立地

吉田南遺跡は、神戸市西区森友1丁目を中心とする遺跡で、海岸部から約3km明石川を遡った下流域右岸の標高約6~8mの沖積地に位置する。遺跡は南北約900m、東西約500mに広がる。遺跡の南端は明石市域にまで入り、北王子遺跡と称されている。

この地域は明石川・伊川の合流部付近であることから、旧河道が密に分布するとされており、これまでの調査でも旧河道が何条も確認されている<sup>①</sup>。そして、この旧河道によって形成された微高地に吉田南遺跡は広がっている。

#### (2) 周辺の遺跡

縄文時代

明石川中・下流域において、縄文時代以前の遺跡は現在確認されていないが、縄文時代後期の遺物が片山遺跡<sup>②</sup>・南別府遺跡等で出土している。晩期になると玉津田中遺跡等でも遺物が出土しているが、いずれも遺構は見つかっていない。

弥生時代

明石川流域の弥生時代は、吉田遺跡・片山遺跡において最も早い段階で集落が展開する。次いで、新方遺跡・玉津田中遺跡へと広がりをみせる<sup>③</sup>。新方遺跡は吉田南遺跡の明石川をはさんで左岸に位置する遺跡で、野手西方地点においては、縄文人的な特徴をもつ弥生時代前期の人骨が十体あまり見つかっている<sup>④</sup>。また、中期の新方遺跡丁の坪地点では碧玉製



fig.1 吉田南遺跡の位置

玉類を生産していたと考えられる堅穴住居が見つかっている<sup>53)</sup>。

中流域右岸に位置する玉津田中遺跡では、中期に堅穴住居・木田・方形周溝墓という集落域・生産域・墓域が合わせて見つかっている<sup>54)</sup>。また、砂岩製石臼を生産していたと考えられる未製品等が多く出土しており、後期の堅穴住居からは青銅器の鋳型や坩埚が出土している。その他、どちらの遺跡にも他地域産の土器・石器が大量に搬入されていることが判明していること等から、この二遺跡は明石川流域の中核的な集落と考えられている。中期には他に今津遺跡で土器棺墓等が見つかっている<sup>55)</sup>。

中期後半になると、丘陵上に新たな遺跡が広がる。伊川流域の頭高山遺跡<sup>56)</sup>・表山遺跡<sup>57)</sup>・櫻谷川流域の城ヶ谷遺跡<sup>58)</sup>は標高100m以上に立地し、中でも城ヶ谷遺跡・表山遺跡は環壕を作り<sup>59)</sup>。また、明石川流域では、西神第50地点でこの時期の住居跡が40棟程度見つかっている。後期は沖積地にふたたび集落が展開し、新方遺跡平松地点<sup>60)</sup>・日輪寺遺跡<sup>61)</sup>・古田南遺跡等で遺構が見つかっている。後期後半には、池上口ノ池遺跡で50棟以上の堅穴住居が見つかっている<sup>62)</sup>。

#### 古墳時代

古墳時代は伊川流域に大王山古墳群・白水瓢塚古墳が継続して築かれる。白水瓢塚古墳は前方後円墳で近年、主体部の調査が実施され、後円部主体部からは西文帝神獸鏡や石製腕飾類、ガラス製小玉・石製管玉・勾玉等の玉類、鉄製品等の副葬品が多数出土している<sup>63)</sup>。

中期には明石川右岸に前方後円墳の吉田玉塚古墳が築かれ、中期から後期にかけて居住・小山遺跡<sup>64)</sup>・水谷遺跡<sup>65)</sup>・高津橋大塚遺跡等で群集墳が築かれる。中でも水谷遺跡では、帆立貝式古墳である水谷大東古墳をはじめとして、周濠からは多数の形象埴輪片が出土している。

古墳時代の集落は、弥生時代後期後半からの集落が継続して存在しているが、中期に入り中流域右岸の出合遺跡が新たに出現している<sup>66)</sup>。この遺跡からは神式系土器が出土し、帆立貝式古墳である亀塚古墳が見つかっている。後期には新方遺跡大日地点において、羽玉製・滑石製の玉生産を行っていたと考えられる未製品等が出土している<sup>67)</sup>。また、後間に新出する伊川左岸の寒風遺跡では大吹造りの住居が数棟確認されている<sup>68)</sup>。

#### 奈良・平安時代

奈良時代は、整然と掘立柱建物が並ぶ吉田南遺跡が墨書き土器や木簡等の出土遺物からも、明石郡衙と推定されている。また白水遺跡からは平安時代の梵鐘鋲造遺構が検出され、瓦も出土している<sup>69)</sup>。その他、上池遺跡では平安時代中期の掘立柱建物や上器溜まり等が見つかっている<sup>70)</sup>。

明石川の上流域においては、神出古窯跡群が11世紀頃から操業を開始しており、東播系須恵器の生産地として名高い<sup>71)</sup>。また、玉津田中遺跡では平安時代末～鎌倉時代にかけての方形の堀で囲まれた瓦葺き建物を含む居館と考えられる遺構が見つかっている。

## 2. これまでの調査成果<sup>72)</sup>

吉田南遺跡は、現水環境センター（旧玉津環境センター）建設に伴う発掘調査によって発見された遺跡である（第1次～第5次）。調査は1976年から5年にわたり実施し、総面積22,500㎡にも及ぶ大規模な調査の結果、弥生時代～中世にかけての複合遺跡であることがわかった。特に弥生時代後期～古墳時代後期にかけての堅穴住居が約100棟、奈良時代

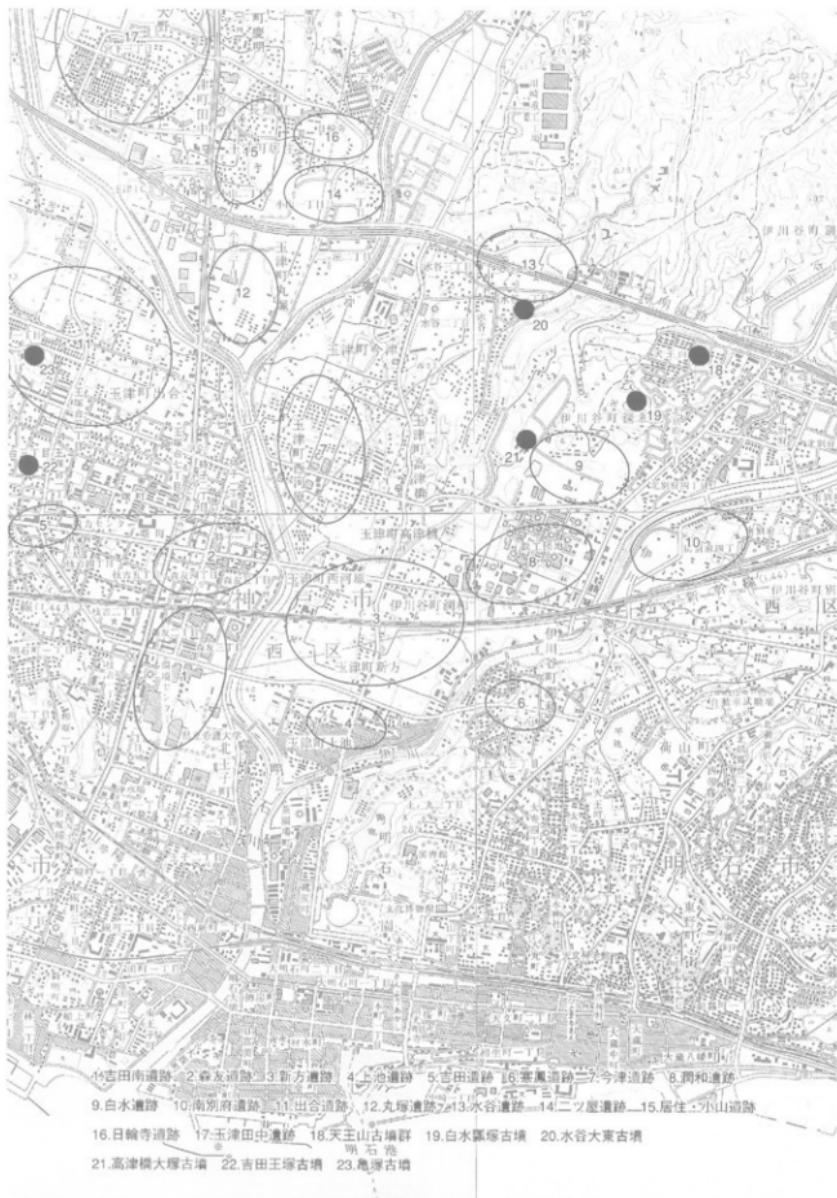


fig.2 吉田南遺跡と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

後期～平安時代前期の堀立柱建物が約50棟見つかっており、神戸市内でも著名な遺跡のひとつとして上げられる。

これまでの調査で最も古い遺構は弥生時代後期であり、それ以前は明石川対岸の新方遺跡で集落が見つかっていることから、弥生時代後期に集落が拡大する流れをうけて、古田南遺跡にも集落域が広がったと考えられる。また、第13次調査で弥生時代後期の水田が確

次数	技次数	調査年度	調査機関	面積(㎡)	調査内容
1	1	1976	吉田・片山遺跡調査団	6,000	
	2	1976	吉田・片山遺跡調査団	2,200	
	3	1977	吉田・片山遺跡調査団	2,000	
2	1	1977	吉田・片山遺跡調査団	2,000	
	2	1977	吉田・片山遺跡調査団	2,200	弥生時代後期～古墳時代後期の堅穴住居群
	3	1977	吉田・片山遺跡調査団	450	奈良時代後期～平安時代前期の堀立柱建物群 (明石郡衙推定地)
	4	1978	吉田・片山遺跡調査団	2,500	
3	1	1978	吉田・片山遺跡調査団	2,000	
	2	1978	吉田・片山遺跡調査団	1,300	
4		1979	吉田・片山遺跡調査団	1,000	
5		1980	神戸市教育委員会	460	
6		1980	神戸市教育委員会	60	平安時代～鎌倉時代の堀立柱建物
7		1988	神戸市教育委員会	420	古墳時代後期～奈良時代後半の埴輪込み
8		1988	神戸市教育委員会	852	古墳時代前期～後期の堅穴住居群
9		1989	神戸市教育委員会	135	遺構なし
10		1990	兵庫県教育委員会	800	中世の屋敷地
11		1990	神戸市教育委員会	135	平安時代～鎌倉時代耕作痕
12		1990	兵庫県教育委員会	800	弥生時代後期～古墳時代の水田 中世の屋敷地
13		1991	兵庫県教育委員会	135	古墳時代前期の溝 奈良時代の水田
14		1994	神戸市教育委員会	2,787	遺構なし
15		1999	神戸市教育委員会	4,639	奈良時代後期～平安時代前半の堀立柱建物
16		2003	兵庫県教育委員会	248	弥生時代後期後半の遺物 中世の水田
17		2004	神戸市教育委員会	2,030	弥生時代後期～古墳時代後期の堅穴住居群
18		2005	神戸市教育委員会		

表1.吉田南遺跡調査一覧

認されていることから生産域は居住域の南に広がっていたことがわかった。この時期の竪穴住居は円形の竪穴住居が大半であることが特徴である。竪穴住居からは小型仿製内行花文鏡の破鏡が出土している。また、第13次調査では弥生時代後期末の溝から大量の土器が出土しており、第17次調査と様相が似ている。この時代の遺物は土器のほかに、銅鏡や鉄斧等が出土している。

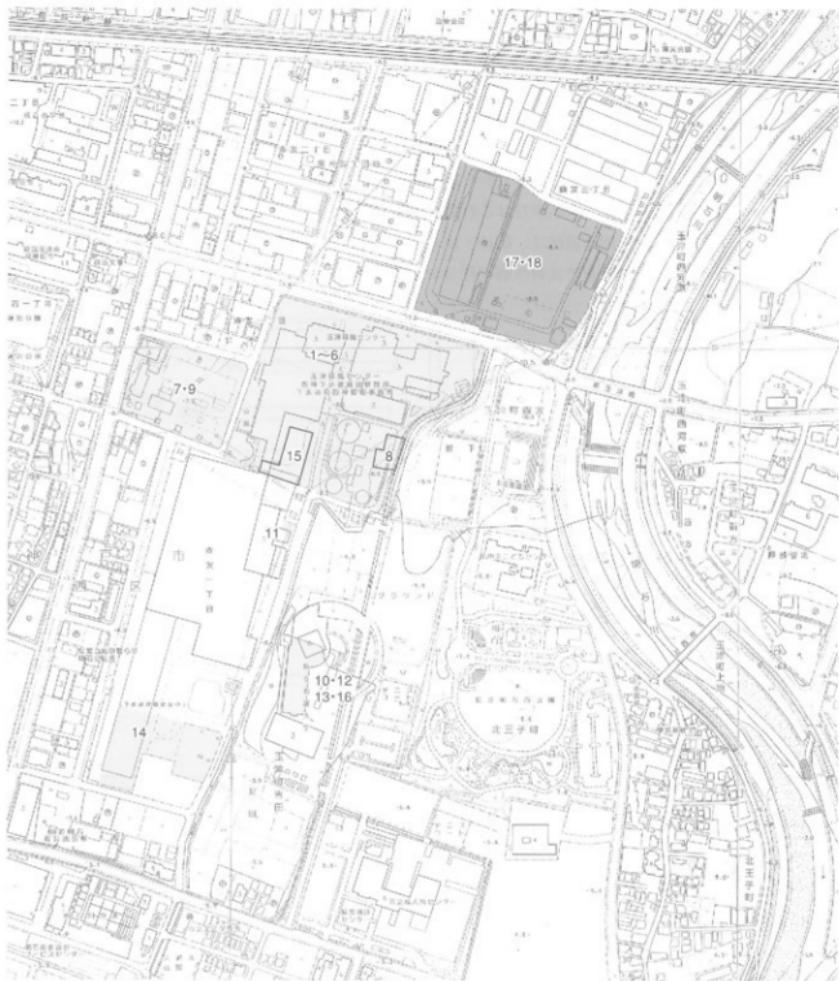


fig.3 吉田南遺跡調査地点 (S=1/5,000)

古墳時代の竪穴住居からは滑石製の勾玉・管玉・ガラス玉が出土している。また、第1次～第5次調査は広範囲に調査を実施したことから、古墳時代前期～中期は主に東側の窓高地に竪穴住居が多く見つかり、後期になると北部の微高地に作られるという時期によって居住域が移動していることが判明している。その他、古墳時代の遺物としては溝内から埴輪が出土している。

奈良時代後期の掘立柱建物群は南北に整然と配置され、木簡・瓦・石帶・墨書き等が出土していることからも明石郡衙の有力な候補地と考えられている。また、調査区を縱断する河遺に架かっていた木橋が出土している。

第6・8・11・15次調査は、水環境センター敷地内で実施された調査で、弥生時代後期～古墳時代の竪穴住居や、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物の調査個数がさらに増加している。また、関西電力株式会社明石変電所内で実施された第7・9次調査によって奈良時代の掘立柱建物は西へ広がっていないことが判明した。さらには第14次調査で、明確な遺構が見つかっていないことから、居住域の南限が判明する等の成果があった。しかし、古田南遺跡の北への広がりはこれまで調査例がなく、今回の調査まで未確認であった。

中世の吉田南遺跡は、第10・12・13次調査において14世紀の方形の居館が確認されており、第11次調査では耕作痕が見つかっている。

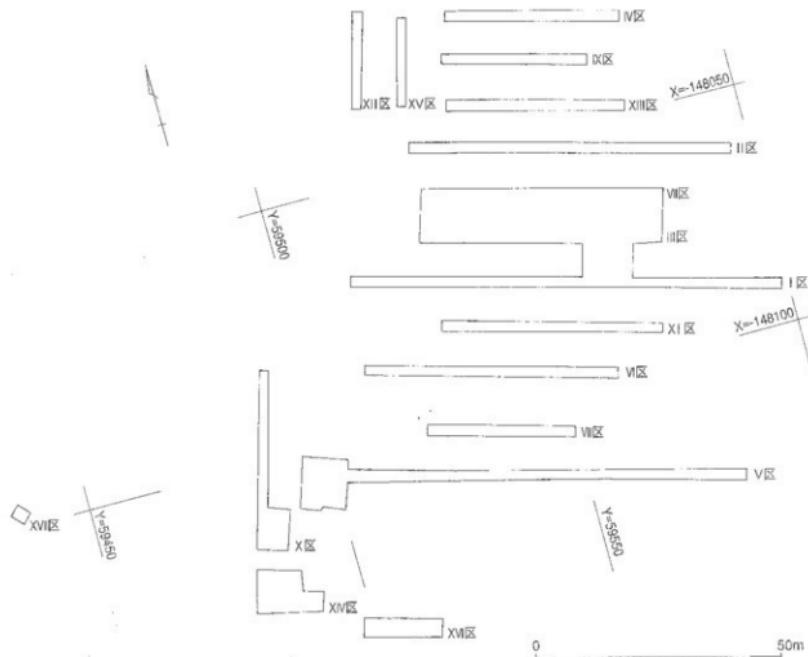


Fig.4 調査区地区割図

## I. 1. 2. 計

- (1)前原和子「玉津田中遺跡周辺の地形環境」[玉津田中遺跡調査概報！昭和57・58年度確認調査概報一] 兵庫県教育委員会 1984
- (2)新修神戸市史編集委員会編「古田遺跡」「片山遺跡」「新修神戸市史」歴史編 I 自然・考古 1989
- (3)丸山潔「引生集落の動態（1）一橋根田塙地域」『研究』埋蔵文化財研究会 1992
- (4)片山 達・大庭由美子「新方遺跡の弥生時代人骨」「新方遺跡 野手・西方地区発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2003
- (5)丸山潔「新方遺跡発掘調査概要」神戸市教育委員会 1984
- (6)條宮正他編『玉津田中遺跡 第6分冊』兵庫県教育委員会 1996
- 谷正俊編「玉津田中遺跡」神戸市教育委員会 2000
- (7)千種浩「今津遺跡」[昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報]神戸市教育委員会 1985
- (8)内藤俊哉・石島二郎「西高山西山遺跡第7次調査」[平成8年度神戸市埋蔵文化財年報]神戸市教育委員会 1990
- (9)深江英恵他「表山遺跡 池ノ内群集落」兵庫県教育委員会 2000
- (10)山本雅和他「城ヶ谷遺跡第2次調査」「平成8年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1999
- (11)新修神戸市史編集委員会編「西神50号遺跡」「新修神戸市史」歴史編 I 自然・考古 1989
- (12)山本雅和編「今池尻遺跡 新方遺跡平松地区発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2003
- (13)山山清朗編「日輪寺遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2002
- (14)安田源「池上口ノ池遺跡」[昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報]神戸市教育委員会 1990
- (15)山口英正「白木領塚古墳」[平成15年度神戸市埋蔵文化財年報]神戸市教育委員会 2006刊行予定
- (16)千種浩 居住・小山遺跡「昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1985
- (17)山本雅和・木谷大東古墳「平成8年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1999
- 西岡巧次伯「木谷遺跡第7次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2001
- 谷正俊編「水谷遺跡第10次調査 馬掛原遺跡第1次調査」神戸市教育委員会 2005
- (18)安田源編「白木遺跡第3・6・7次 高津橋大塚遺跡第1・2次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2000
- (19)浅谷誠吾「山合遺跡第32次調査」[平成5年度神戸市埋蔵文化財年報]神戸市教育委員会 1996
- (20)丹治康明「新方遺跡（大日地点）」[昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報]神戸市教育委員会 1985
- (21)黒田恭正、東喜代秀・中村大介「寒風遺跡第2次調査」「平成8年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1999
- 黒田恭正・中谷正「寒風遺跡第8次調査」「平成12年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 2003
- (22)山本雅和「白木水遺跡第4次」神戸市教育委員会 1999
- (23)前田佳久「土池遺跡」[昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報]神戸市教育委員会 1988
- (24)丹治康明「神出古岸跡第1」「昭和55年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1983
- 池田征弘編「神出古岸跡第2」兵庫県教育委員会 1998
- (25)吉田・片山遺跡調査団「吉田南遺跡第7次現地説明会資料」 1977
- 吉田・片山遺跡調査団「吉田南遺跡現地説明会資料（V）」 1978
- 西岡誠対他「吉田南遺跡第17次調査」[昭和63年度埋蔵文化財年報]神戸市教育委員会 1994
- 西口圭介編「吉田南遺跡（足柄地区）・北王子遺跡」兵庫県教育委員会 1995
- 白野博史「吉田南遺跡」[平成6年度埋蔵文化財年報]神戸市教育委員会 1997
- 山口英正「吉田南遺跡」[平成11年度埋蔵文化財年報]神戸市教育委員会 2002

### 3. 調査に至る経緯と経過

#### (1) 調査に至る経緯

今回の調査対象地については、阪神内燃機工業株式会社から提出された埋蔵文化財試掘調査依頼書（15121202）に基づき、平成15年2月4日・5日に試掘調査を実施した。11ヶ所（60m<sup>2</sup>）に設定した試掘坑において、擾乱のため明らかでない場所を除き、いずれも遺物包含層が確認されたため、対象地全域の33,000m<sup>2</sup>において発掘調査が必要な旨、2月12日付け教育長名で回答した。

その後、9月27日に有限会社ファウンテンフォレストより提出された店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査届出書（16572385）および、11月9日に提出された埋蔵文化財試掘調査依頼書（16121177）に基づき、平成16年11月10日から22日に試掘調査を実施した。6ヶ所（510m<sup>2</sup>）に設定した試掘トレンチでいずれも遺物包含層が確認されたため、対象地全域の26,876m<sup>2</sup>で発掘調査が必要な旨、12月3日付け教育長名で回答した。

#### (2) 調査組織（平成16・17年度）

神戸市文化財保護審議会 史跡考古担当委員

柳上 重光 前神戸女子短期大学教授

工楽 普通 大阪府立狭山池博物館館長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

教育長 小川雄二

社会教育部長 高橋英比古

教育委員会参事

（文化財課長事務取扱） 桑原泰豈

社会教育部主幹 渡辺伸行（埋蔵文化財指導係長事務取扱）

宮本郁雄（埋蔵文化財センター所長 平成16年度）

丸山潔（埋蔵文化財センター所長 平成17年度）

埋蔵文化財調査係長 丹治康明

文化財課主査 丸山潔（平成16年度） 菅本宏明 安田滋（平成17年度）

事務担当学芸員 東喜代秀

調査担当学芸員 中居さやか

保存科学担当学芸員 中村大介

遺物整理担当学芸員 谷正俊（平成16年度） 安田滋（平成17年度）

#### (3) 発掘調査の経過

試掘調査の結果を受けて、店舗建設予定地について発掘調査を実施することで協議が整った。平成16年12月13日に現場機材・資材を現地に搬入し、掘削の準備に取りかかる。調査は主に杭基礎による遺跡破壊部分を結んだトレンチ掘削で実施し、調査に執りかかった順にⅠ区からⅣ区と便宜的に称した。

12月14日よりⅠ区東半の重機掘削を行う。期待された奈良時代の遺物はほとんど出土しなかったが、弥生時代後期の竪穴住居SB201を検出する。Ⅰ区の西半を平成17年1月6日よ



fig.5 調査地遠景

り重機掘削を行い、1月12日よりⅡ区の重機掘削を実施する。1月13日Ⅰ区にて古墳時代後期のSB202を検出する。北辺にカマドをもつ。1月18日Ⅱ区にてSB203・SB204を検出する。どちらも古墳時代後期の竪穴住居で、カマドを住居の北辺にもつ。1月20日よりⅢ区の重機掘削を実施する。弥生時代後期の竪穴住居SB208を検出する。ベット状遺構をもち、当初は円形と思われた。1月25日よりⅣ区・Ⅴ区の重機掘削を実施する。1月26日Ⅲ区でSD209を検出する。弥生時代後期の上器が大量に出土し、大半が完形であった。

2月2日よりⅥ区の重機掘削を実施する。また、Ⅴ区西端で古墳時代後期のSB209を検出するが、遺構の肩が調査区外へ拡がるため、確認のため2月4日重機により拡張する。また、遺構の集中する範囲が確定してきたため、2月8日よりⅢ区の北側を重機で拡張する(Ⅶ区)。2月21日Ⅰ区とⅢ区で部分的に確認していた古墳時代後期のSB206を拡張掘削する。2月24日Ⅲ区を拡張したⅦ区ではSB208が多角形住居であることが判明した。

3月4日よりⅦ区、3月8日よりⅧ区の重機掘削を実施する。Ⅶ・Ⅷ区は遺構が希薄であることがわかった。3月10日Ⅸ区の全景写真・遺構写真の撮影を実施する。調査も中盤に入る中、竪穴住居を多数確認し、大量の遺物が出土するという内容が判明してきたため、記者発表を行い、3月12日現地説明会を実施する。「雪の舞う中、約50人の見学者があった。終了後、SD209の遺物を取り上げる。3月15日SB206の撮影を実施する。3月16日よりⅩ区のピット断ち削りを実施する。Ⅹ区の重機掘削も同日より実施する。Ⅹ区では古墳時代後期の竪穴住居SB214・SB218を検出した。3月18日よりⅪ区の重機掘削を実施する。

Ⅺ区では弥生時代後期後半の竪穴住居SB215、古墳時代後期の竪穴住居SB217を検出した。3月後半は春が近いせいか雨天が多く、調査の進捗が鈍化する。3月30日Ⅻ区の重機掘削を実施する。遺構が希薄であろうと考えていたⅪ区ではSD220から弥生時代後期の上器が多く出土した。

4月1日よりⅬ区の重機掘削を実施する。Ⅼ区は弥生時代と古墳時代の竪穴住居が各1棟見つかった(SB221・SB219)。4月11日Ⅽ区の重機掘削を実施する。Ⅽ区は杭基礎埋設部分ではないため、当初の掘削範囲ではなかったが、汚染土壌の除去が遺構面に及ぶため調査を実施した。Ⅽ区からは古墳時代中期～後期のSD221と、SD221と切り合

う豊穴住居SB220を検出した。また同日よりSB206の埋土で炭化物を多く含む層の土壤を水洗する。4月25日現地での発掘調査を一旦中断し、出土遺物や発掘用資材等を神戸市埋蔵文化財センターに撤収する。

防火水槽建設部分の調査を7月5日より実施する(IV・VII区)。VII区は旧河道が確認されたが、工事掘削深度以上に深くなるため、断ち割りにとどめた。4月15日現地での発掘調査を完了し、引き渡す。

また、平成17年度は遺物整理作業を受託する。遺物水洗・整理作業、遺物実測作業、遺構・遺物トレース作業、遺物写真撮影を実施し、発掘報告書を作成・刊行した。



fig.6 作業風景



fig.7 現地説明会

## II. 遺構と遺物

### 1. 調査の概要

#### (1) 調査の方法

盛土が厚く堆積し、遺跡の存在する高さが現況地盤より約3m深い位置に存在するため、作業の効率上、杭基礎埋設部分についてはトレント状について調査を実施した。調査は遺跡の広がりを確認しながら進行したため、掘削した順番にI区～IV区と呼んでいる。

年度をまたいで調査であるため次数が変わるもの、名称の煩雑さを避けるため、区名・遺構名は連続している。

#### (2) 基本層序

現況は盛土のためほぼ平坦となっているが、地形的には北から南へ緩やかに傾斜しており、明石川へむかって西から東へも傾斜している。また、何条もの旧河道が縦横断しているため微高地を形成している。

調査区の東端は遺構面が東へいくにつれて緩やかに下がり、淡青灰色粘土が堆積する湿地状の地形となる(SR201)。西端は盛土直下から切り込む旧河道によって遺構面が分断され(SR01)、河道の西側は東側の層位と異なり安定した土壤を部分的にしか確認していない。またこの旧河道はIV区で、弥生時代後期の遺物を含む旧河道と重なって検出した。

調査地は広いが基本的な層位は上層より、盛土・搅乱が1.0～1.6m堆積し、旧耕土と床土の互層が約1.2m堆積する。第1遺構面はこの堆積層中で検出している。そして下層には、淡灰褐色粘質土の遺物包含層が0.1～0.2m堆積する。第2遺構面は淡褐色～淡黄褐色粘質土であったが、旧河道等により還元しているため、遺構面が青灰色粘質土であるトレントもあった。南側のトレント(X・IV区)の方が北側のトレントより砂質が強い傾向にあった。

遺構は、弥生時代後期～後期後半と古墳時代中期～後期の遺構を同一遺構面で確認したが、平安時代以降の遺構は、畦畔を部分的に確認したにとどまり、遺物もほとんど出土していない。このため、第1遺構面の大半は断面による観察にとどまっている。



fig.8 IV区南壁

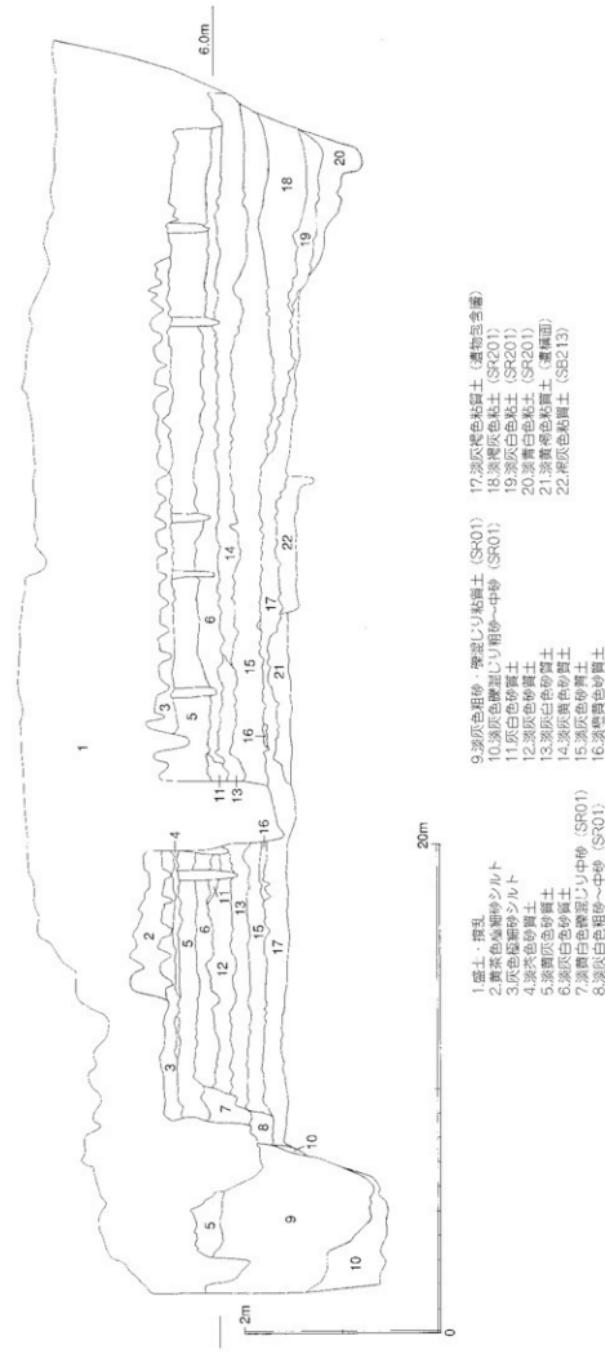


Fig. 9 VII区北壁土壌断面図

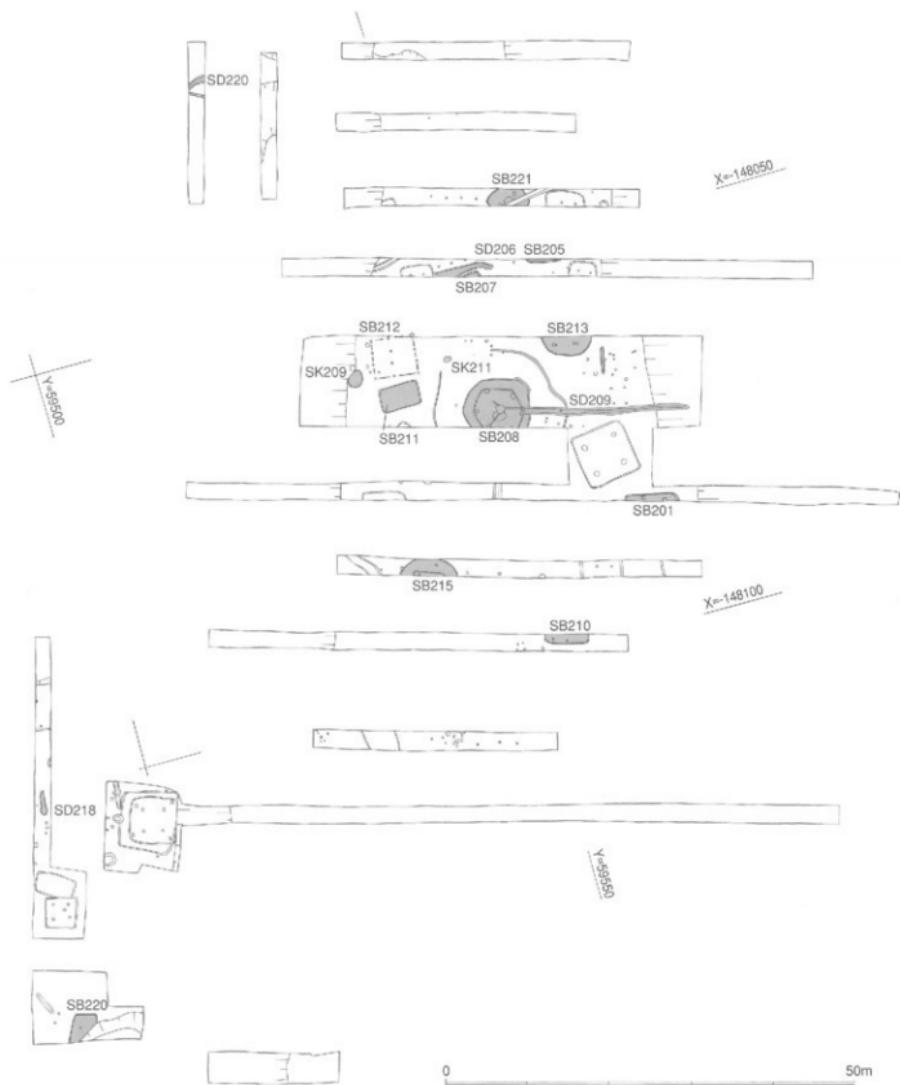


fig.10 弥生時代後期～後期後半の遺構

## 2. 弥生時代後期～後期後半

第2遺構面の遺構は、古墳時代の遺構と同一面で検出したため、時期の判明した遺構について記述する。弥生時代後期～後期後半の遺構は、竪穴住居10棟、掘立柱建物1棟、溝4条、土坑2基を検出している。

## (1) 竪穴住居

SB201 I区で北辺を検出した方形の竪穴住居である。一辺6.5m、壁高0.2mを測る。床面の標高は2.7mである。埋土に炭を少量含んでいる。柱穴を2基もつ。p1が直径0.4m、深さ0.3m、p2が直径0.7m、深さ0.1mを測る。壺(2)が1点完形で出土している他、二重口縁壺・甕・鉢が出土している。土器の多くは住居の西側で出土している。

1は口径23.0cm、器高46.2cmを測る大型の二重口縁壺である。頸部から口縁部外側は摩滅しているが体部はヘラミガキ、内面は口縁部にヘラミガキ、体部にはハケ調整の後ナデ調整を施す。胎土に砂粒を多く含んでいる。2は完形の壺で、全体に器壁が厚い。口径10.0cm、器高19.4cmを測る。体部上半部から口縁部は内外面ともにナデを施す。底部外面には木葉圧痕が残る。胎土からは搬入品の可能性が考えられる。3・4は甕の口縁部で、どちらも端部を上方につまみあげる。6は口径15.8cm、器高5.9cmを測る「く」字形の頸部をもつ鉢で、調整は摩滅のため不明である。底部がやや形骸化している。7は低い脚台をもつ完形の鉢で、口径12.1cm、器高7.4cmを測る。8は底部に焼成後穿孔を施す有孔鉢である。7と同じく低い脚台をもち、外面にはタタキが残る。

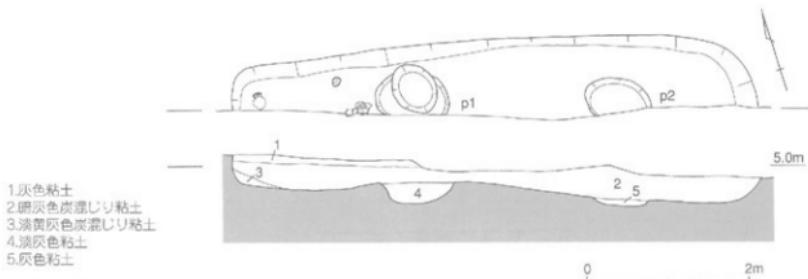


fig.11 SB201

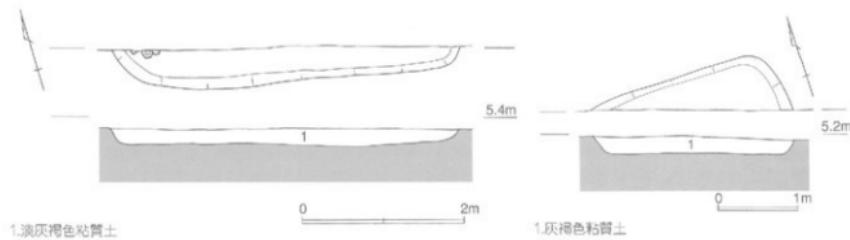


fig.12 SB205

fig.13 SB207

SB205 Ⅱ区で南辺を検出した方形の竪穴住居である。一辺4.3m、壁高0.2mを測る。埋土は淡灰褐色粘質土である。甕・鉢が出土している。

甕9は外反した後丸く収める口縁部で、甕10は端部に面をもつ。13は底盤の鉢で口径8.4cm、器高4.9cmを測る。外面調整は摩滅のため不明、内面はナデ調整である。

SB207 Ⅱ区で竪穴住居の北東辺と考えられる落ち込みを検出した。底面は平坦で、肩は急に立ち上がる。壁高0.15mを測り、埋土は灰褐色粘質土である。遺物は出土していないが、埋土より弥生時代と判断した。

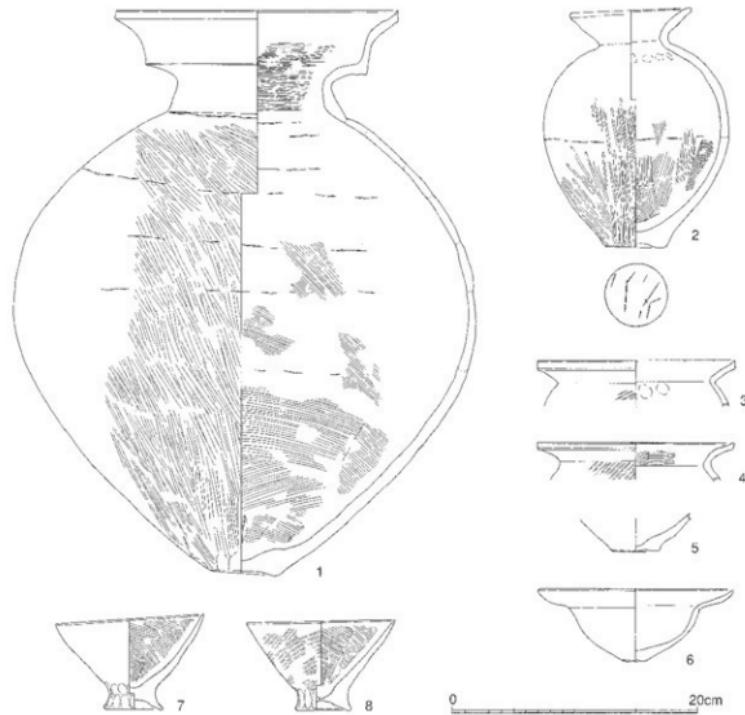


fig.14 SB201出土遺物

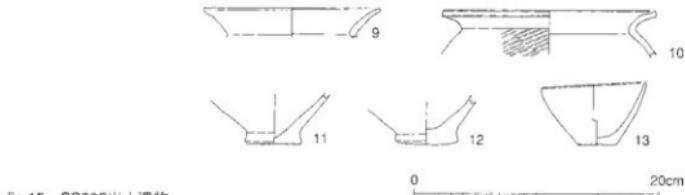


fig.15 SB205出土遺物

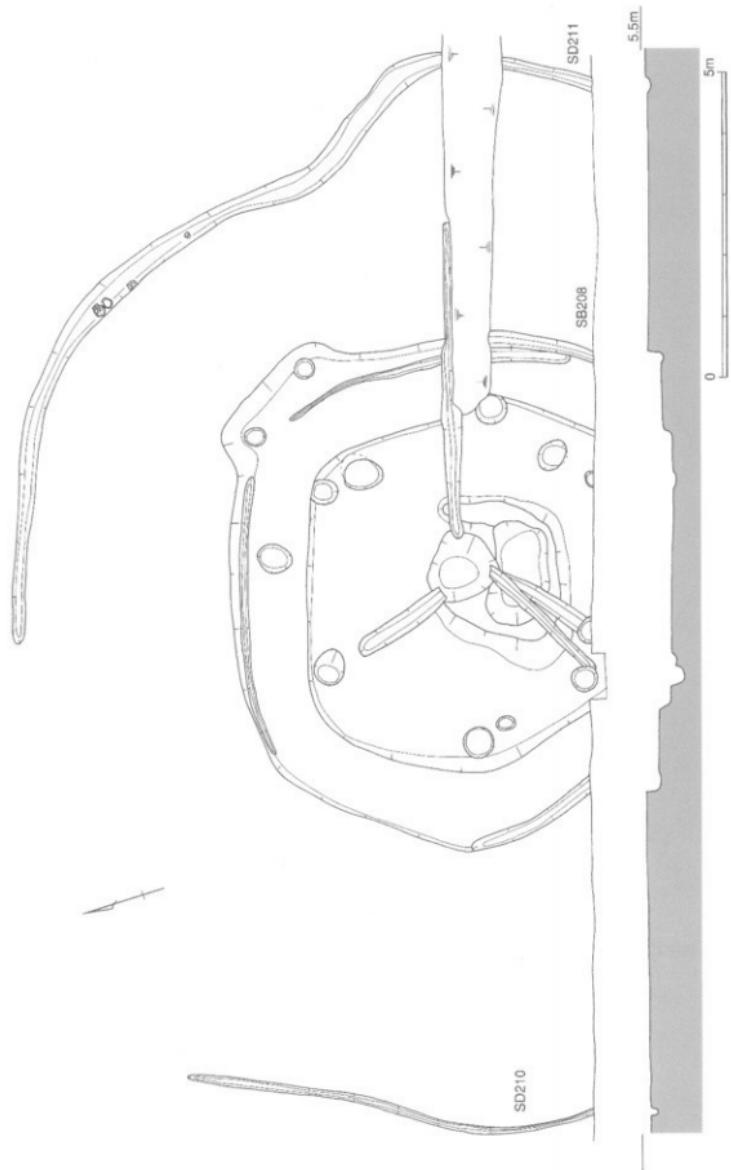


fig. 16 SB208・SD210・211

SB208

III・VII区で検出した六角形の竪穴住居である。一辺3.2～4.6m、対角8.6m、床面までの壁高0.3mを測り、北東部に張り出しをもつ。柱穴13基、ベット状遺構、中央土坑、周壁溝をもつ。床面には中央上坑から延びる間仕切り状の溝を4条検出した。

住居の中央北側にある不整円形の土坑と、南側の炭化物を堆積した長方形の土坑を取り巻いて周堤がめぐる。この形態の中央土坑はいわゆる「10（いちまる）土坑」と呼ばれるものと考えられる<sup>10</sup>。北側の土坑は直径1.0m、深さ0.5m、南側の土坑は長辺1.7m、短辺0.9m、深さ0.1m、周堤の高さは床面から0.05mを測る。北側の土坑埋土に炭化物は含まれず、間仕切り状の溝が土坑より延びることから、湿気対策の機能を考えたい。炭化層は周堤の断面にも確認できる。

ベット状遺構は床面から約0.1m高いが、貼床ではない。

柱穴は直径0.4～0.6m、深さ0.4～0.6mを測る。p2・10、p4・7、p12・13は2基ずつ並列していることから、建て替えが想定できる。ほとんどの柱は抜き取られ、掘形が抉れた状態の柱穴も確認した。p12からは甕と高环がほぼ完形の状態で出土している(17・27)。柱を抜き取った後に、置いたものと考えられる。また、p5・6は張り出し部分にあたる。

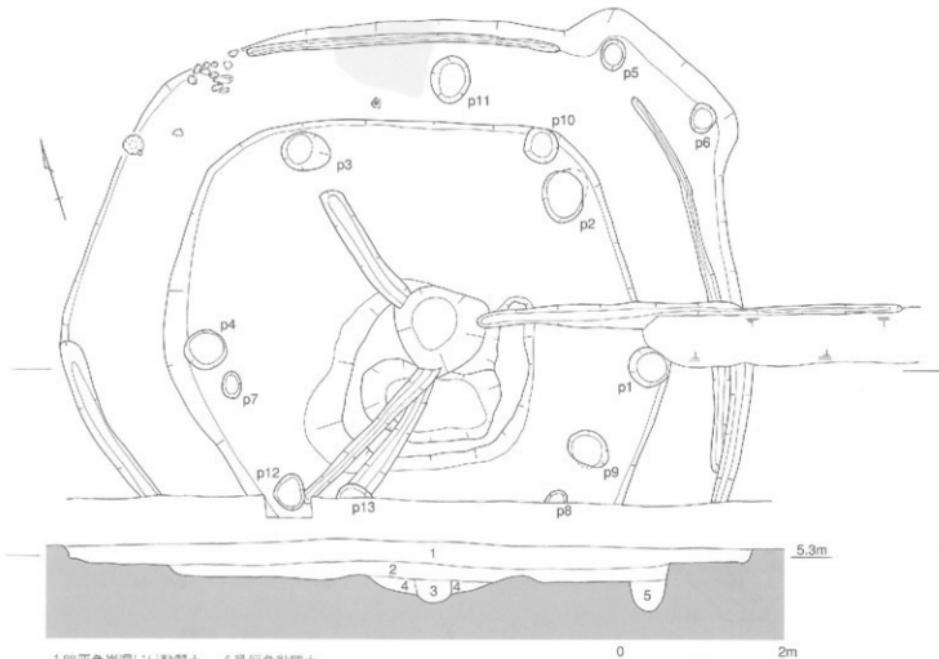


fig.17 SB208 (アミ部分は焼土層の広がりを示す。)

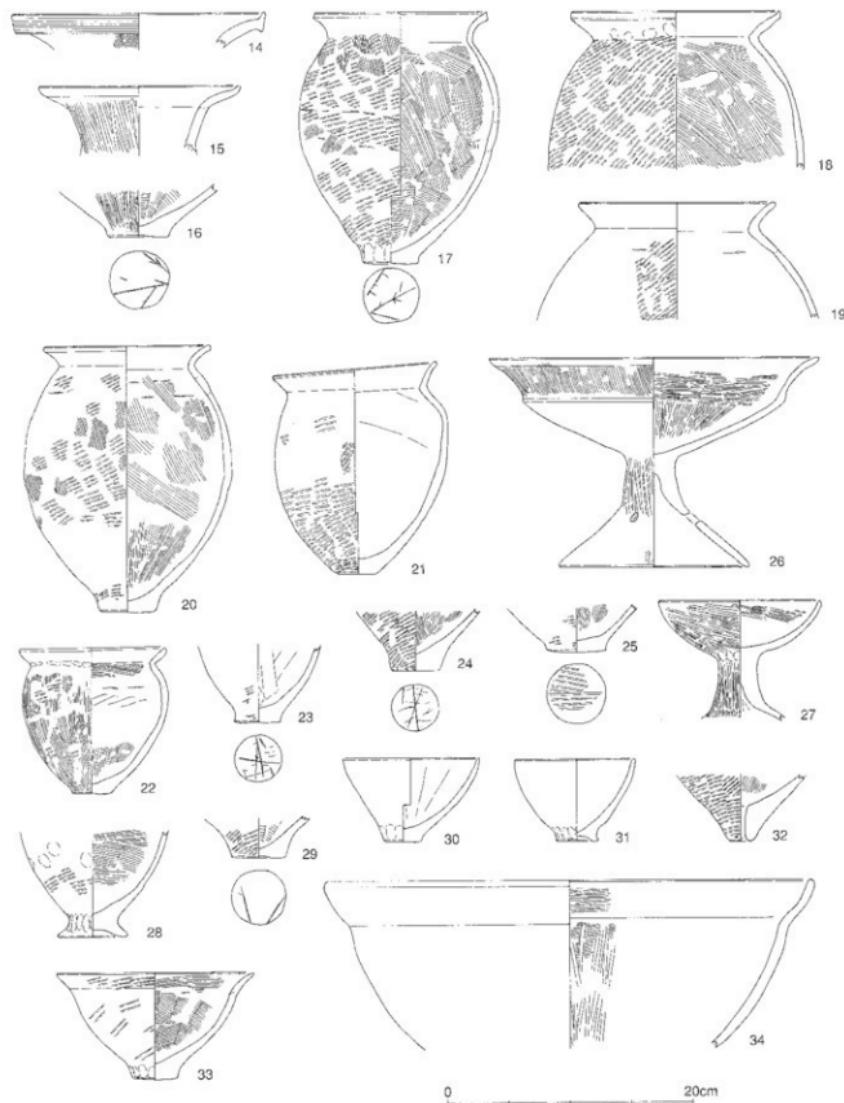


fig.18 SB208出土遺物（1）  
(20・21・30・31はSD211から出土)

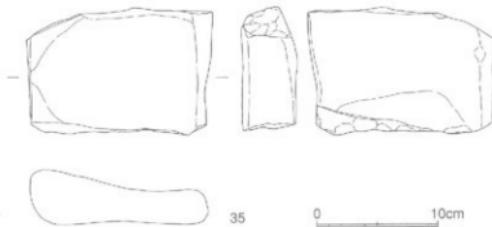


fig.19 SB208出土遺物 (2)

35

0

10cm

張り出しの機能として貯蔵場所とも考えられているが、この住居の場合は入口の扉を支えた柱穴の可能性を考えたい。<sup>25</sup>

床面にある間仕切り状の溝のうち東向きに延びる溝はSD209と切り合い、他の間仕切り状溝と異なり、住居の外まで延びている。西端と東端での比高差は0.1mを測り、排水溝の役割を果たしていた可能性が高い。また、南に延びる溝は切り合いがあることから、柱穴とともに2時期あることを示している。

そして、住居が廃絶し、堆積する過程の段階で拳大の石が甕・高坏（22・26）とともに出土している状況が確認され、その付近には同じ高さで焼土層が広がっていた。土器は完形であることから、人為的に置いた可能性が高い。

SB208の周囲には住居を取り巻くように溝を検出した（SD210・211）。幅0.12～0.42m、深さ0.2mを測り、住居との距離は3.2～5.0mを測る。住居の北西では溝を検出できなかったが、排水を目的としたものと考えられる。住居の北東側の溝からは甕・鉢がほぼ完形の状態で出土している（20・21・31）。張り出しを意識したものであろうか。

出土した遺物には、壺14～16、甕17～25・29、高坏26・27、鉢28・30～34、砥石35がある。

14は口径20.4cm、口縁端部に3条の凹線を施す。15は口径16.2cm、屈曲する口縁部をもち、外反した後、端部を上方につまみあげる。

甕は口縁端部に面をもち、上方につまみあげるもの（17・18）、面をもたずに丸く收めるもの（19～21・22）に分けられる。17は中型の甕で、口径14.0cm、器高20.6cmを測る。体部外面はタタキの後、上半部には部分的にハケ調整を施す。20は体部中位に最大径をもつ長胴の甕で、口径13.6cm、器高21.8cmを測る。体部外面はタタキの後、細かいハケ調整

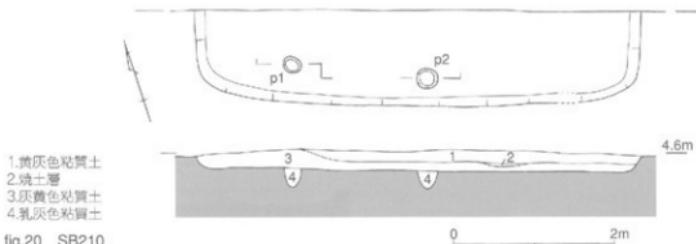


fig.20 SB210

を部分的に施す。21は底部のつくりがやや甘い小型の甕で、口径13.4cm、器高16.8cmを測る。体部下半部内面はナデ調整である。22は口径11.8cm、器高12.0cm、ほぼ完形の小型の甕である。体部はやや丸みをもっている。頸部外面はユビオサエによって整形している。25は底部外面にタタキを施した甕である。

26は屈曲部をもつ高坏で、口縁部は大きく外反し、端部は丸く收める。脚部のスカシ孔は3方向から穿孔する。坏体部外面は摩滅のため調整不明であるが、口縁部はハケ調整を施す。27は楕形の高坏で、外面はヘラミガキを密に施す。

鉢は低い脚台をもつもの（28・31）、平底のもの（30・33）、有孔のもの（32）がある。30・31は楕形の鉢で、外面はナデ調整である。「く」字形の頸部をもつ33は、口径16.0cm、器高8.7cmを測る。底部がしっかりしている。34は大型の鉢で、頸部が屈曲した後、口縁部はやや内弯し、端部は丸みをもつ。

35は重量930.7g、比重2.45を測る砂岩製の砥石である。

SB210 VI区で南辺を検出した方形の竪穴住居である。一辺5.5m、壁高0.25mを測る。柱穴を2基もつ。直径0.2m、深さ0.2mを測る。遺物は弥生土器の破片が少量出土しているが図化できない。

SB211 VII区で検出した長方形の竪穴住居である。長径4.0m、短径0.3m、壁高0.2mを測る。柱穴は確認できていない。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は弥生土器の破片が少量出土しているが図化できない。規模から考えて居住を目的としたものではなく、小屋状の付属施設と考えられよう。

SB213 VII区で南北半分を検出した隅丸方形の竪穴住居である。一辺5.6m、壁高0.2mを測る。柱穴4基と、貯藏穴と考えられる土坑1基をもつ。この土坑の北側は調査区外へ拡がる。床面から深さ0.15mを測り、5cmの大の小砾を貼った堤をもつ。底面に砾は見られない。土坑内からは鉢がほぼ完形の状態で出土し（40）、土坑付近からも壺が完形で出土している（36）。その他、埋土からは甕が出土している。

柱穴は2基ずつが並列していることから、建て替えが想定できる。柱穴の埋土は炭化物を多く含んでいた。柱穴は直径0.3m、深さ0.4～0.7mを測る。

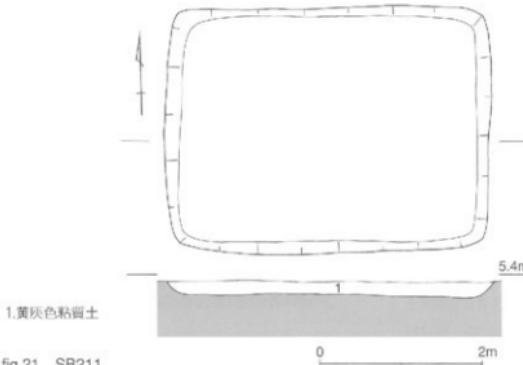


fig.21 SB211

コナラ亜属の炭化した材が1点床面より出土している。建築材に利用されたものと考えられる<sup>(3)</sup>(図版49)。

36は完形の直口壺で、口径7.4cm、器高14.3cmを測る。扁球形の体部をもち、口縁部は外反する。底部は形骸化し、わずかに突出する。口縁部は内外面ともにナデ調整である。37は口縁端部外面に2条の凹線を巡らす要で、口径は17.4cmを測る。

39は口径17.8cm、口縁端部に4条の凹線をめぐらす鉢で、体部外面は摩滅のため調整不明である。40はほぼ完形の鉢で、口径18.4cm、器高8.0cmを測る。口縁部は短く屈曲した後、斜め上方につまみあげる。内面はヘラミガキが施されているが、摩滅が著しく方向は不明である。底部外面に木葉压痕を残す。

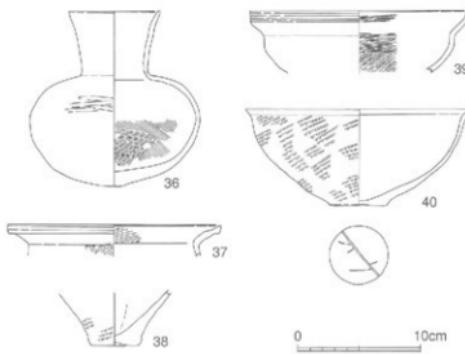
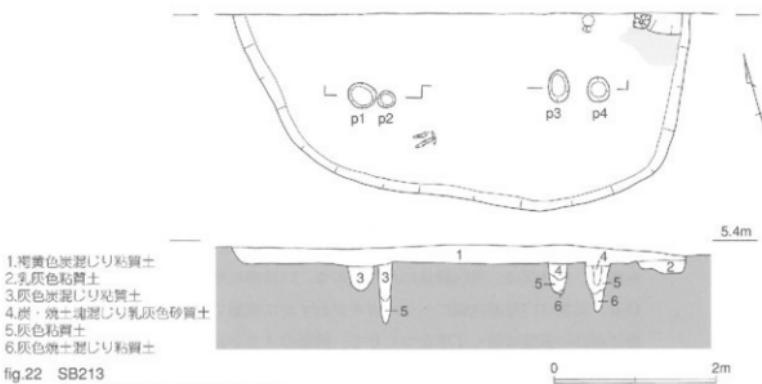


fig.23 SB213出土遺物

SB215 Ⅹ区で北辺を検出した隅丸方形の竪穴住居である。壁高は0.3mを測る。ベット状遺構、周壁溝、柱穴2基を検出した。この竪穴住居は垂木と考えられる炭化木材が、南北方向に並行して多数出土しており、焼失住居であると考えられる。

ベット状遺構は床面から0.15m高いが、貼床ではない。柱穴は直径0.3m、深さ0.6mを測る。壺・甕・鉢・器台が出土している。検出した弥生時代の遺構の中では最も新しいと考えられる。

炭化木材のサンプルは15点あり、そのうちS-1~6、8~15は住居の中心から放射状に検出されており、おそらく垂木に使用されていた材であると推定される。またS-7も住居内床面にて出土し、おそらく建築材であったものと考えられる<sup>(1)</sup>(図版49)。

結果、S-1~6、8~15はコナラ垂木であることがわかった。いずれも直徑が10cm程度しかなく乳圓外小道管の配列が未発達であり、クスギ・アベマキ・コナラの判別は困難であった。コナラは特に弥生時代以降の自然環境・用材の変化を要因として、植生の優位性が挙げられ、SB215の建築材としての利用もこれを反映したものであると考えられる。

S-7はマツ科マツ属と考えられる。マツ林もコナラ同様、弥生時代以降の林地開発に伴う二次林化による植生であり、周辺に生育していたものを利用したものであろう。

壺41は口径9.2cm、棒状の浮文を貼り付けている。42は口径13.0cm、器高19.1cmを測る甕で、やや球形化した体部をもち、口縁部は外反した後、丸く收める。

43は形状から「漆路刑器台」とよばれる器台と考えられる<sup>(1)</sup>。口径20.9cm、器高23.8cmを測る。受け部は二重口縁状にたちあがり、口縁部は外反する。脚部は内弯気味に長く延びる。調整は口縁部内面にヘラミガキがわずかに確認できるが、摩滅のため不明である。特に脚部の器壁は薄く丁寧なつくりで、脚部のスカシ孔は4方向から穿孔する。

44~51は鉢で、椭形の体部をもつもの(44~49)と、「く」字形の頭部をもつもの(50・51)に分けられる。また椀形の鉢は口径と器高が同じくらいのもの(44・45)と、口径が器高の二倍近いもの(46~49)に分けることができる。44の調整は摩滅のため不明で、床面から出土している。46は口径16.7cm、器高6.9cm、底部が平底で突出する。47はほぼ完形で口径12.0cm、器高6.4cmを測る。外面にタタキが残る。48は口径18.4cm、器高8.4cm、49は口径21.6cm、器高10.0cm、どちらも底部の形骸化が著しく、粘土紐接合痕が残る。50は口径19.7cm、器高8.9cm、頭部が屈曲した後、口縁部がやや内弯する。体部外面の調整は摩滅のため不明であるが、口縁部と体部内面にはヘラミガキを施す。51は頭部が屈曲した後、口縁部が大きく外反する。体部の内外面にヘラミガキを施すが、摩滅のため方向及びミガキ幅が不明のため図化していない。口径25.0cm、器高11.2cmを測り、胎上に砂粒を多く含む。

SB220 Ⅹ区で北半分を検出した長方形の竪穴住居である。SD221に切られる。短辺3.0m、長辺3.8m以上、壁高0.2mを測る。ベット状遺構、柱穴1基をもつ。

ベット状遺構は深さ0.1mと浅く不整形である。柱穴は直径0.3m、深さ0.3mを測る。高塙が出土している。

52は口径11.8cm、器高8.1cmを測る。浅い坏体部をもち、口縁部は外反して丸く收める。やや器壁が厚く、脚部は6方向から穿孔する。

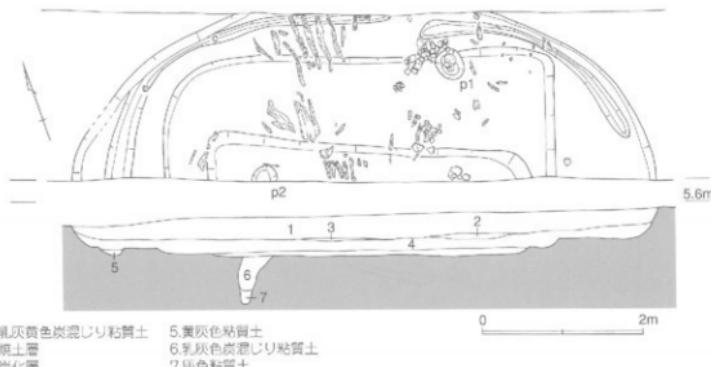


fig.24 SB215

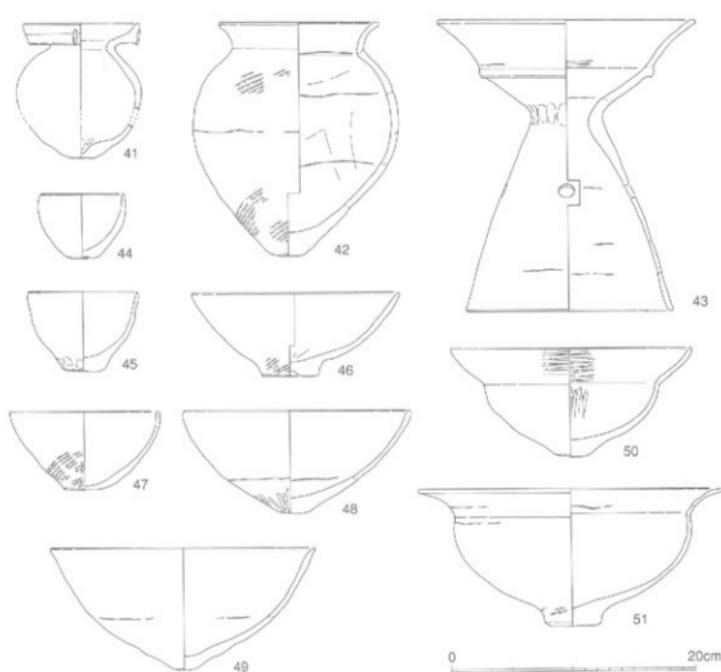


fig.25 SB215出土遺物

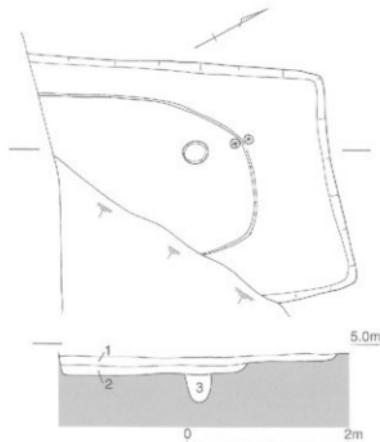
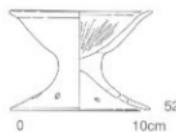


fig.27 SB220出土遺物



1. 黄灰色炭・細砂混じり砂質土  
2. 香灰色炭混じり砂質土  
3. 香灰色粘質土

fig.26 SB220

SB221 III区で検出した。長辺4.3m、短辺3.8m、壁高0.1mを測る長方形の竪穴住居である。中央土坑、主柱穴2基、ピット1基、周壁溝をもつ。SD222に切られる。

中央土坑は直径1.2m、深さ0.2mを測り、床面より高さ0.1mを測る周堤をもつ。中央土坑の埋土には炭を多く含み、炭化したモモ核の破片が出土している(図版49)。中央土坑付近には土器片が散乱していた。

主柱穴と考えられるp1・2は、直径0.5m、深さ0.4mを測る。p3は直径0.2m、深さ0.2mを測る。壺・甕・鉢・飯蛸壺が出土している。

p3は口径17.2cmを測る広口壺で、短い筒状の頸部から大きく外反する口縁部をもつ。口縁端部は上下に拡張する。54・55は底部である。

56は口径16.1cm、器高22.2cmを測る甕である。体部最大径は中位にあり、体部は丸みをもつ。口縁端部は面をもち、底部は平底で厚い。体部に粘土紐接合痕が残る。

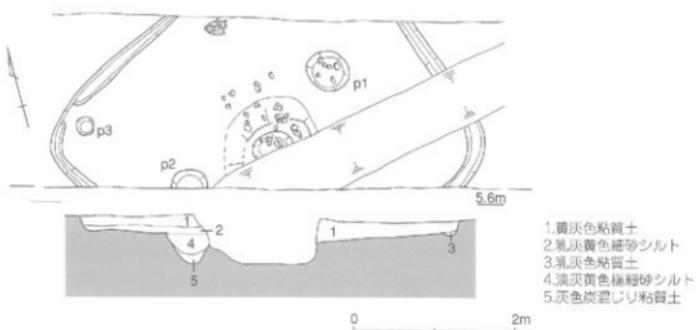


fig.28 SB221

57は大型の鉢で口径35.0cmを測る。やや屈曲した後、外反する口縁部をもつ。口端部外面はユビオサエによりやや凹む。外面調整はタタキの後、体部にはヘラミガキを施す。内面はヘラミガキを密に施す。

58は口縁部が梢円形の飯蛸壺で、外面はナデ調整を施す。孔径は1.5cmを測る。

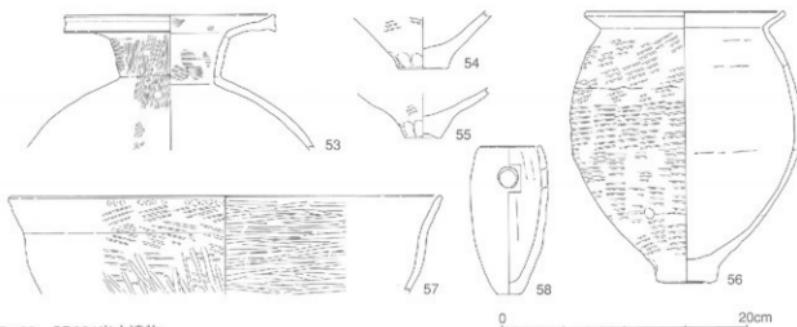


fig.29 SB221出土遺物

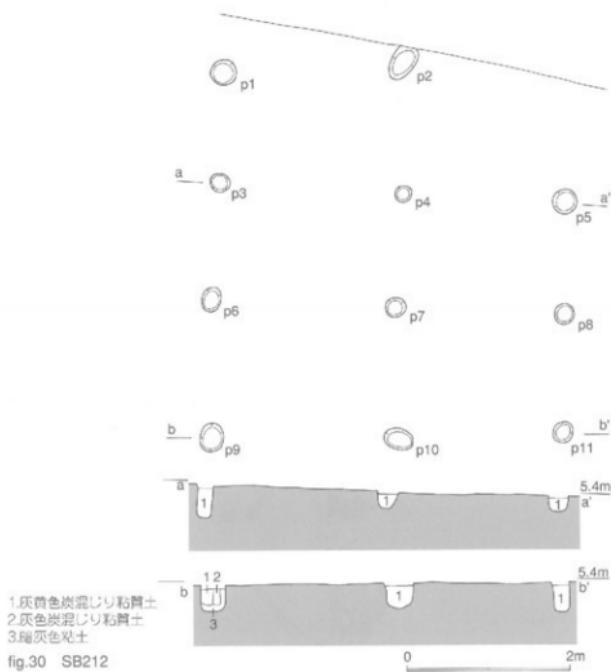


fig.30 SB212

## (2) 挖立柱建物

SB212 VII区で検出した3間×2間の南北棟の総柱掘立柱建物である。建物規模は4.5×4.8mを測る。柱間は芯々距離で梁行2.0~2.3m、桁行1.4~1.7mを測る。桁行はN84° 30'である。柱穴は直徑0.2~0.3m、深さ0.2~0.4mを測る。遺物は少量の破片しか出土しておらず、時期は確定できないが、柱穴の埋土から弥生時代と考えられる。

## (3) 溝

SD206 II区で検出した。SB204と切り合う。幅0.6~1.2m、深さ0.1mを測る。埋土は淡灰褐色粘質土・淡灰黄色粘質土で、底面は平坦である。甕・鉢が出土している。

甕の口縁部59・60は、どちらも端部に面をもち、上方につまみあげている。63は小型の鉢で、口径6.4cm、器高5.2cmを測る。

SD209 III・VII区で検出したSB208と切り合う東西方向の溝である。長さ13.6m、幅0.7~0.8m、深さ0.6mを測る。断面はU字形を呈し、埋土は炭混じりの粘質土である。底面は砂礫層に到達しており、湧水が見られた。底面の東側は西側より低く、比高差は0.3mを測る。埋土を水洗選別したところ、ハエ科の蛹と考えられる遺存体を検出した(図版49)。

溝の中からは完形やほぼ完形の甕・甕・高环・鉢がおおよそ50個体出土している。土器の大半は下層埋土である灰青色石混じり粘質土から出土し、溝の中央から東側に偏って出土している。最も多い器種は甕で、甕の胴部下半にはすの付着や、吹き零れの痕跡が確認できることから、大半の甕は使用していたと考えられる。また、甕は完形のものが多いが、高环や鉢は破片での出土が大半であった。甕は特に大型品で完形が多く、上庄で歪んでいるものが多い。微高地上の竪穴住居が集中する場所でこの溝が検出されたことからも、何らかの祭祀的意味合いをもってこれらの土器が廻棄されたと考えられる。

その他、飯蛸壺・皮袋形土製品、砥石が出土している。

壺は広口壺(64~74)と、直口壺(76~78)がある。広口壺は筒状の頸部をもつもの(67・72・73・74)と、「く」字形の頸部から斜め上方に拡がる口縁部をもつもの(66・

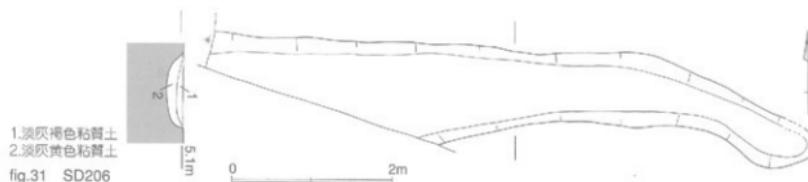


fig.31 SD206

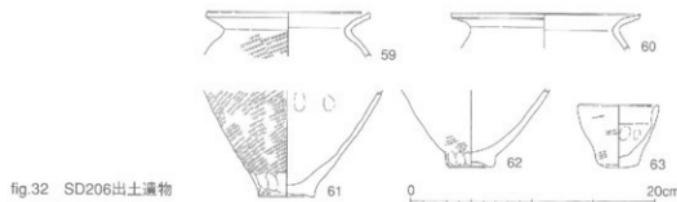
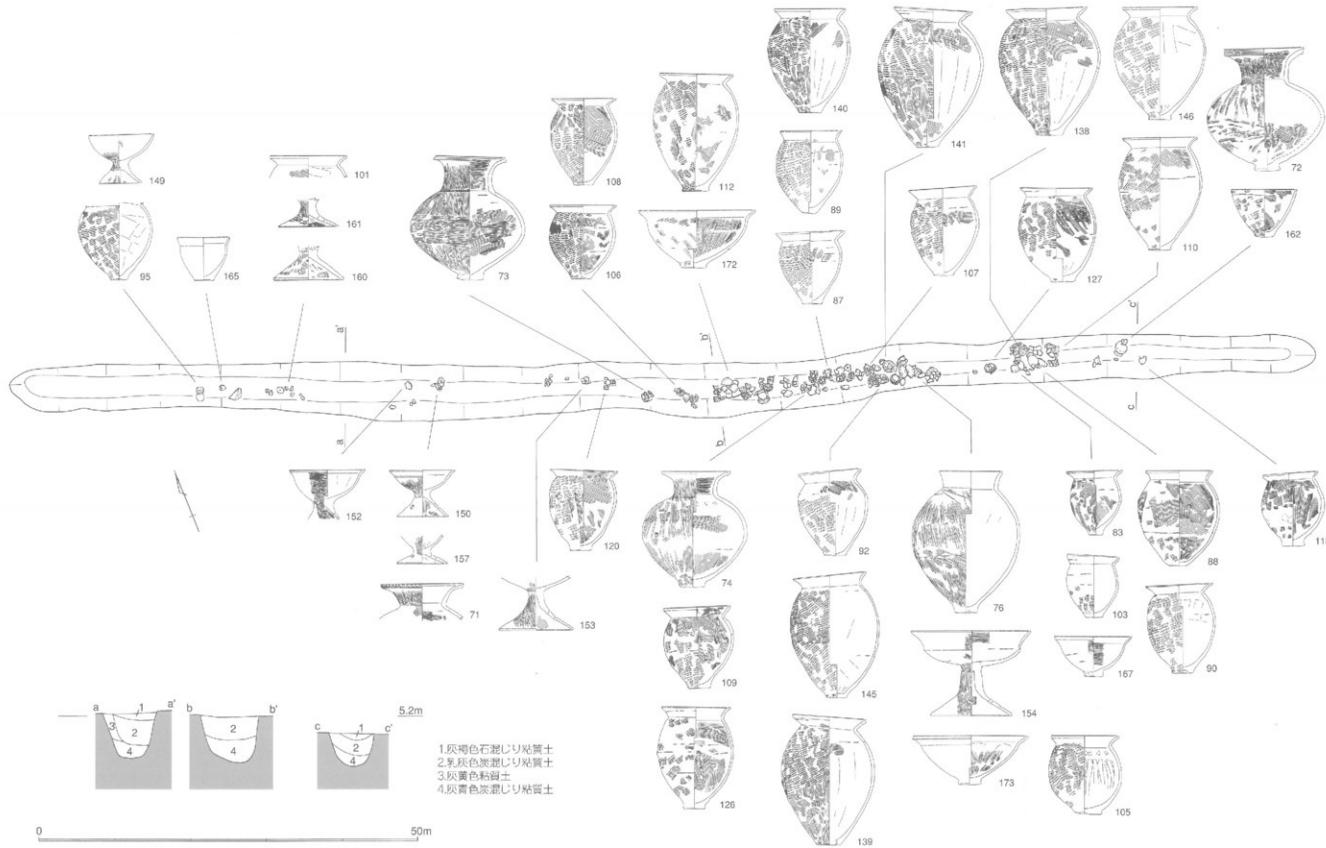


fig.32 SD206出土遺物



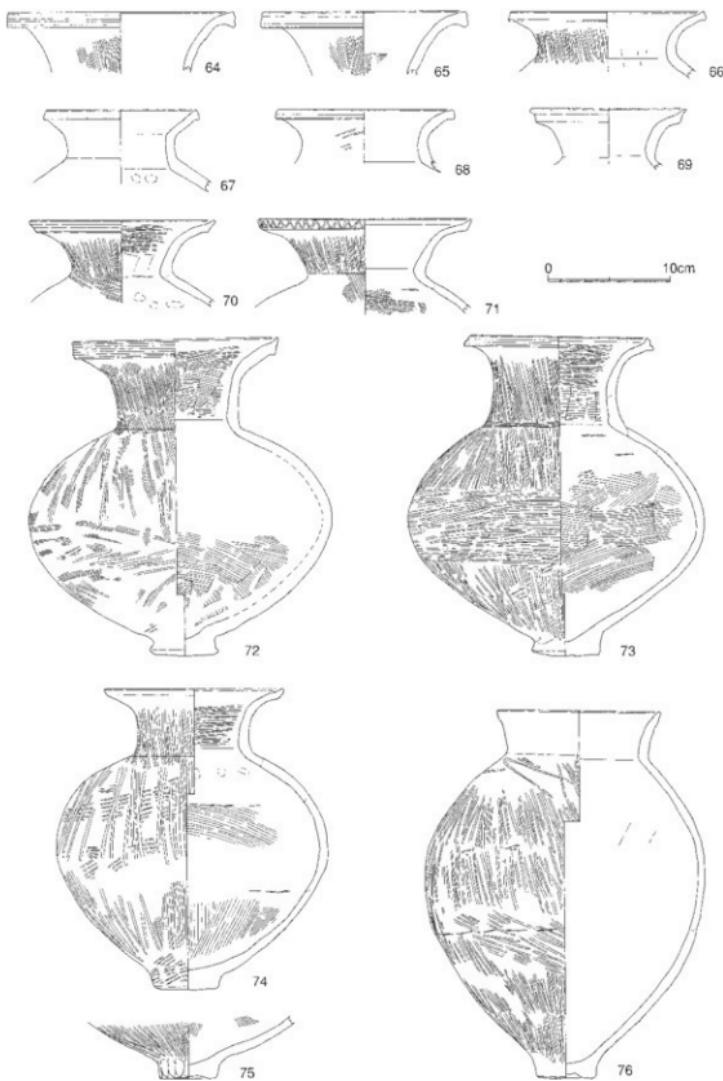


fig.34 SD209出土遺物（1）

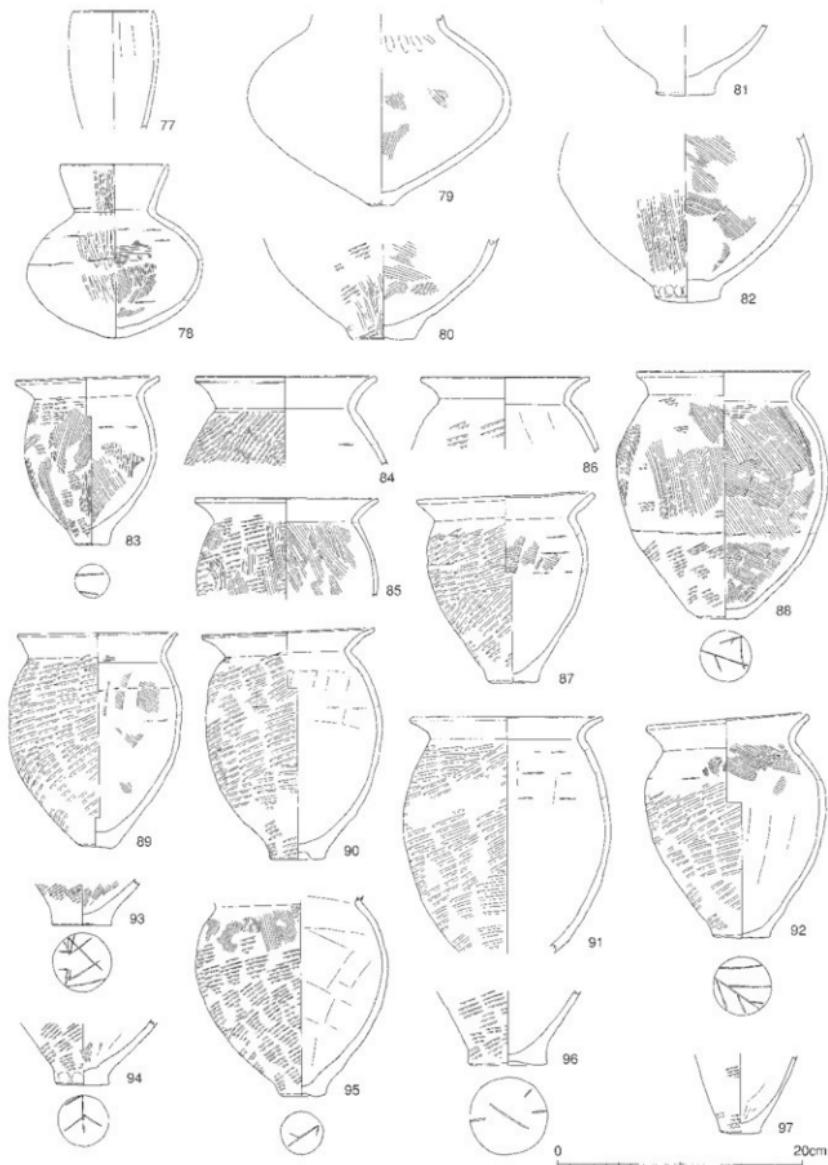


Fig.35 SD209出土遺物（2）

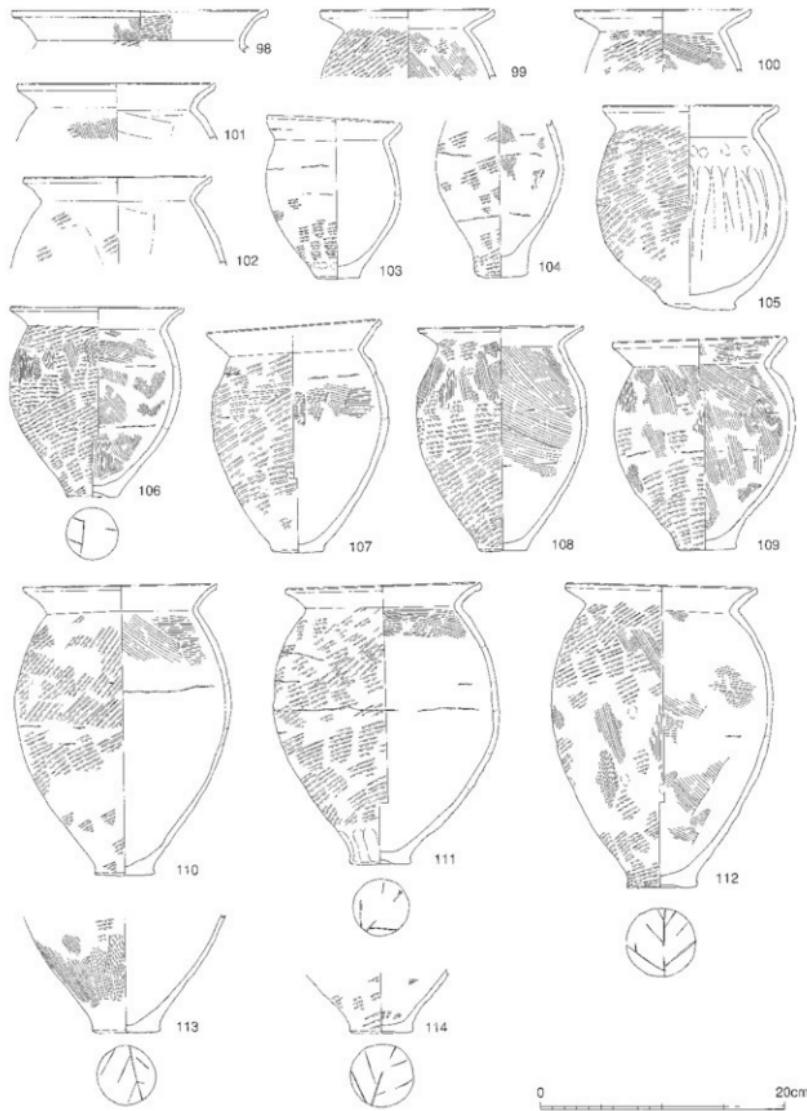


fig.36 SD209出土遺物（3）

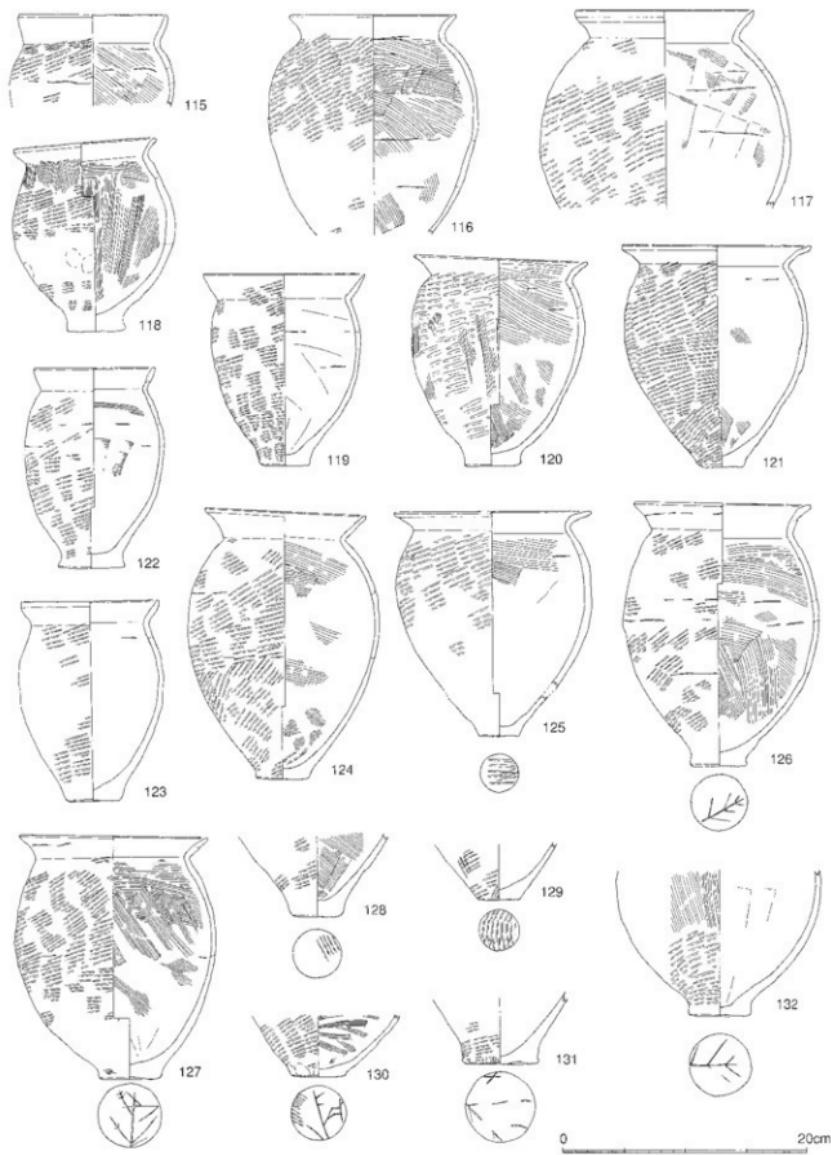


fig.37 SD209出土遺物（4）

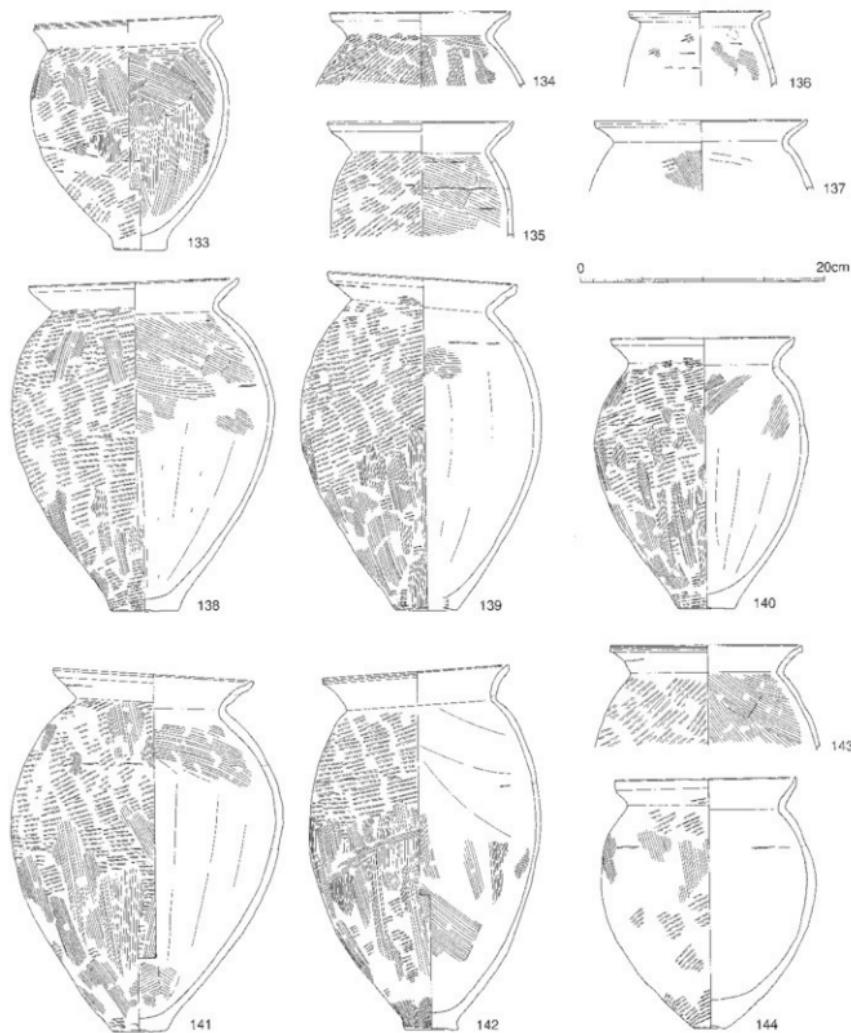


fig.38 SD209出土遺物（5）

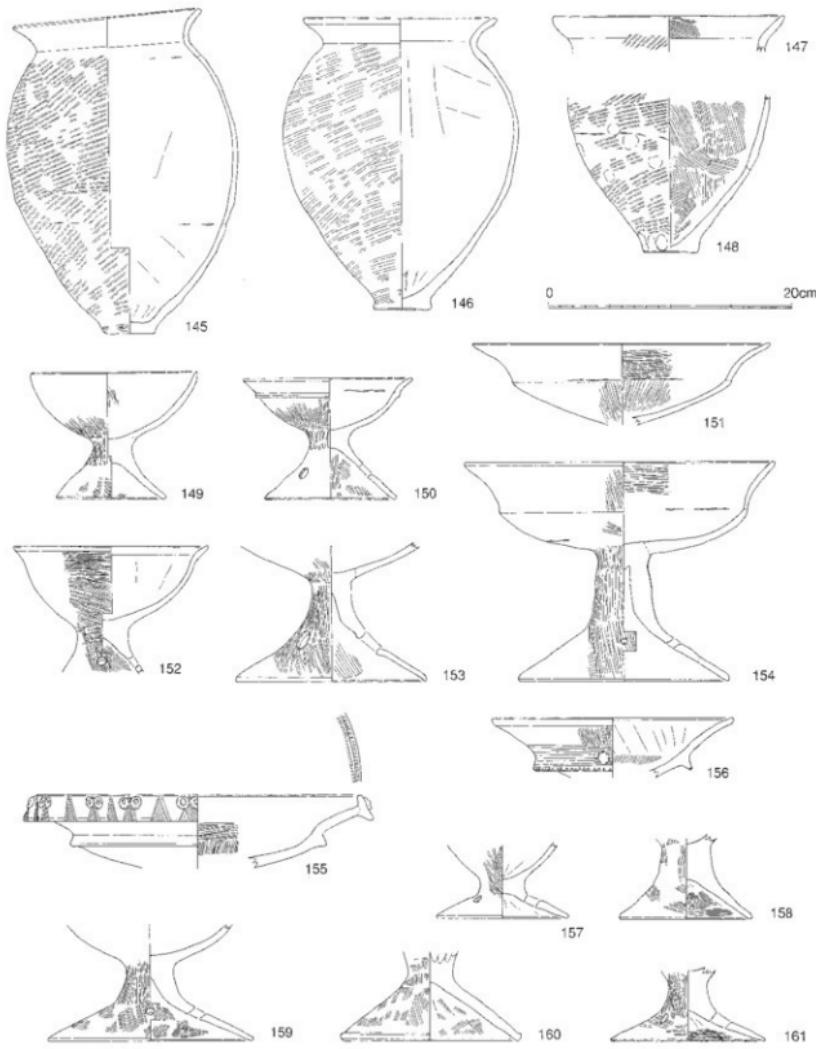


fig.39 SD209出土遺物（6）

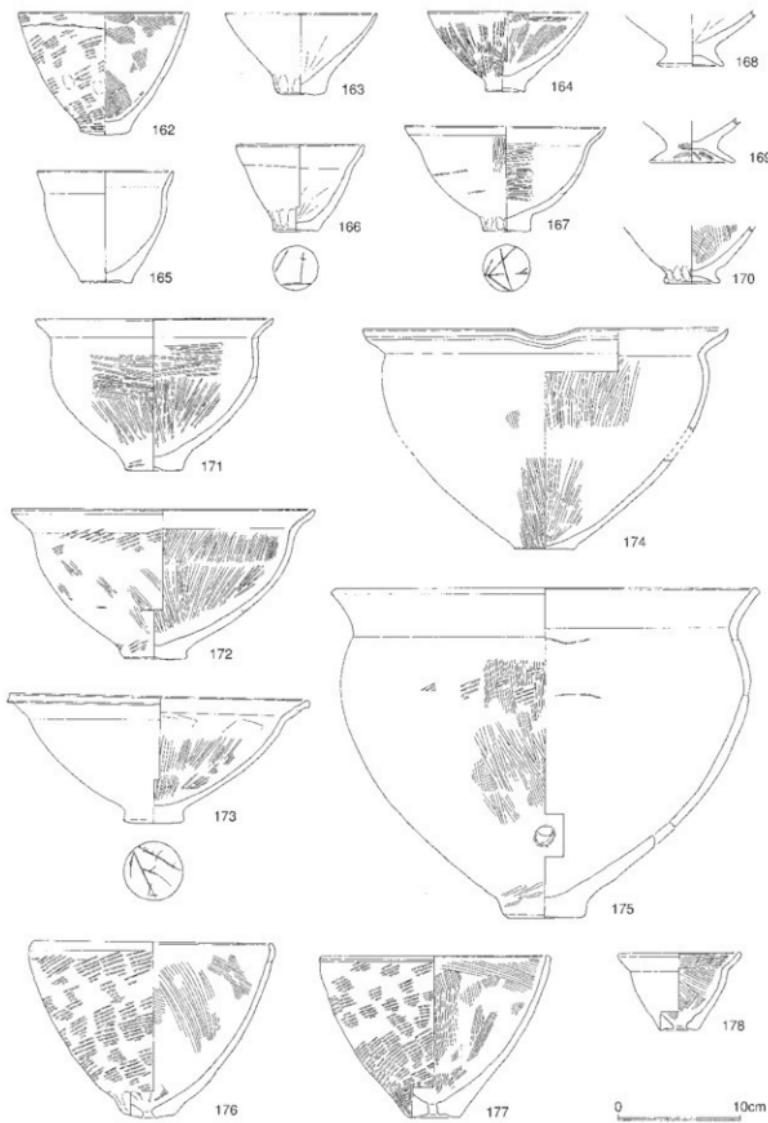


Fig.40 SD209出土遺物（7）

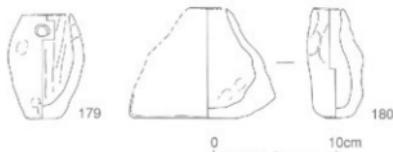


fig.41 SD209出土遺物 (8)



fig.42 SD209出土遺物 (9)

70・71)に分けられる。64は口縁端部外面に2条の凹線を施し、71は口縁端部外面に2条の沈線で波状文を施す。72は扁球形の体部をもつ完形の壺で、口径16.9cm、器高25.9cmを測る。口縁端部外面に3条の凹線を施す。体部と頸部の外面は、ハケ調整の後へラミガキを施す。73は口縁端部を上下に拡張し、凹線を1条施す。口径14.4cm、器高26.2cmを測る。扁球形の体部は外面タタキの後、縦方向のヘラミガキを施し、体部最大径付近には横方向のヘラミガキを施す。74は口径14.7cm、器高24.5cmを測る。口縁部は斜め上方につまみあげ、丸く収める。底部72～75はしっかりとした突出する底部をもつ。76はほぼ完形で口径13.3cm、器高30.1cmを測る。体部外面は細かいヘラミガキを施す。78は扁球形の体部と形骸化した底部をもつ。口径8.8cm、器高14.6cmを測る。

甕は口縁部の形態から端部に面をもつもの（83～92・98～112・145・146）、端部を丸く収めるもの（115～127・147）、端部に面をもち上方につまみあげるもの（133～141）、端部外面に凹線を施すもの（142・143）、受け口状を呈するもの（144）に分けられる。

また、大きさから器高が21cm以上の大型のもの（110～112・138～142・145・146）、器高15cm～20cmの中型のもの（87～90・92・105～109・118～123・127・133・144）、器高15cm以下の小型のもの（83・103）に分けられる。大型と小型の甕は、中型の甕に比べて破片の残存率が高く完形になるものが多い傾向がみられた。

さらに、外形から体部最大径が上半部にあり、肩部のはるもの（107・108・110・125・133・138・140・141）、体部最大径が中位にあり、長胴形を呈するもの（112・124・126・139・142・145）、体部に丸みをもつもの（105・106・109・117・118・144）に分けることができる。丸みをもつものの割合は低い。

また、体部の外面調整はタタキの後、ハケ調整を体部全体に粗く施すもの（83・112・138・140・141）、主に上半部に施すもの（88・92・95・106・108・109・118・120・133・144）、主に下半部に施すもの（139・142）、ナデ調整を施すもの（103・112・118・126）、タタキの後調整を施さないものに分けられる。タタキはすべて右上がりに施し、原体に粗密がある。

その他、底部はしっかりした平底のものや突出したものと、やや形骸化傾向にあるものに分けることができる。形骸化した底部の割合は低い。

底部外面の圧痕には木葉圧痕が残るもの（88・92～96・106・111～114・126・127・130

～132) と、タタキを施すもの (125・128～130) がある。

高环は環部が楕形の (149) と、屈曲部をもち環部が体部と口縁部に分かれるもの (150～152・154)、加飾する口縁部をもつもの (155・156) がある。

149・150はほぼ完形で、149は口径13.6cm、器高10.3cmを測る。150は口径13.9cm、器高9.8cmを測る。環体部と口縁部は段によって分かれ、脚部のスカシ孔は3方向より穿孔する。151は屈曲部から大きく外反し、環体部は浅い。152は楕形の環体部から屈曲する口縁部をもつ。154は口径25.5cm、器高18.0cmを測る。環部と脚部の接合は挿入付加法による。155は上下に拡張する口縁部外面に鋸齒文を施した後、2個／対の円形浮文を16単位施し、端部内面には半截竹管を2列施す。156は口径19.8cmを測る加飾の高环である。円形浮文を屈曲部に貼り付け、刻み目3個/cm、半截竹管文4個/cmを施す。

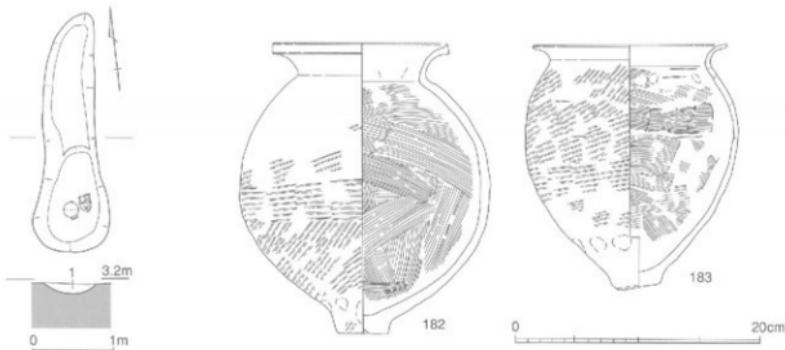
159～161は脚柱部と脚裙部の境界が明瞭で、脚裙部は外反して広がる。152・154・159のスカシ孔は4方向、153・157・161のスカシ孔は3方向より穿孔する。

鉢は楕形で単純口縁のもの (162～164)、「く」字形の頸部をもつもの (165～167・171～175) があり、大型・中型・小型に分けられる。その他、底部が有孔のもの (176～178) がある。168～170は低い脚台をもつ。174は片口鉢で口縁部は面をもち、つまみあげている。175は口径34.3cm、器高27cmを測る大型である。体部下方に焼成後1箇所穿孔する。使用していないのであろうか。166・167・173は底部外面に木葉压痕が残っている。

179は飯蛸壺で、口径4.0cm、器高8.5mを測る。孔径は1.1cmを測る。180は皮袋形土製品である。器高9.0cm、幅4.2cm、内外面ともにナデ調整である。

181は重量4.08kg、比重2.8で、凝灰岩製の砥石である。

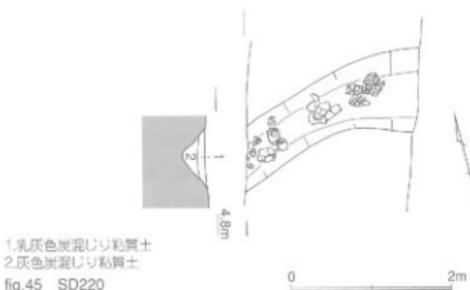
SD218 X区で検出した南北方向の溝である。長さ2.9m、幅0.6～1.0m、深さ0.1～0.3mを測る。埋土は灰黄色粘質土で、断面は緩やかなU字状を呈する。底面は北から南に傾斜しており、南端の最も深い部分から、壺・甕がほぼ完形の状態で出土している。



1.灰黄色粘質土

fig.43 SD218

fig.44 SD218出土遺物



182は口径14.3cm、器高23.7cmを測る。体部最大径を中位にもち、球形を呈する。口縁部は短く外反し、端部は面をもって上方につまみあげる。底部は平底で厚みがある。体部上半部の外面はタタキの後、ナデ調整を施す。

183は口径15.8cm、器高19.8cmを測る。体部最大径は上半部にあり、やや球形の体部をもつ。口縁部は大きく外反した後、端部を丸く収める。胎土が粗い。

SD220 1Ⅲ区で検出した東西方向の溝である。東に隣接したⅣ区には続いていない。幅0.7~1.0m、深さ0.3mを測り、断面は緩やかなU字状を呈す。埋土は乳灰色炭混じり粘質土、灰色炭混じり粘質土である。甕・高环・鉢・器台がまとめて出土している。

甕は口縁部の形状から、口縁端部に面をもつもの（185~187）、やや上方につまみあげるもの（184・188）、丸く収めるもの（189・190）に分けられる。186の甕を除いて、いずれの甕も最大径を体部上半部にもつが、球形化が著しい。186は中位に体部最大径をもつ。また、いずれの甕も体部上半部外面にはタタキの後、ハケ調整を施す。188は外面全体にハケ調整を施す。内面はハケ調整のもの（186・187・189）とナデ調整のもの（185・190）がある。内面に粘土紐接合痕を残すものが多いが、外面のタタキは細かく、丁寧なつくりである。

また、甕の底部は平底で厚く、しっかりとしたつくりである。185・189・190には底部外面に木葉圧痕が残り、191の底部外面にはタタキが施されている。

193は口径16.8cmを測る高杯で、段をもって屈曲した後、大きく外反する口縁部をもち、端部は丸く収めている。調整は摩滅のため不明である。

鉢195は口径12.2cm、器高7.0cmを測る。やや内湾する口縁部をもつ。内外面ともにナデ調整である。

196は口径21.2cm、器高16.7cmを測る器台である。3段のスカシ孔を4方向より穿孔する。外面はヘラミガキを密に施し、丁寧なつくりである。

#### (4) 土坑

SK209 Ⅶ区で検出した。SR01と切り合うため、西側は削平される。不整形な形状を呈し、長径2.0m、短径1.7m、深さ0.1mを測る。底部は平坦で、北側にピットを2基もつ。ピットの直徑は0.3~0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は茶灰色炭混じり粘質土上で、甕が出土している。

197は口径14.0cmを測る。器壁は厚く、口縁端部は丸く収める。調整は摩滅のため不明

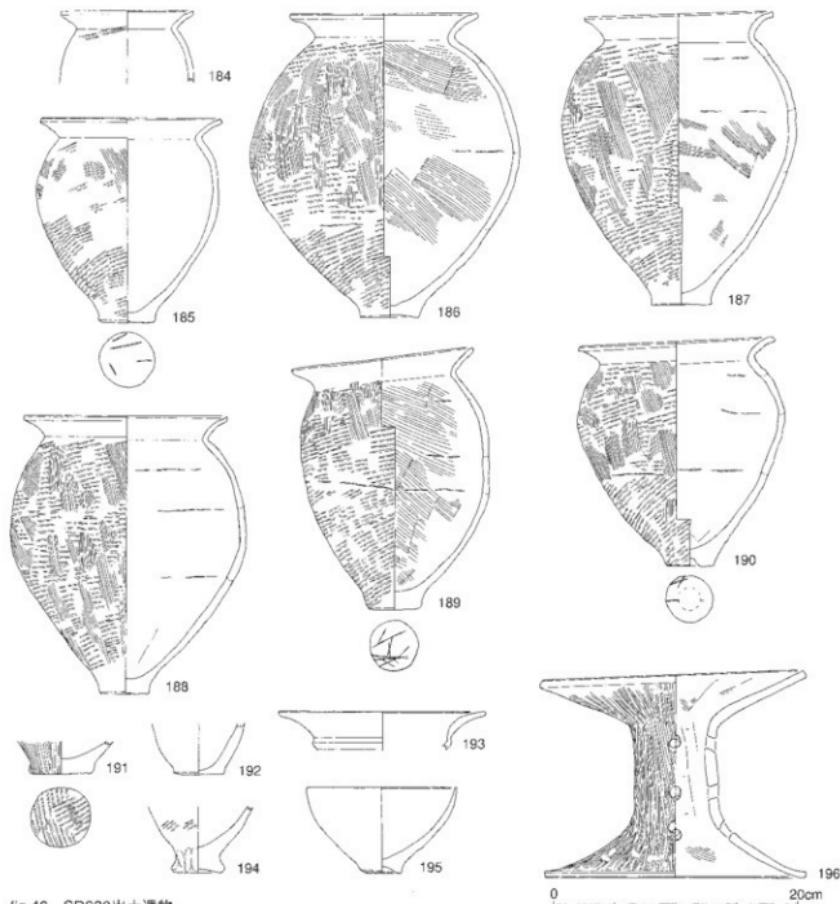


fig.46 SD220出土遺物

である。198は平底の壺で、底部外面はユビオサエを施す。

SK211 VII区で検出した。長径1.0m、短径0.7m、深さ0.1mの楕円形を呈する。底面は平坦で、緩やかにたちあがる。ピットを1基もち、直径0.14m、深さ0.14mを測る。埋土は乳灰黄色炭混じり粘質土で、SB208を取り巻くSD210の延長上にあることから、SB208と同時期に存在した可能性が考えられる。壺・甕・高壺が出土しており、上器の大半は摩滅している。

199は口径17.3cmを測る二重口縁壺である。頸部外面にヘラミガキが多少確認できるが、摩滅している。200は口径15.8cmを測る。口縁部端部はつまみあげて面をもつ。調整は摩

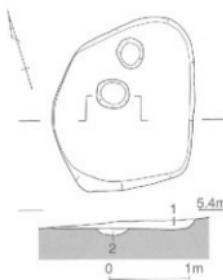


fig.47 SK209

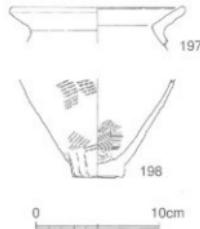


fig.48 SK209出土遺物

滅のため不明である。203は楕円形の高環で、口径15.9cmを測る。端部は丸く収める。外面はナデ調整である。

#### (5) 遺構に伴わない遺物

調査区内の遺物包含層は、0.1~0.2m程度の堆積が認められたが、遺物はあまり包含していないため、壺・甕・高環・鉢が図化できたに留まる。

壺204は口径16.8cmを測る。外反する口縁部をもち、端部は上方につまみあげている。205は口縁部が欠損している小型の甕で、体部は丸みをもつ。外面は摩滅のため調整不明、内面はナデ調整である。206は口径13.4cm、器高18.8cmを測る小型の甕である。緩やかに屈曲した後、口縁部はやや外方にのび、端部は丸く収める。

207は口径12.3cm、器高9.3cmを測る。浅い环体部をもち、口縁端部は緩やかに外反し、丸く収める。屈曲部外面に1条の沈線を施し、器壁が厚い。208は口径26.7cmを測る。屈曲して外反し、口縁端部は丸く収める。調整は摩滅のため不明である。环部と脚部の接合は挿入付加法による。209は口径9.2cm、器高7.1cmを測る楕円形の高環で、低い脚部をもつ。4方向から穿孔する。調整は摩滅のため不明である。



fig.49 SK211

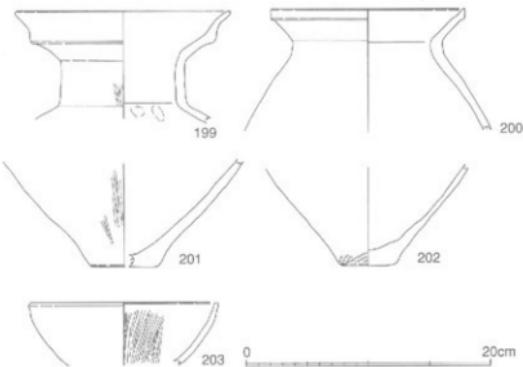


fig.50 SK211出土遺物

頸部をもつ鉢210は、口径11.0cmを測る。口縁端部は丸く收める。外面調整は摩滅のため不明である。体部内面はナデ調整である。211・212は低い脚台をもつ鉢である。211は口径9.7cm、器高6.1cmを測る。212は口径10.8cm、器高6.2cmを測る。どちらも摩滅のため調整不明である。213是有孔鉢で、外面はタタキの痕跡が残るが摩滅している。内面はハケ調整を施す。214は底部外面に柄の圧痕が残る甕である。柄の痕跡は長さ0.7cmを測る。

## II. 2. 註

(1)播磨地域に多く見られ、神戸市内では玉津田中遺跡、西神第65地点、北神第4地点で確認されているが、検出例は少ない。

山下史朗「遺構について」『六条遺跡』兵庫県教育委員会 1994

多賀茂治「玉津田中遺跡の堅穴住居について」『玉津田中遺跡 第6分冊』兵庫県教育委員会 1996

(2)中嶋昭光「堅穴住居跡について」『川除・藤ノ木遺跡 第2分冊』兵庫県教育委員会 1992

(3)島地謙・伊東隆夫「岡譲 木材組織」地球社 1982

(4)北淡路地域に多く出土している。神戸市内では玉津田中遺跡、日輪寺遺跡で出土しているが、検出例は少ない。

松下勝ほか「北淡路の遺跡」『兵庫考古第10号』兵庫考古研究会 1980

池田毅「指板附の象徴『淡路型器台』」『統文化財学論集』文化財学論集刊行会 2003

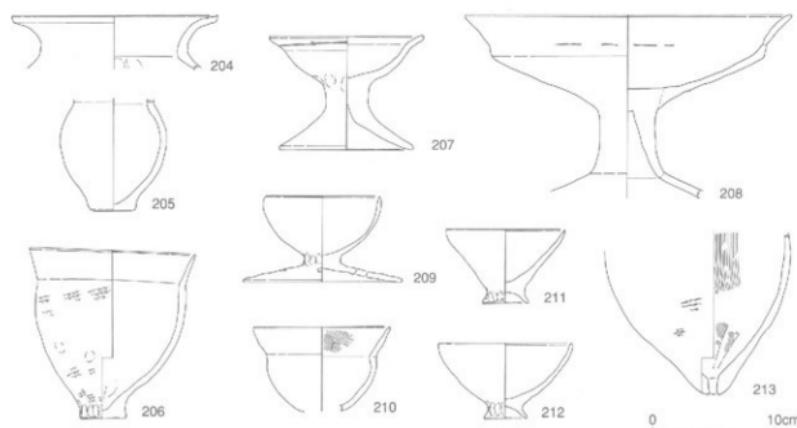


fig.51 遺構に伴わない遺物（1）

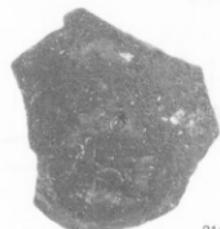


fig.52 遺構に伴わない遺物（2）

II. 通構と遺物

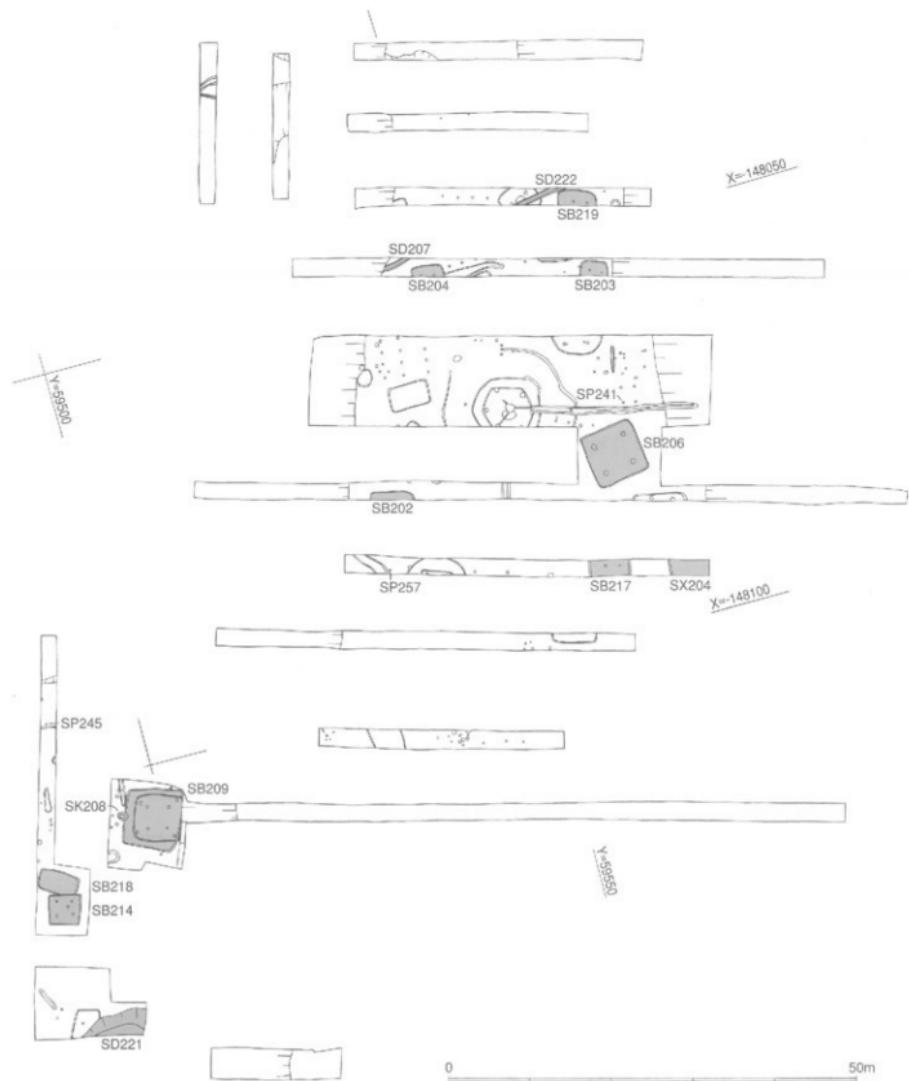


fig.53 古墳時代中期～後期の通構

### 3. 古墳時代中期～後期

時期の判明した古墳時代中期から後期の遺構は、竪穴住居9棟、溝2条、土坑・落ち込み2基、ピット4基を検出している。竪穴住居はいずれもカマドを住居の北辺か西辺にもつが、SB214と切り合うSB218だけは南辺にカマドをもつ。

#### (1) 竪穴住居

SB202 I区で北辺を検出した方形の竪穴住居である。一辺5.4m、器高0.15mを測る。カマドが北辺中央にあったと考えられるが、焼けた粘土塊と上坑を残すのみで残存状況は悪い。その中央に完形の須恵器坏身が出土していることから(217)、住居廃棄時にカマドを破壊し、須恵器を置いた可能性が考えられる。土坑は直径0.2m、深さ0.1mを測り、埋土は灰茶色炭混じり焼土である。

西辺に周壁溝、東辺に南北方向の間仕切り状の溝、柱穴を1基もつ。柱穴は直径0.5m、深さ0.1mを測る。上師器坏、須恵器坏身が出土している。

215は口径11.8cm、器高6.2cmを測る。外面に粘土紐接合痕が残る。216は口径6.8cm、器高6.9cmを測る。215・216の調整は摩滅のため不明である。須恵器坏身217は口径10.4cm、器高4.3cmを測る。たちあがりは内傾し、端部は内傾して凹状を呈する。

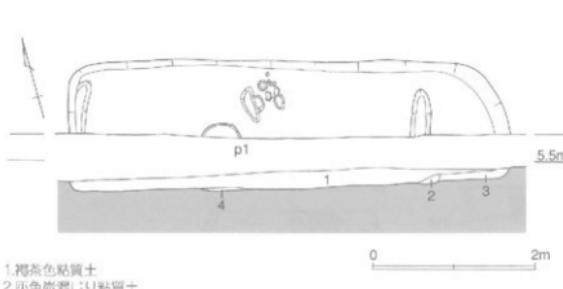


fig.54 SB202

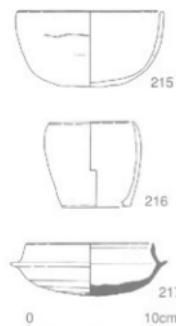


fig.55 SB202出土遺物

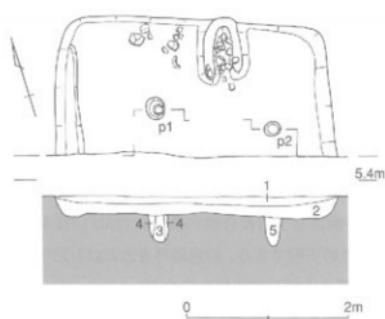
SB203 II区で北半分を検出した方形の竪穴住居である。一辺3.5m、深さ0.15mを測り、他の竪穴住居と比較して小さい。西辺に周壁溝、床面には主柱穴2基、北辺中央にカマドをもつ。カマドの袖部は周壁から住居内に0.8m延びる。燃焼部には土師器高坏を上下逆に置いて支脚としている(221)。カマド周辺からは上師器坏の破片が出土している。主柱穴はどちらも直徑0.2m、深さ0.3mを測る。その他、土師器壺・甕、須恵器坏蓋・壺が出土している。

218は口径8.6cmを測る。口縁部内面はナデ調整である。219は口径10.5cm、器高11.3cmを測る。球形の体部から「く」字形に外反する口縁部をもち、端部は丸く收める。体部下半にハケ調整を施す。体部の内外面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。220は口径14.7cm、器高15.2cmを測る。やや扁平な球形の体部から「く」字形に外反する口縁部をもつ。端部は折り曲げている。体部外面には全体にすすぐ付着している。

高坏221は口径19.0cm、器高14.3cmを測る。坏部外面はハケ調整の後、ナデ調整を施す。

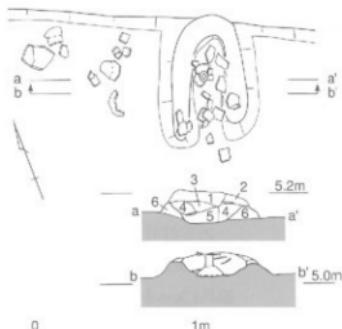
脚部外面は摩滅のため調整不明である。器壁は厚い。

須恵器壺蓋222は口径13.4cmを測る。稜は沈線を伴う程度である。223は口径11.7cmを測る。口縁端部は丸みをもつ段状の仕上げで、稜は鈍く突出する。天井部は平坦である。224は口径10.6cmを測る。体部下半はヘラケズリ調整を施すが、範囲は狭い。



- 1.茶褐色粘質土
- 2.灰色粘質土
- 3.灰色粘質土
- 4.灰黄色粘剣跡シルト
- 5.乳灰色粘質土

fig.56 SB203



- 1.淡灰色粘質土
- 2.灰褐色粘質土（焼土含む）
- 3.灰茶色粘質土
- 4.黄色粘土混じり褐黄色粘質土（焼土含む）
- 5.青灰色粘質土
- 6.褐茶色粘質土（焼土含む）

fig.57 SB203 Kamado

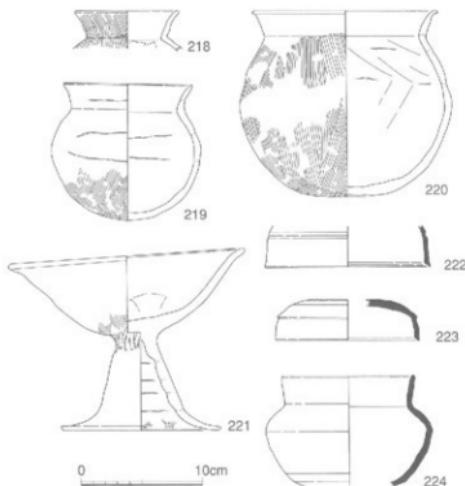
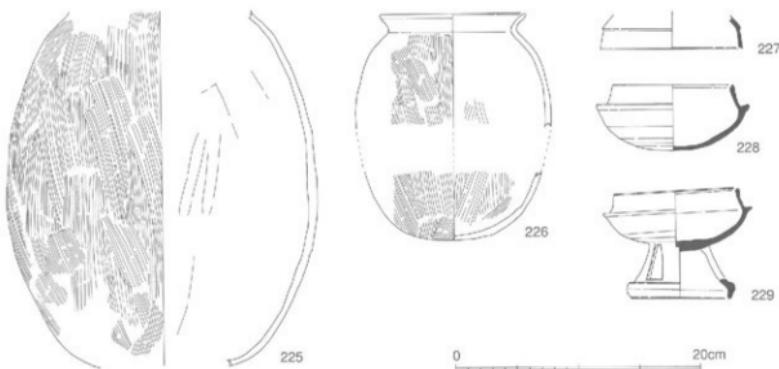
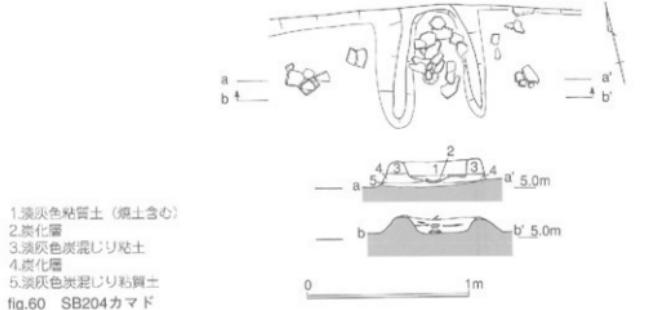
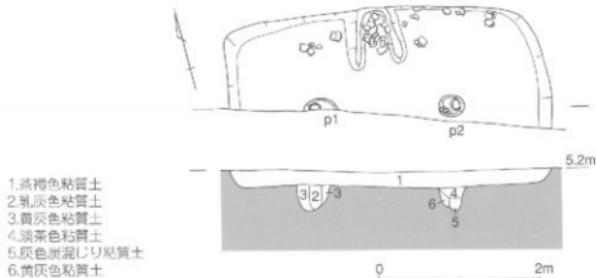


fig.58 SB203出土遺物

SB204 Ⅱ区で北辺を検出した方形の竪穴住居である。一辺4.0m、壁高0.15mを測る。主柱穴を2基もち、住居の北辺やや西よりにカマドをもつ。カマドは遺構検出面より確認でき、残存状況がよかつた。カマドの袖部は周壁から住居内に0.7m延びる。燃焼部には須恵器高



壊を上下逆に置いて支脚とし(229)、周辺からは甕の破片が出土している。p1は直径0.4m、深さ0.3mを測る。p2は直径0.3m、深さ0.3mを測る。

その他、土師器甕、須恵器壊身・壊蓋、製塙土器が出土している。

225は大型の長胴甕である。口縁部と底部が欠損している。体部最大径は25.6cmを測る。甕226は口径11.8cmを測る。内面のハケ調整は外面より粗く、工具が異なると考えられる。須恵器壊蓋227は口径11.7cmを測る。稜は沈線を伴う程度である。p1より出土している。壊身228は口径9.8cm、器高5.4cmを測る。たちあがり端部は内傾して丸く収める。丸みをもった底体部をもつ。p2より出土している。229は完形の有蓋高壊で、口径10.2cm、器高8.8cmを測る。たちあがり端部は内傾して丸く収める。脚部は短く、スカシ孔は3方向である。

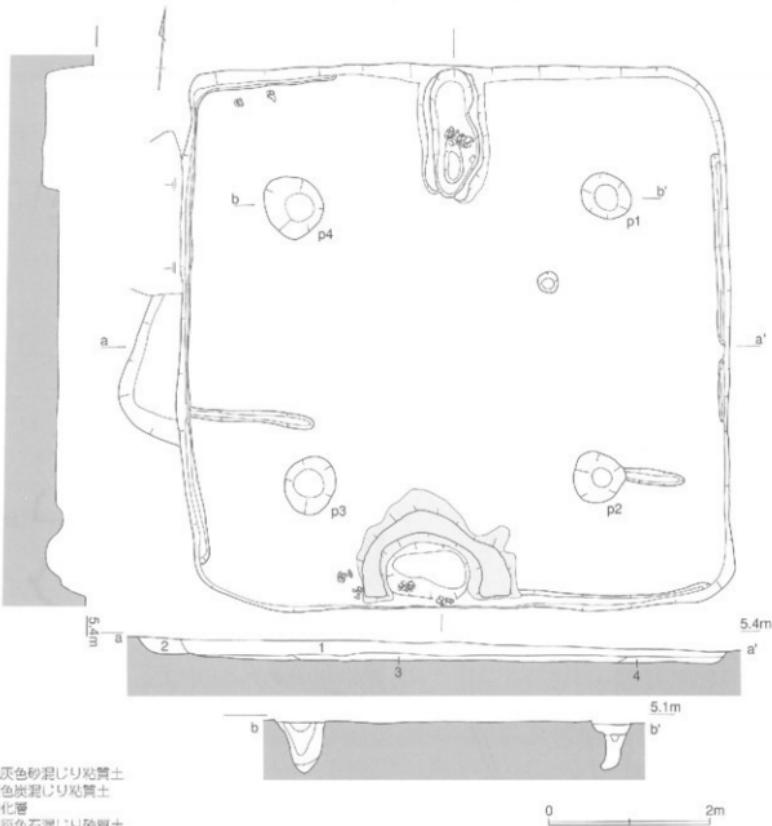


fig.62 SB206

(アミ部分は礫の広がりを示す。)

SB206

I区で南西端を検出し、III区でも北東端を検出したが、残存状況が良いため拡張を行った。一边6.6m、壁高0.2mを測る方形の竪穴住居である。北辺中央にカマドをもち、主柱穴を4基、ピットを1基、周壁溝をもつ。また住居の南辺には長径1.2m、深さ0.2mを測る楕円形を呈する貯蔵穴があり、直径2~3cm程度の小礫を土坑の周りに貼って高さ0.1m、幅0.3~0.6mの堤を作っている。貯蔵穴内に礫は見られない。貯蔵穴付近からは土師器高环の破片が多く出土している。

カマドは袖部の残存状態はよかつもの、支脚はなく、燃焼部からは土師器壺・高环の破片が出土したに留まる。袖部は長く周壁から住居内に1.7m延びる。燃焼部の

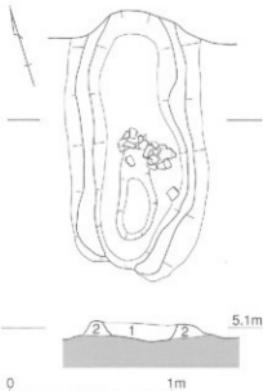
床面は深さ0.1mくぼんでおり、焼土が堆積している。カマドの底面は周壁へむかって緩やかに上っている。燃焼部の埋土からは炭化種子が出土している。直径約2.2mmのほぼ球形を呈する。エゴマ近似種と考えられる(図版49)。

周壁溝は全周しないものの、四辺に確認できた。また、深さ0.1mの浅い間仕切り状の溝を住居の南で東西方向に検出している。

主柱穴p1~p4は、直径0.6~0.7m、深さ0.7~0.8mを測り、どの柱穴にも埋土に炭化物を含む。p5は直径0.2m、深さ0.1mを測る。

住居内は床面直上に一面、厚さ0.1mの炭化層が広がっており、床面は部分的に硬く焼け固まっていたが、焼失住居にしては炭化木材等の残存状況が悪かった。炭化層については土壤水洗作業を後日実施したところ、滑石の白玉が41点出土している。白玉の多くは竪穴住居の南半から出土している。出土した土器は大半が破片で、住居の四方八方に散らばって接合している。このため、焼失した後、炭化木材とともに土器を片付け、白玉を撒く祭祀が行われた可能性が考えられる。その他、土師器壺・甕・高环・線刻のある瓶・壺、須恵器壺蓋・製塙土器が出土している。

230は口径18.4cm、外反する口縁部の中位に段をもつ。内外面ともにナデ調整である。231は口径18.2cm、口縁端部は面をもち、鈍い凹状を呈す。232は口径12.2cm、外面はナデ調整である。233は口径15.6cmを測る。外面は縦方向のハケ調整で、口縁部のみ縦方向の後、横方向のハケ調整を施す。234は口径16.0cm、口縁部は外反し、端部は上方にややつまみあげて面をもつ。内外面ともにナデ調整で、体部には粘土組接合痕が残る。235は口径16.2cm、外面はハケ調整の後、ナデ調整である。236は口径5.5cm、器高10.4cmを測る。球形の体部をもち、口縁端部は丸く取めるが、口縁部内面は板ナデ調整により凹む。237は口径17.2cm、器高14.6cmを測る。カマド内と貯蔵穴から破片が出土し、接合する。口縁部と体部の外面はナデ調整である。238は口径17.8cm、調整は摩滅のため不明である。239



1.乳灰色灰泥じり粘質土  
2.褐色砂質土(燒土含む)

fig.63 SB206カマド

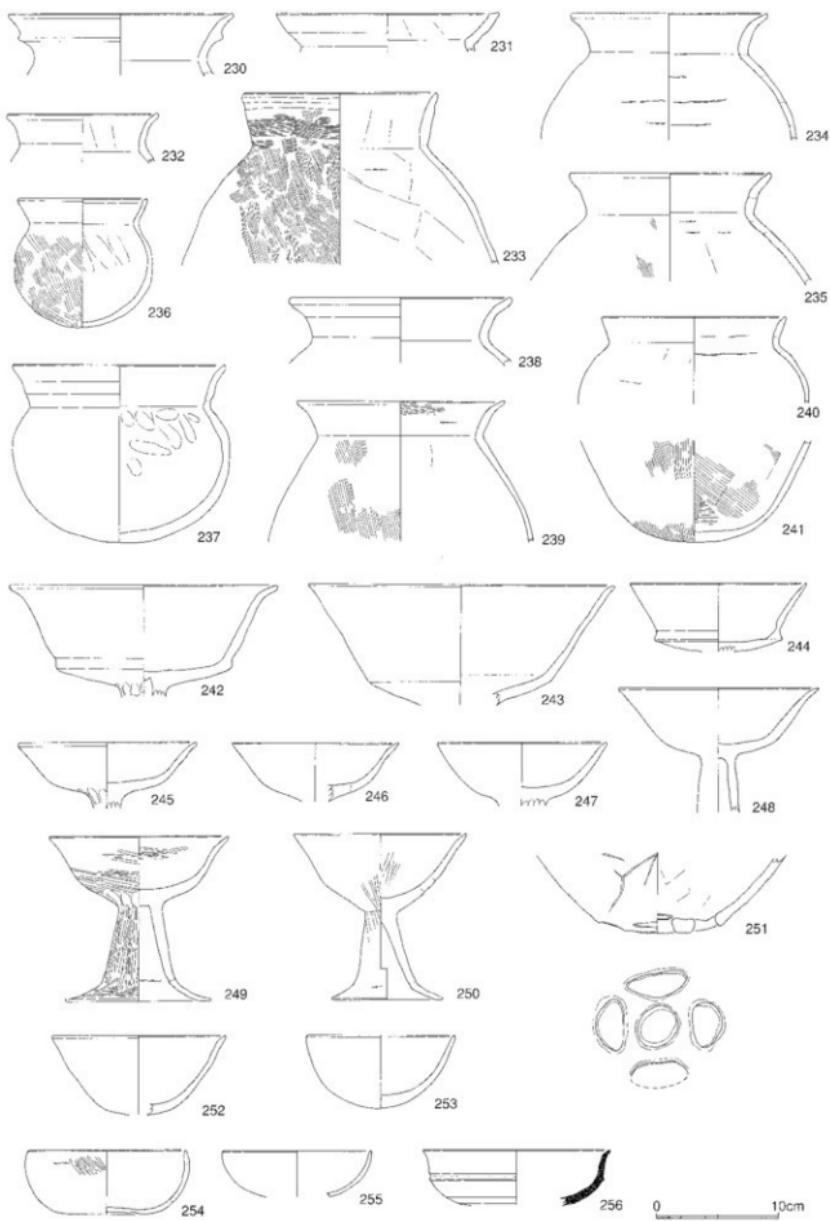


fig.64 SB206出土遺物（1）

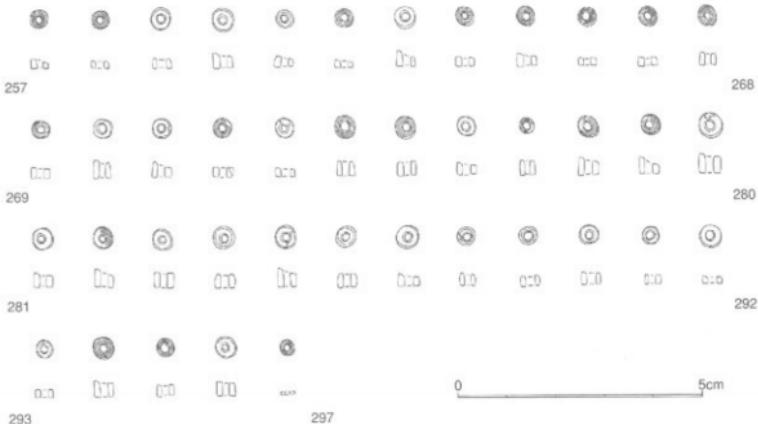


fig.65 SB206出土遺物（2）

は口径16.8cm、肩の張りが弱い。240は口径15.0cmを測る。

高坏242は口径21.8cm、口縁端部は屈曲して面をもち、坏体部内底面は平坦である。内外面ともにナデ調整である。高坏242の坏部内面には黒色の付着物が残存していた。このため少量をサンプリングし、検鏡観察した（図版49）。結果、漆と考えられる厚さ5.3～19.9μm程度の樹脂塗膜が観察された。2層が観察でき、上層が約4μm厚の赤褐色、下層が1～15μm厚の黒褐色を呈する。色調から上層は生漆、下層は黒漆と考えられる。漆塗土器の可能性は否定できないが、坏体部内底面から約3～5cmオリーブ黒色に変色しており、一方向に液体を注いだ痕跡のあることから、漆容器としての利用が考えられる。

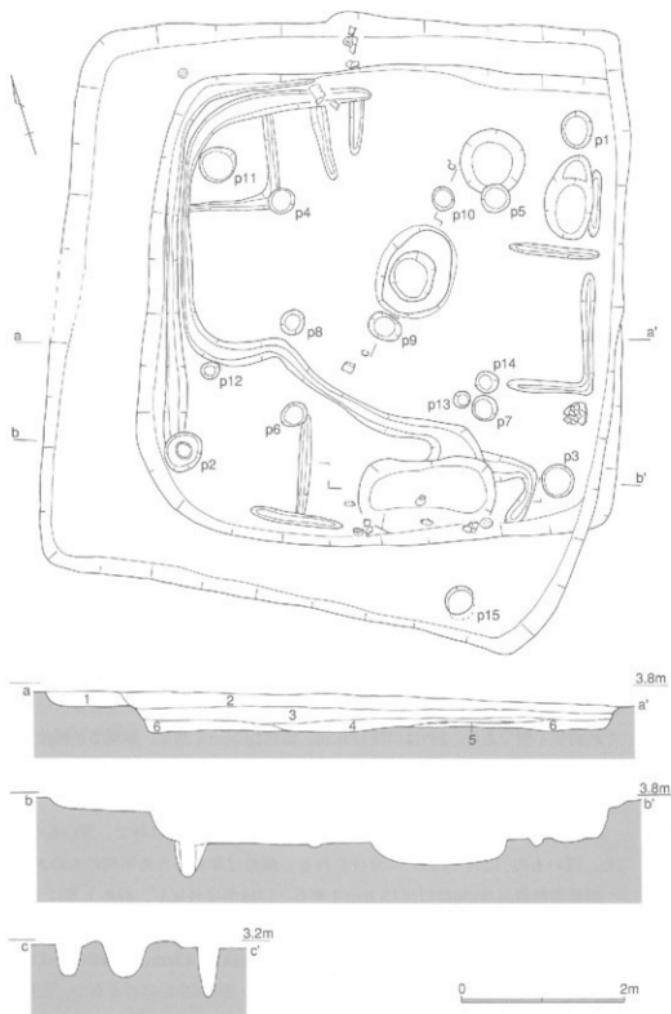
243は口径25.0cm、口縁部は大きく外反し、端部は丸く収める。244は口径14.4cm、外面は摩滅のため調整不明である。245～248は浅い坏体部をもつ高坏である。いずれも摩滅のため調整不明である。249は口径14.6cm、器高13.5cmを測る。脚裾部が屈曲して大きく開く。外面はヘラミガキを密に施す。250は口径14.2cm、器高13.6cmを測る。坏体部が深い。ヘラミガキの後、ナデ調整である。

251は多孔式の櫃の底部で、外面に線刻がある。252～255は坏で、深いもの（252・253）と、浅いもの（254・255）に分けられる。調整は摩滅のため不明のものが大半である。

須恵器無蓋高坏256は口径15.2cmを測る。口縁部は外反し、斜め上方につまみあげる。端部は内傾する。

白玉は直径0.3～0.4cm、厚さ0.1～0.4cm、孔径0.15～0.2cm、重量0.02～0.12gの範疇に入る。断面は大半が長方形状で、284・286・288・289は中位に稜をもつ。欠損しているものはあるが、未製品はない。大半は濃緑色を呈し、緑灰色のものも少量ある。294～297は住居の北半から、257～293は南半から出土している。

SB209 V区で検出した方形の竪穴住居SB209は一辺7.0m、壁高0.2mを測る。当初トレンチ状に掘削していたが、全容を明らかにするため拡張した。



- |              |              |
|--------------|--------------|
| 1.褐茶色発細妙シルト  | 4.乳灰色炭混じり粘質土 |
| 2.灰褐色炭混じり砂質土 | 5.炭化層        |
| 3.乳灰色粘質土     | 6.灰色炭混じり粘質土  |

fig.66 SB209

下層にはほぼ重なるようにして一辺5.9m、壁高0.3mを測る住居が存在するため、上層の住居を（新）下層の住居を（古）と便宜的に呼称している。カマド1基、中央土坑1基、土坑3基、柱穴15基、周壁溝、間仕切り状の溝をもつが、確実にSB209（新）に伴うと考えられるものは柱穴1基（p 15）に留まる。このため、住居の東を流れるSR01によって遺構面が還元されて判別し難くなっていたが、3方向にベット状遺構をもつ住居である可能性も否めない。

SB209（古）の柱穴は主柱穴4基（外）・4基（内）があり、さらに中央土坑とそれに伴う主柱穴2基の3時期に分けることが可能である。この様な柱穴の位置や、カマドと中央土坑をもつことから、SB209（古）には建て替えがあったと考えられるが、上器の形式差はあまりなく、（新）段階の上器だけが残っているようである。また、間仕切り状の溝がL字状に屈曲していることから、1番古い段階は中央土坑と2本柱でつくられた長方形の竪穴住居である可能性が考えられる。

中央土坑は直径0.6m、深さ0.5mを測り、高さ0.1m、幅0.2mの周堤をもつ。埋土は炭混じりの粘質土である。中央土坑に伴うと考えられるp 9・10は直径0.3~0.4m、深さ0.4~0.5mを測る。埋土には炭が含まれている。

住居の北辺中央にはカマドの袖部の一部と考えられる焼土があったが、残存状態が悪く、燃焼部からは土師器高环の脚部が出土している。

住居の南辺やや東よりには貯蔵穴と考えられる土坑があり、長方形を呈す。長径1.7m、短径1.1m、深さ0.2mを測り、完形の壺が出土している（300・301）。土坑の埋土からは炭化米を検出した（図版49）。粒長4.11mm／粒幅2.48mm／粒厚1.74mmを測るジャボニカ種である。

主柱穴は外側p 1~3・11が直径0.4~0.5m、深さ0.1~0.4mを測り、内側p 4~7が直径0.3~0.4m、深さ0.5~0.6mと深い。

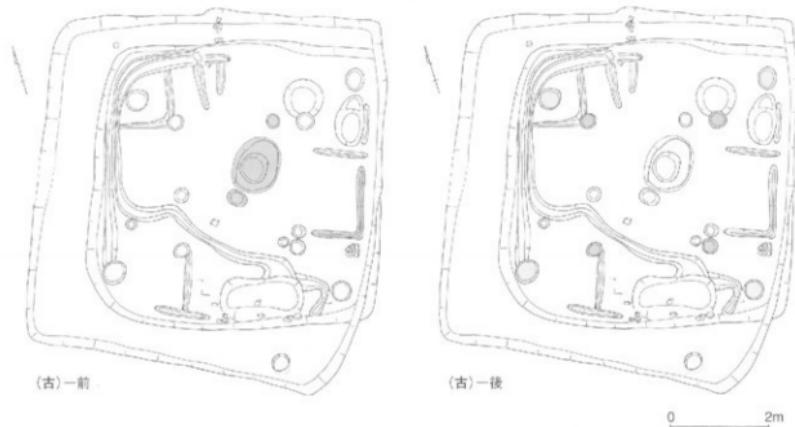


fig.67 SB209

土師器壺・甕・高杯・瓶・環、須恵器壺蓋・縛、製塩上器、砥石、紡錘車が出土している。298～301は口縁部の外反する直口壺である。298は口径10.0cm、口縁端部は面をもつ。299は口径9.8cm、口縁端部は丸く收まる。300は口径9.6cm、器高14.7cmを測る。体部中位には焼成後の中穿孔がある。301は口径11.0cm、器高15.5cmを測る。体部下半はハケ調整であるが、ほかは摩滅のため調整不明である。302はp 11から出土している二重口縁壺の口縁端部である。外面に鋸齒文を施す。

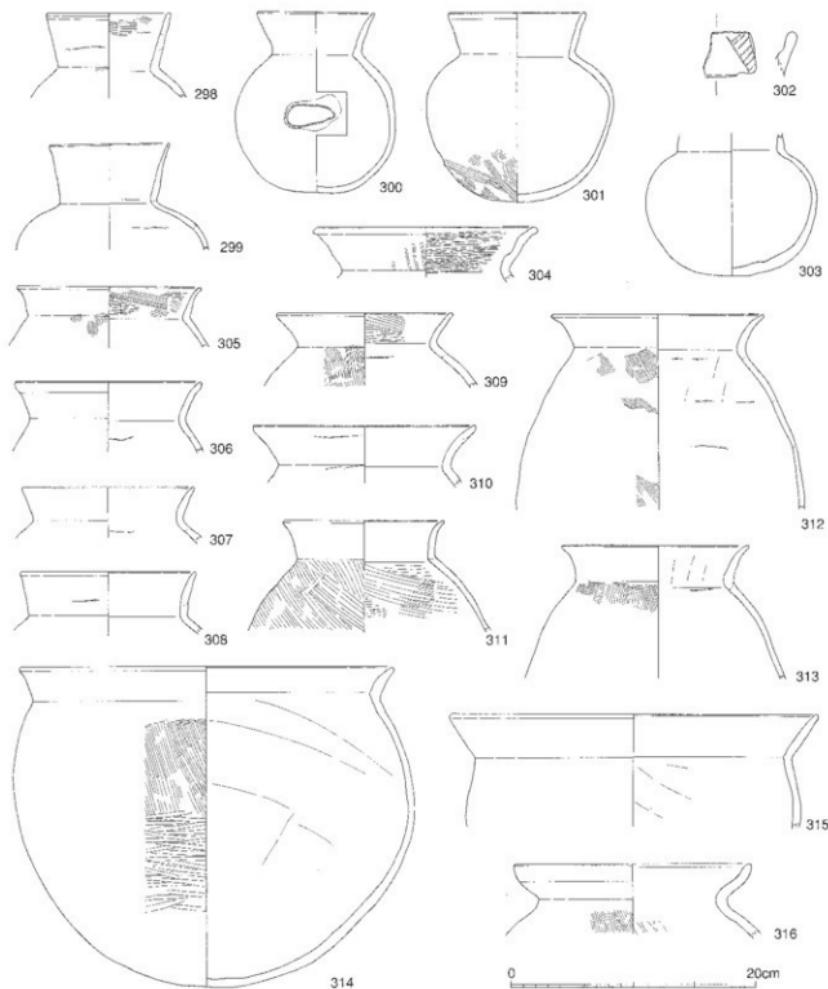


fig.68 SB209出土遺物（1）

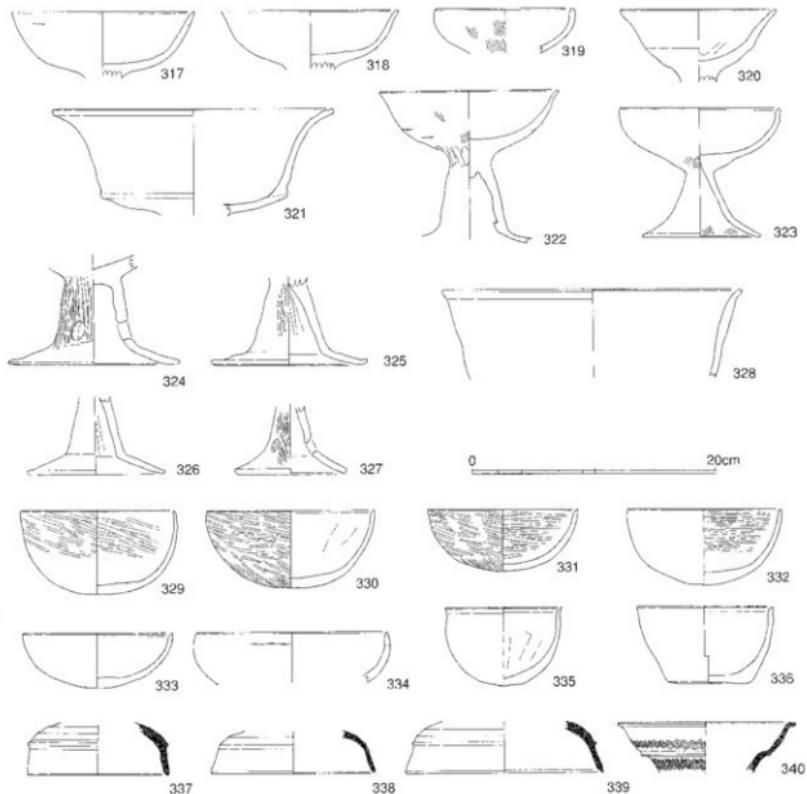


fig.69 SB209出土遺物（2）



fig.70 SB209出土遺物（3）

304～316は甕である。口縁部が外反した後、面をもつもの（304～306・309・310）、丸く取めるもの（307・308・311～315）、受け口状のもの（316）に分けられる。306～308・310の内外面はナデ調整である。312・313は長胴の甕になると考えられる。314は口径30.4cm、体部最大径32.4cm、器高26.3cmを測る大型の甕で、扁球形の体部から短く外反する口縁部をもつ。端部は丸く取める。体部外面はハケ調整の後、下半に横方向のヘラミガキを施す。底部はナデ調整である。315は口径29.7cm、体部最大径が口径より小さい。316は口径19.2cm、器壁が厚い。

317～320・322・323は环体部の浅い高环である。319・323の口縁部は内弯するが、その他は外反する。321は口径22.8cm、环体部は深く屈曲した後、口縁部は大きく外反する。323は口径13.2cm、器高10.6cmを測る。口縁端部は内傾する。324～327は高环の脚部である。324は器壁が厚く、大型の高环になると考えられる。324～326は屈曲して大きく開く脚部をもつ。324・327は3方向より穿孔する。

328は瓶の口縁部である。口径24.6cm、外反してたちあがり、端部は斜め上方にさらに外反する。内外面ともにナデ調整である。

329～332はヘラミガキを施す深い椀形の环である。333・334は浅い环である。331・333は口縁端部を上方につまみあげる。335は口径9.4cm、器高6.4cmを測る。短く外反する口縁部をもつ。外面はナデ調整である。336は口径11.0cm、器高6.3cmを測る。口縁端部は内傾し、平底である。

337～339は須恵器环蓋である。稜は純く、口縁部は外反する。337・338の端部は丸く取め、339は内傾して凹状を呈する。340は甕の口縁部で口径13.4cm、口縁部には6条1帯、頸部には10条1帯の輪描波状文を施す。

砾石341は重量135.3g、比重2.26を測る。乳白色を呈し、堆積岩の一種と考えられる。4面とも使用による平滑面をもつ。342は滑石の紡錘車である。直径4.5cm、孔径0.5cm、重量135.3g、比重2.26を測る。淡灰緑色を呈す。

SB214 X区で検出した方形の堅穴住居である。一辺3.8m、壁高0.2mを測る。西辺中央からやや北よりにカマドをもち、主柱穴4基とピット1基をもつ。周壁溝はない。

カマドの袖部は北側が長く、周壁から住居内に「ハ」字形に0.7m延びる。袖部全面に当たる焚口基部の幅は0.7mを測る。燃焼部の袖の内壁は袋状を呈する。カマド内には上師器甕・高环の脚部と、上壁と考えられる粘土塊があった。

主柱穴p1～p4は直徑0.2～0.3m、深さ0.3～0.6mを測り、p5のみ深さ0.1mと浅い。

土師器甕・甕・高环・环、須恵器环蓋、製塙土器が出土している。

344は口径7.2cmを測る長頸壺の口縁部である。端部は鋭い。外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキの後、ハケ調整を施す。

345は口径13.0cm、「く」字形の口縁部をもち、端部は丸く取める。体部外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整を施す。口縁部はナデ調整である。346は口径11.6cm、口縁部は外反した後、斜め上方につまみあげ、丸く取める。外面は摩滅のため調整不明である。347は口径17.2cm、口縁部は外反し、厚い。内外面ともにナデ調整であるが、内面には粘土紐接合痕が残る。

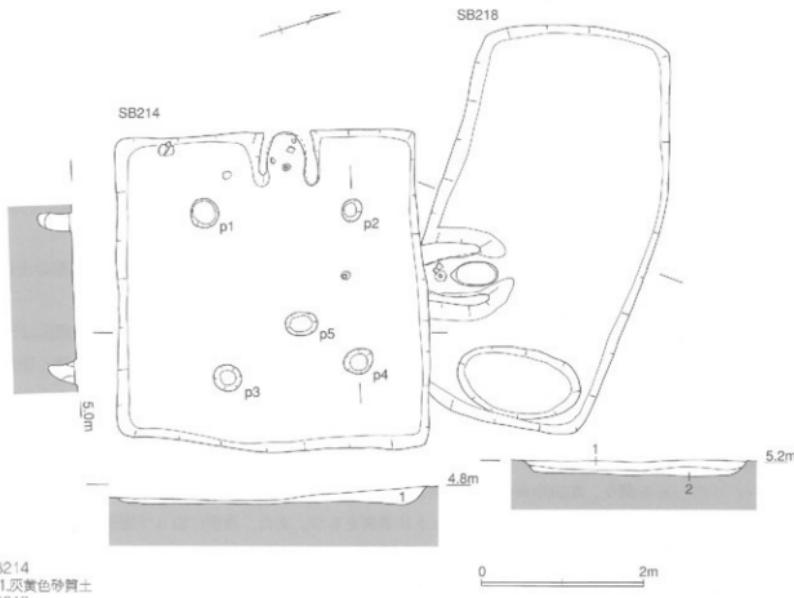
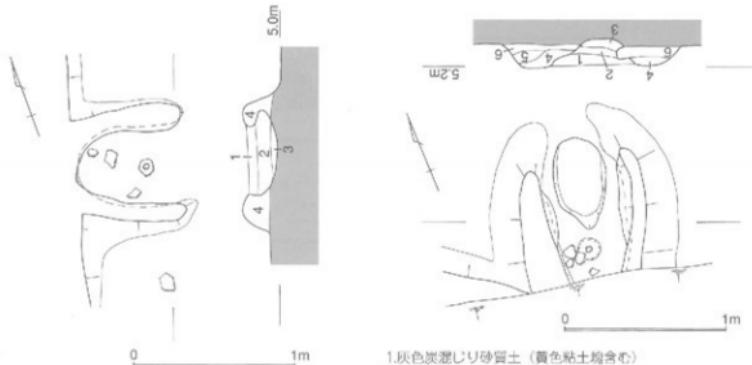


fig.71 SB214・218

Fig. 7.1 SDE14-210



1. 黄色粘土混じり黄灰色粘質土
2. 乳灰色粘質土
3. 焼土層
4. 黄灰色粘質土

fig.72 SB214カマド

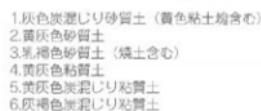


fig.73 SB218カマド

348は高環の脚部である。屈曲した後、脚裾部は大きく開く。内外面に粘土紐接合痕が残る。350は口径13.8cm、カマドから出土している。

須恵器环盞351は口径12.7cm、器高4.4cmを測る。天井部は平坦で、稜は鈍い。口縁端部は凹状を呈する。

**SB218** X区で検出したやや歪んだ長方形を呈する竪穴住居である。SB214に切られる。長辺5.0m、短辺2.8m、壁高0.2mを測る。この竪穴住居の特徴は南辺中央から東よりにカマドをもつことである。

カマドの袖部は東側が長く、周壁から住居内に約0.6m延びる。燃焼部は浅くくぼみ、埋土に焼土を含む。カマド内にから土師器甕・高環が出土している。

柱穴は確認できていないが、住居の東辺に長辺1.5m、深さ0.1mの浅い楕円形の土坑をもつ。土師器甕・高環が出土している。

343は口径16.6cmを測る。349は口径13.6cm、器高11.4cmを測る。环体部内底面は平坦で、口縁部は大きく外反する。端部は丸く收める。脚部は屈曲した後、大きく開く脚裾部をもつ。脚柱部外面はヘラミガキ、环体部と脚裾部はナデ調整である。脚部のスカシ孔は2方向から穿孔する。

**SB217** XI区で検出した。住居の四隅はいずれも調査区範囲外である。東西辺は5.2m、壁高0.5mを測り、北辺中央からやや東よりでカマドの南端を検出している。西壁には幅0.4~0.6m、東壁には幅0.2mの狭いベット状遺構をもつ。また、西壁に沿って周壁溝、床面には柱穴を4基もつ。

カマドの袖部前面にあたる焚口基部の幅は0.6m、燃焼部は浅くくぼみ、焼上が堆積している。カマド内及びカマド付近からは土師器甕の破片が出土している。燃焼部埋土より炭化米2点が出土している(図版49)。何れも胚乳のみで、粒長4.72mm/粒幅2.55mm/粒厚1.73mm、粒長4.13mm/粒幅2.48mm/粒厚1.58mmを測るジャボニカ種である。

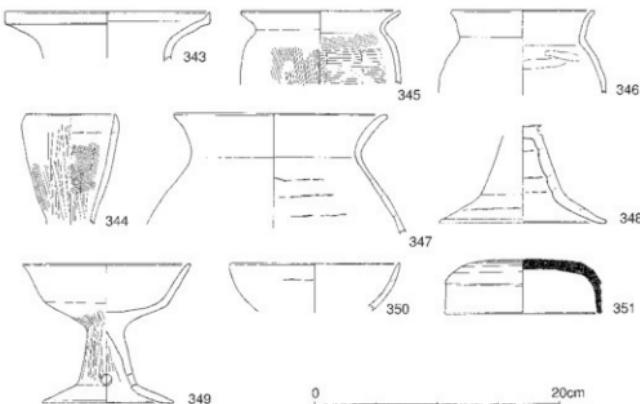
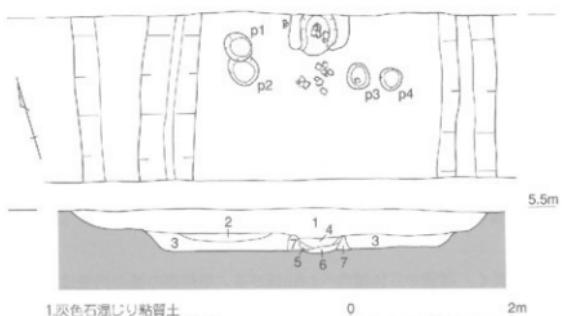


fig.74 SB214・218出土遺物  
(SB214:345~348・350・351 SB218:343・349)

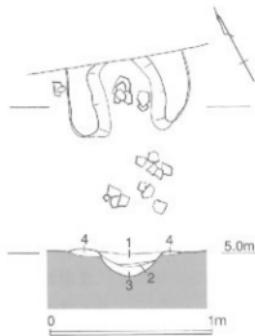
ベット状遺構は床面から0.2m高いが、貼床ではない。柱穴は直径0.3～0.4m、深さ0.5mを測る。埋土に炭化物を含む。柱穴の位置からは建て替えのあった可能性も考えられる。上師器壺・甕・高壺・壺、須恵器把手柄が出土している。

352は口径9.6cm、外面はヘラミガキ調整後のナデ調整を施すが、ヘラミガキの方向が不明で図化していない。353は口縁部が欠損した体部最大径11.4cmの壺である。内外面に粘土紐の痕跡を残す。354は口径12.8cm、体部最大径24.0cm、器高26.1cmを測る。球形の体



- 1.灰色石涙じり粘質土
- 2.乳灰色石・炭化じり粘質土
- 3.乳灰色炭涙じり粘質土
- 4.乳灰黄色粘質土（焼土含む）
- 5.焼土層
- 6.炭化層
- 7.黄灰色粘質土

fig.75 SB217



- 1.乳灰色焼土涙じり粘質土
- 2.炭化層
- 3.無土層
- 4.黄灰色粘質土

fig.76 SB217カマド

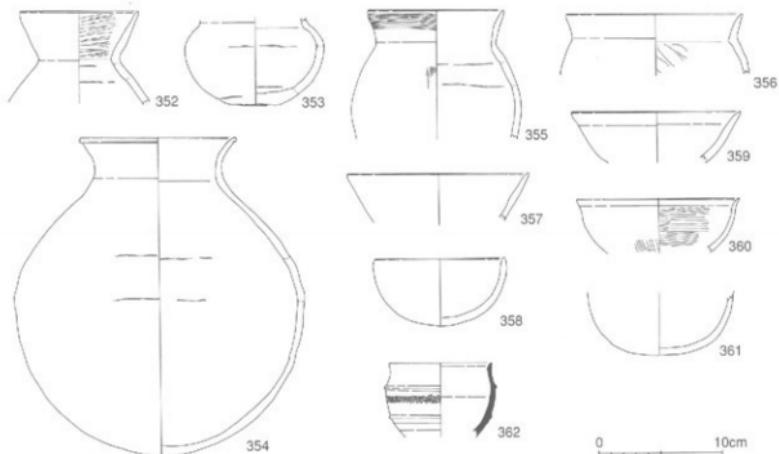


fig.77 SB217出土遺物

部から緩やかに外反する口縁部をもつ。端部は面をもって丸く收める。調整は内外面ともにナデ調整で丁寧に仕上げている。355は口径11.1cmを測る。口縁部に横方向のハケ調整を施す。体部の外面調整は摩滅のため不明で、内面はナデ調整である。甕356は口径14.3cmを測る。外面の調整は摩滅のため不明である。

357は高环の口縁部と考えられる。口径14.9cmを測る。358は口径10.6cm、器高5.5cmを測る环で、調整は内外面とともにヘラミガキの後ナデ調整であるが、方向不明のため図化していない。器壁が厚い。359・360は口縁端部が斜め上方につまみあげる。360は内外面に粗いハケ調整を施す。

362は把手を欠損する把手付椀で、口径8.3cmを測る。口縁部は斜め上方につまみあげ、内傾する。底体部下半は回転ヘラケズリで仕上げ、中位に7条1帯の櫛描波状文を施す。

SB219 Ⅲ区で北半分を検出した竪穴住居である。SD222に切られる。一辺4.8m、壁高0.1mを測る。北辺中央からやや東よりと、西辺にカマドを検出した。柱穴を6基検出していることから、建て替えがなされた可能性が高い。しかし、カマドを作り替えた場合、前のカマドを潰さなければ居住空間が減ってしまうことから、2棟の竪穴住居の切り合いを誤って掘削した可能性も否めない。

北辺カマドは西側の袖部が長く、周壁から住居内へ1.0m延びる。燃焼部の袖の内壁は袋状を呈する。北辺カマドの燃焼部では完形の小型の甕が上下逆で出土している(363)。支脚としているのであろうか。西辺カマドは調査区外へ延びるが、北側の袖部が長く、周壁から住居内へ0.7m延びる。土師器甕・高环・甕・坏・須恵器坏身・製塙土器が出土している。

363は口径10.4cm、体部最大径11.5cm、器高6.8cmを測る。扁球形の体部から、短く口縁部がやや斜め上方に延びる。外面はナデ調整で、粘土紐接合痕が残る。364は口径9.2cm、365は口径11.2cmを測る。内外面ともにナデ調整である。

366は口径13.9cm、調整は摩滅のため不明である。367は口径12.7cm、368は口径17.2cmを測る。368は内面のハケ調整が粗く、内外面でハケ工具が異なると考えられる。369は口

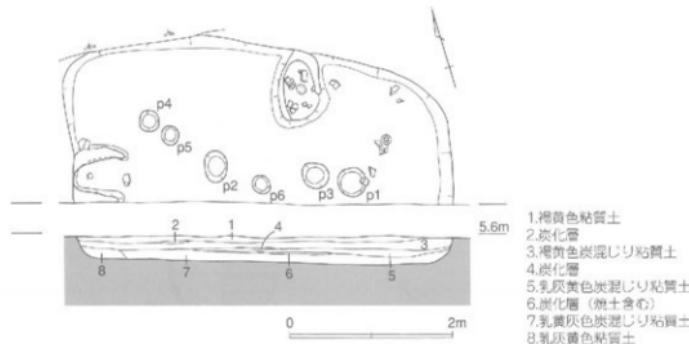


fig.78 SB219

径16.2cm、体部最大径23.0cm、器高29.1cmを測る長胴の甕である。口縁部は外反し、端部は丸く收める。370は口径24.2cm、口縁部は外反し、外面はハケ調整によって凹み、端部は面をもつ。

371は高环の脚部で、内外面ともにナデ調整である。372は口径7.1cm、器高4.5cmを測る小型の环である。内弯する口縁部で、端部はやや内傾する。373は長径4.5cmを測る口縁部

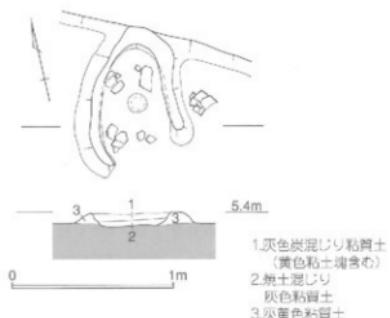


fig.79 SB219北辺カマド

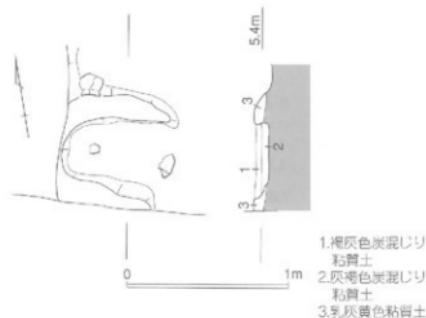


fig.80 SB219西辺カマド

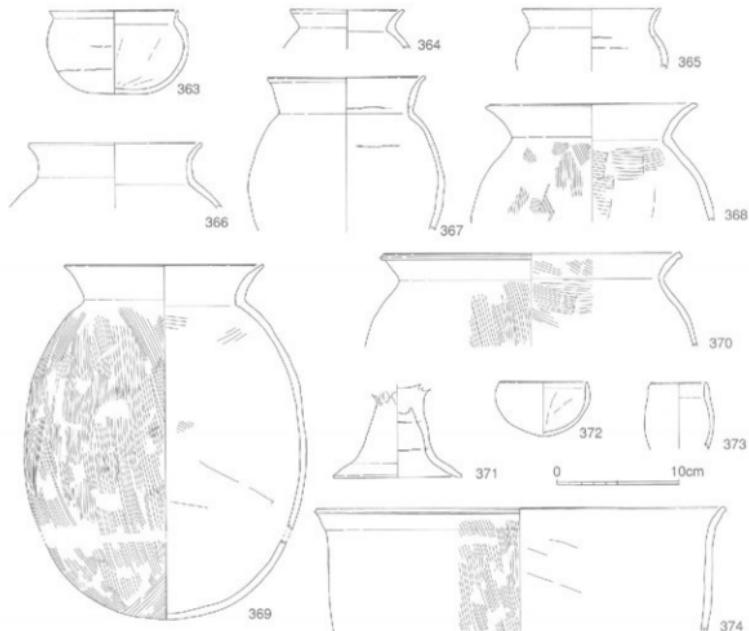


fig.81 SB219出土遺物

が橢円形の製塙上器である。やや内湾する体部からまっすぐ延びる口縁部をもつ。内外面ともにナデ調整である。瓶374は口径23.0cm、口縁部は斜め上方に延び、端部は面をもつ。

#### (2) 溝

SD221 1M区で検出した北東から南西方向に流れる深さ1.4mの溝である。南は測定区外へ拡がっている。中層の灰色炭混じり粘質土層から、まとまって土器が出土している。また、中層上面では斜面に対して並行に、南へ向けて土師器壺・壺が置いたと考えられる状態で出土している(375・388・390・391・396)。また、下層の埋土は淡青灰色細砂であるため、もともとは河道であったものが堆積する段階で土器を置いたと考えられる。

土師器壺・甕・高壺・瓶・壺・飯蛸壺・須恵器壺身・壺蓋・甕・高壺・器台・製塙上器が出土している。

375は口径8.8cm、体部最大径13.2cm、器高14.4cm、完形の壺である。底部は平坦で、口縁部は外反した後丸く收める。体部中位にのみ横方向のハケ調整を施す。376は口径7.8cm、体部にはユビナデの痕跡が残る。377は口径23.2cm、口縁部を大きく拡張し、外面は凹線状を呈す。端部は平端である。拡張した下方部分に刻み目を3個/cmで施し、2個/対の浮文を貼り付ける。外面に線刻がある。378は口径13.6cm、379は口径18.2cmを測る。どちらもナデ調整である。380は口径17.6cm、器壁が厚く、大型の甕と考えられる。381は口径12.2cm、短い口縁部は外反して丸く收める。382は口径15.6cm、外面はナデ調整である。

高壺は壺体部が屈曲して外反するもの(385)と、さらに斜め上方へ延びるもの(383・384)に分けられる。383は口径13.8cm、端部は面をもつ。384は口径14.4cm、385は口径13.4cmを測る。386の脚部は3方向から穿孔する。

瓶387は口径19.4cm、やや内湾する体部から鋭く延びる口縁部をもつ。牛角状の把手は中実である。

甕は浅くて底体部が平坦なもの(388~394)、深くて丸底のもの(395~400)に分けら

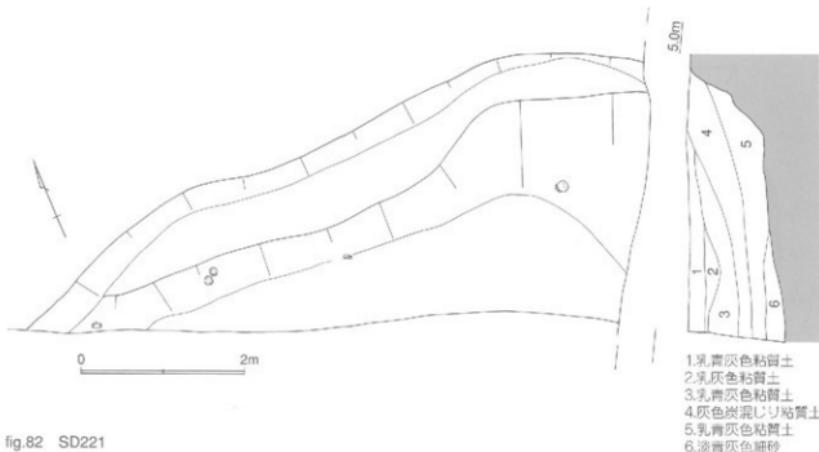


fig.82 SD221

れる。浅いものは粘土紐の痕跡が明瞭に残り、深いものの方が丁寧なつくりである。口径は9.8～11.6cmで、400のみ14.2cmを測る。口縁部は外反するもの（388～393・395・398）と内湾するもの（394・396・397・399・400）に分けられる。端部は大半が丸く収めるが、

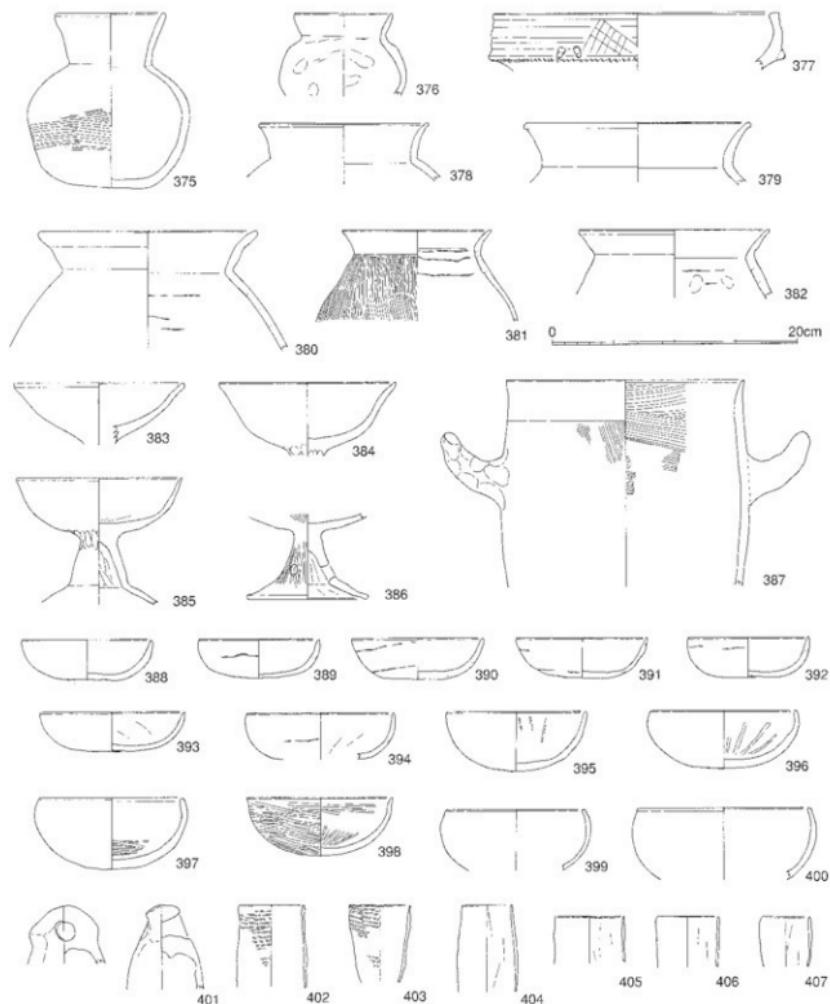


fig.83 SD221出土遺物（1）

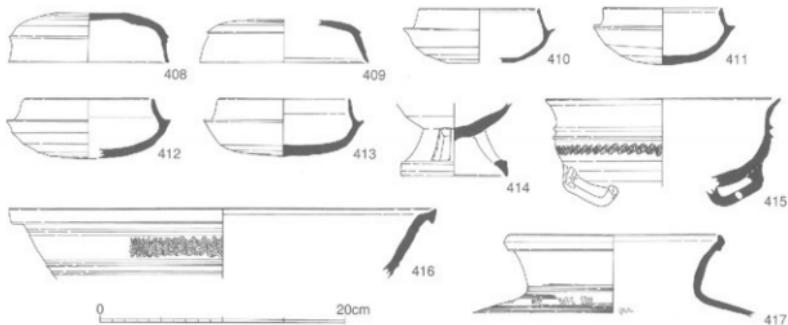


fig.84 SD221出土遺物（2）

398はやや斜め上方につまみあげる。399がナデ調整によって外面が凹み、400は端部に面をもつ。395・396は内面に放射状にヘラミガキを粗く施し、397・398はヘラミガキを密に施す。

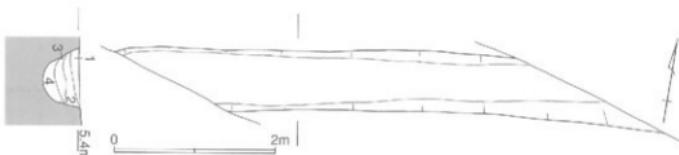
401は下半部の欠損した飯蛸壺である。孔径は1.5cmを測る。402～407は製塙土器である。402・403は外面にタタキを施す。404～407はナデ調整である。

須恵器壺蓋408・409は天井部が平坦で、稜が鈍い。408は口縁部がやや外反し、端部は平坦で凹状を呈する。409は口縁部が外反し、端部は鋭く段状を呈す。410・411は底体部が丸みをもち、口径が小さい。412・413は底体部が平坦で、器高が低い。

414は高坪の脚部で3方向スカシである。脚部は短く、器壁が厚い。415は口径19.2cm、把手付の無蓋高坪である。丸みをもった底部から大きく外反する口縁部をもち、中位は2条の突帯と10条1帯の櫛描波状文で飾る。416は口径35.0cm、外反した口縁部は突帯を境に端部で屈曲し、上下に拡張する。中位は2条の突帯と10条1帯の櫛描波状文で飾る。

417は口径17.0cm、頸部から体部にかけて外面にカキ目調整を施す。

**SD222** I-II区で検出した北東から南西に方向に流れる幅0.7m、深さ0.6mを測る。断面はU字状を呈し、細砂層まで掘削しているため、湧水が見られた。SB221を切る。断面の形状・埋土からはII区のSD207へつながる可能性が考えられる。土師器の細片が出土しているが、図化可能な土器はない。



1.褐色粘質土  
2.灰黄色粘質土  
3.灰色炭泥じり粘質土  
4.灰黄色砂混じり粘質土

fig.85 SD222

## (3) 土坑・落ち込み

SK208 VI区で検出した。SB209を切る。やや梢円形を呈し、底面は平坦で、緩やかにたちあがる。長径1.3m、短径1.1m、深さ0.2mを測る。埋土は灰褐色砂質土である。土師器高坏、須恵器甕が出土している。

高坏418は口径11.9cm、やや内弯する口縁部をもつ。419は口径14.8cm、坏体部は浅く、口縁部は斜め上方につまみあげる。418・419の調整は摩滅のため不明である。須恵器甕420は口径20.8cm、口縁端部は面をもち、上方につまみあげる。10条1帯の櫛攝波状文で飾る。

SX204 II区東端で検出した。SR201へむかって緩やかに傾斜し、トレンチの東端で深さ0.3mを測る。東は調査区外へ延びる。埋土は暗灰色粘質土である。土師器甕・高坏・坏が出土している。

421は口径14.5cm、外反する口縁部を持ち、端部は丸く收める。422は口径10.1cm、器高5.4cm、423は口径10.3cmを測る。422・423の調整は摩滅のため不明である。424は口径35.0cm、短く外反する口縁部をもつ。外面は粗いハケ調整を施す。

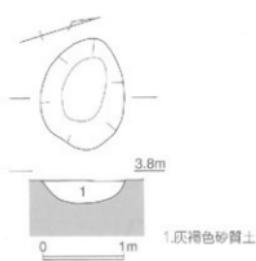


fig.86 SK208

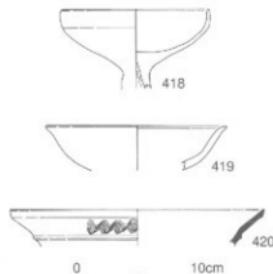


fig.87 SK208出土遺物

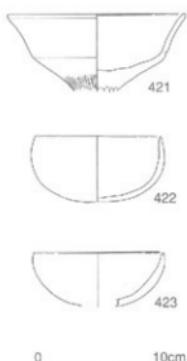


fig.88 SX204出土遺物

## (4) ピット

調査区内には建物に伴わないピットがあるが、その中で図化可能な遺物の出土したピットのみ報告する。ピットから出土した遺物には土師器壺・高環・須恵器环身がある。

SP257はⅠ区で検出した。直径0.3m、深さ0.4mを測る。土師器壺425が出土している。口径8.8cm、器高8.3cmを測る。内外面ともにナデ調整である。器壁が厚い。

SP245はⅢ区で検出した。直径0.3m、深さ0.25mを測る。土師器高環426が出土している。口径14.8cm、屈曲した後大きく外反する口縁部をもつ。内外面ともにナデ調整である。

SP241はⅣ区で検出した。直径0.3m、深さ0.3mを測る。須恵器环身427が出土している。口径9.4cm、器高4.7cm、底体部は丸みをもつ。内傾するたちあがりは長く、端部は内傾して凹状を呈す。

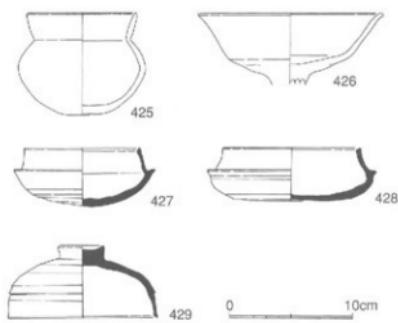
## (5) 遺構に伴わない遺物

調査区内の遺物包含層は、0.1~0.2m程度の堆積が認められたが、遺物はあまり包含しておらず、図化可能な古墳時代中期~後期の遺物の出土は少ない。

須恵器环身428は口径11.2cm、器高4.3cmを測る。底体部は平坦で、ヘラケズリの範囲は狭い。たちあがりは内傾し、端部は内傾して凹状を呈す。有蓋高環の蓋429は口径12.2cm、器高5.9cmを測る。天井部は丸みをもち、稜は鈍い。口縁端部は内傾して凹状を呈す。



fig.89 SP241出土状況

fig.90 ピット出土遺物 (SP257: 425 SP245: 426 SP241: 427)  
遺構に伴わない遺物 (428・429)

#### 4. 平安時代以降

第1遺構面は調査の都合上、全てのトレーニングにおいては面的な調査を実施していないが、古墳時代後期以降は集落として機能しておらず、遺構は希薄で、遺物も少量出土したにとどまる。

**SR201** 調査地の東側において南北に広がっている湿地である。遺構面が明石川へむかって東へ傾斜しており、その上層に堆積する淡灰白色粘土層を確認した。I・III・VII区で平安時代前期の遺物が少量出土している。底面より切り込む遺構ではなく、調査区内で同時期の遺物が出土する遺構は他に検出していない。

土師器皿430は口径17.2cm、器高1.5cmを測る。底部は平坦で、口縁部が外側へ屈曲する。431・432は外方に開く脚部をもつ。須恵器碗437は低い輪高台をもつ。

**SR01** 盛土層直下から切り込むこの河道は、調査区を南北に縱断している。最小幅約10m、深さは2.0mを測る。埋土は細砂～粗砂と粘質土のラミナで、最下層は粗砂～中砂で、湧水が激しい。IV区の最下層では弥生時代後期の遺物を少量含む層があり、部分的には古い時代の河道と重なっていると考えられる。出土遺物の大半は室町時代であるが、摩滅した鎌倉時代の土器も少量出土している。435は土師器鍋で、口径18.4cmを測る。体部は球形で、口縁部は内弯する羽釜形である。土師器鍋436は口径26.4cm、短い錐状の断面三角形の突帯をもつ。須恵器碗439は口径15.0cm、器高4.4cmを測る。

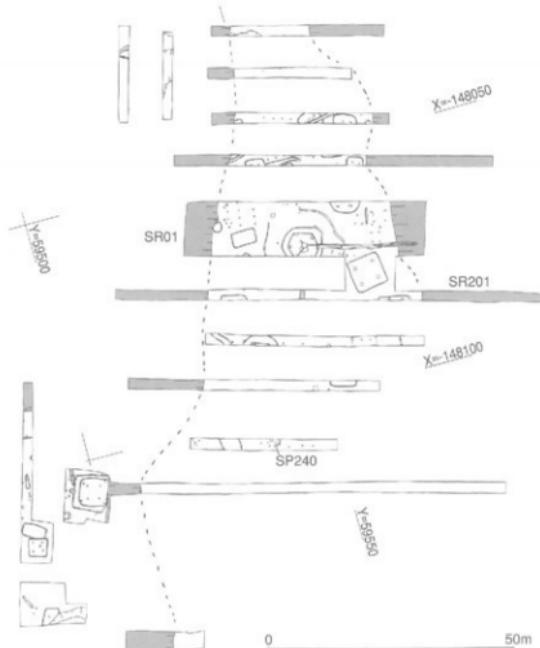


fig.91 平安時代以降の遺構

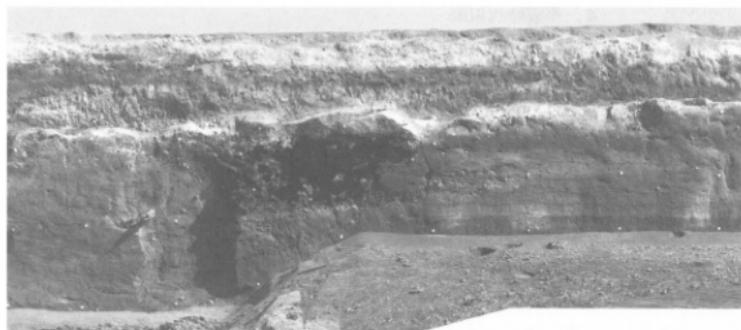


fig.92 SR01断面写真

出土した動物遺存体は全部で6点あり、すべてウシ骨である。底面より出土しており、解体後に投棄されたものと考えられる。何れにも火を受けた痕跡は見受けられない。

450は、左中手骨であり、遠位端頭部を欠く。近位端に近い掌側の外縁に擦過痕、骨幹部の掌側中央付近には鋭利な刃物でつけられたと考えられるカットマークがあり、解体痕である可能性がある。近位端頭部の欠損も、あるいは解体に伴うものかも知れない。445は右肩甲骨であり、背側の扁平部を欠損する。448は右中手骨であり、骨幹部中央のみ残存する。447はほぼ完形の左中手骨である。骨端は癒合しており、成獣の遺存体であるが、他の個体より若干小型のものと言える。446は左撓骨の骨幹～近位端である。近位骨頭部外側が斜めにカットされており、解体に伴った痕跡と考えられる。449は右中足骨で、遠位骨頭部を欠損する。

左中手骨2点があることから最低2個体が存在し、大まかに体高125cm前後の大型の個体と115cm前後の小型の個体が考えられる。これは現代の黒毛和種の雄（体高約145cm）に比してかなり小型であり、大型の個体について見ても、現代黒毛和種の雌（体高約126cm）程度であるが、在来種の形質を引くと考えられる山口県産の見島牛（雄：体高129cm前後、雌：体高115cm前後）、鹿児島県産の口之島牛（雄：体高120cm前後、雌：体高110cm前後）を見れば、比較的近い数値であると言える。

SP240 罂区で検出した。直徑0.2m、深さ0.2mを測り、埋土は乳灰色粘質土である。土師器小III 433は、口径9.0cm、器高2.2cmを測る。底部は回転糸切りの痕跡が残る。

台帳番号	推定体高	部位	GL(全長)	Bp(近位端幅)	SD(骨幹部最小幅)	BD(遠位端幅)
R-111	120-125	左中手骨		6	3.351	
R-495-2	125-130	右中手骨			3.757	
R-495-3	110-115	左中手骨	18.1	5.3	3.223	5.719
R-495-4	105-125	左撓骨		6.955~	4.293	
R-495-5	115-125	右中足骨		5.108	2.522	

台帳番号	推定体高	部位	GLP(関節窩幅)	BG(関節窩厚)	SLC(肩甲頭幅)
R-495-1	-	右肩甲骨	6.60~	4.009~	50.13

(cm)

表2. 動物遺存体計測表

畦畔 1区・11区で検出している。断面観察からは調査区全体に淡灰色砂質土層（耕土）・黄色砂質土層（床土）の互層が約1.2m水平に堆積していることから、古墳時代後期以降からSR01が切り込む室町時代までは水田が広がっていたと考えられる。

遺構に伴わ 434は土師器のミニチュア土器である。外面は粗いハケ調整を施す。須恵器碗438は口径15.0cm、横ナデ調整が弱い。瓦は端面の残存するもののみ図化した。平瓦441・443は凸面には縄目痕、凹面には布目痕が残る。442は凹面の布目痕のみ残る。凸面はナデ調整である。丸瓦は凸面・凹面とともに板オサエの痕跡が残る。

## II. 4. 参考文献

Driesch, A. van den A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites, Peabody Museum Bulletins, no.1, 137pp. Harvard Univ., 1976

藤川正勝・國賀子・藤田美美「環境考古学4 牛馬骨格同調」『埋蔵文化財ニュース 115』(独)奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2004

西中川俊「日本在来牛および現代和牛（黒毛和種）の骨に関する形態計測学的研究」「古代遺跡出土牛骨からみたわが国の牛」馬の起源、系統に関する研究　とくに日本在来種との比較　昭和63年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書』 1989

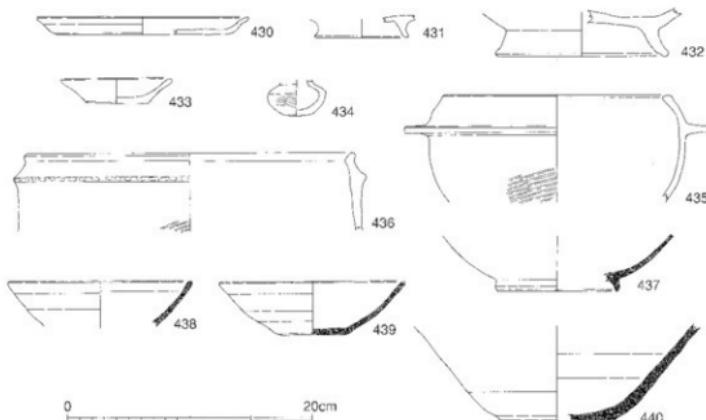


fig.93 平安時代以降の遺物 ( SR201 : 430~432・437 SR01 : 435・436・439・440 SP240 : 433 )  
( 遺構に伴わない遺物 : 434・438・441~444 )



fig.94 遺構に伴わない遺物

### III. まとめ

これまで報告してきたように、吉田南遺跡第17・18次調査は、多くの調査成果が得られた。特に弥生時代後期～後期後半と、古墳時代中期～後期の竪穴住居・掘立柱建物が20棟、溝3条からは多量の土器が出土した。トレンチ調査であったため、全体を調査できた遺構は少ないが、出土した遺物から時期変遷を考えていきたい。

なお、時期については参考文献に挙げた報告書・論文を参考としている。

#### 1. 弥生時代後期～後期後半の土器

全ての器種が揃って出土した遺構はあまりないが、最も多量の土器が出土しているSD209から考えていきたい。SD209の器種組成は、甕が約60%と最も多く占め、高杯・壺が続く。甕は平底もしくは突出する底部をもち、上半部に体部最大径をもつ。体部は長胴形を呈するものが大半で、球形化するものもある。口縁部は凹線状を呈するもの、つまみあげるものの、受け口状のもの、丸く収めるものに分かれる。つまみあげる口縁部は大型品に多く見られ、丸く収める口縁部は中型品・小型品に多い。調整は外面タタキの後、ハケ調整を施すものと施さないものがあり、割合は同じ程度である。内面はハケ・ナデ・板ナデ調整が大半を占め、138のみケズりを施す。

高杯は杯体部が屈曲した後、口縁部が強く外反するものと、杯体部が楕円形のもの、杯体部に段をもつものに分かれる。加飾高杯も少量出土している。

壺は広口壺が大半を占め、短い頸部に外反する口縁部をもつ。肩部は上下に拡張するもの、凹線状を呈するもの、つまみあげるものに分かれる。玉津田中遺跡で示されている編年を参考にすると、V-2・3期が該当すると考えられる。

SD209はSB208と切り合い関係にある。高杯で比較すると、26は151と杯体部が浅く、口縁部が大きく外反するという形態的特徴と調整が似通っている。26が住居の上層埋土から出土していることから考えて、SB208が廃絶して埋没する段階とSD209は同時期と考えられる。

次に甕が多く出土しているSD220をSD209と比較すると、SD220の甕の体部は球形化するものが大半を占める。しかし、体部最大径は上半部にあり、底部は平底でしっかりとしている。SD209の甕にも球形化するものが含まれることから、SD209よりやや新しい傾向にあるものの、あまり時期差はないと考えられる。

最も新しい遺構と考えられるのはSB215から出土した土器群である。鉢が多く、甕が少ない。鉢は杯体部が浅く、底部は形骸化が著しい。甕42の体部最大径は中位にあり、球形化している。この住居からはいわゆる淡路型器台と呼ばれる器台43が出土しており、淡路型器台が出土している日輪寺遺跡で示されている編年を参考にすると、庄内併行期と考えられる。

SB201は甕の全形をうかがえるものはないが、底部の形骸化した鉢6が出土している。壺2については胎土に角閃石を多く含み、器形からも搬入品の可能性が高い。また大型の二重口縁壺1は、短く外傾する頸部から短い一次口縁部がつき、そこから斜め上方に二次口縁部がたちあがる。玉津田中遺跡で示されている編年を参考にすると、弥生時代最終末期V-5期に位置づけられよう。

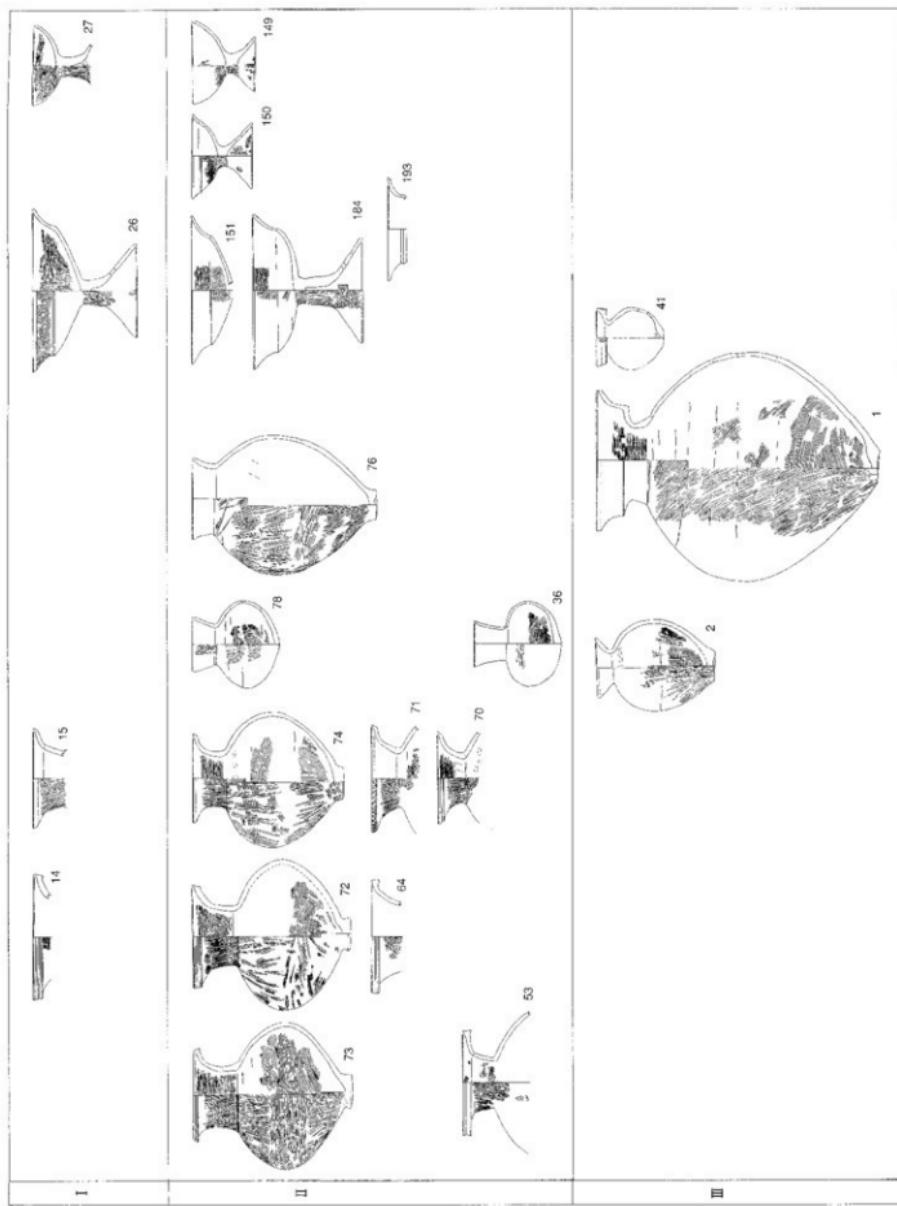


fig. 95 弥生時代後期～後期後半の土器 (1) (土器スケールは1/8)

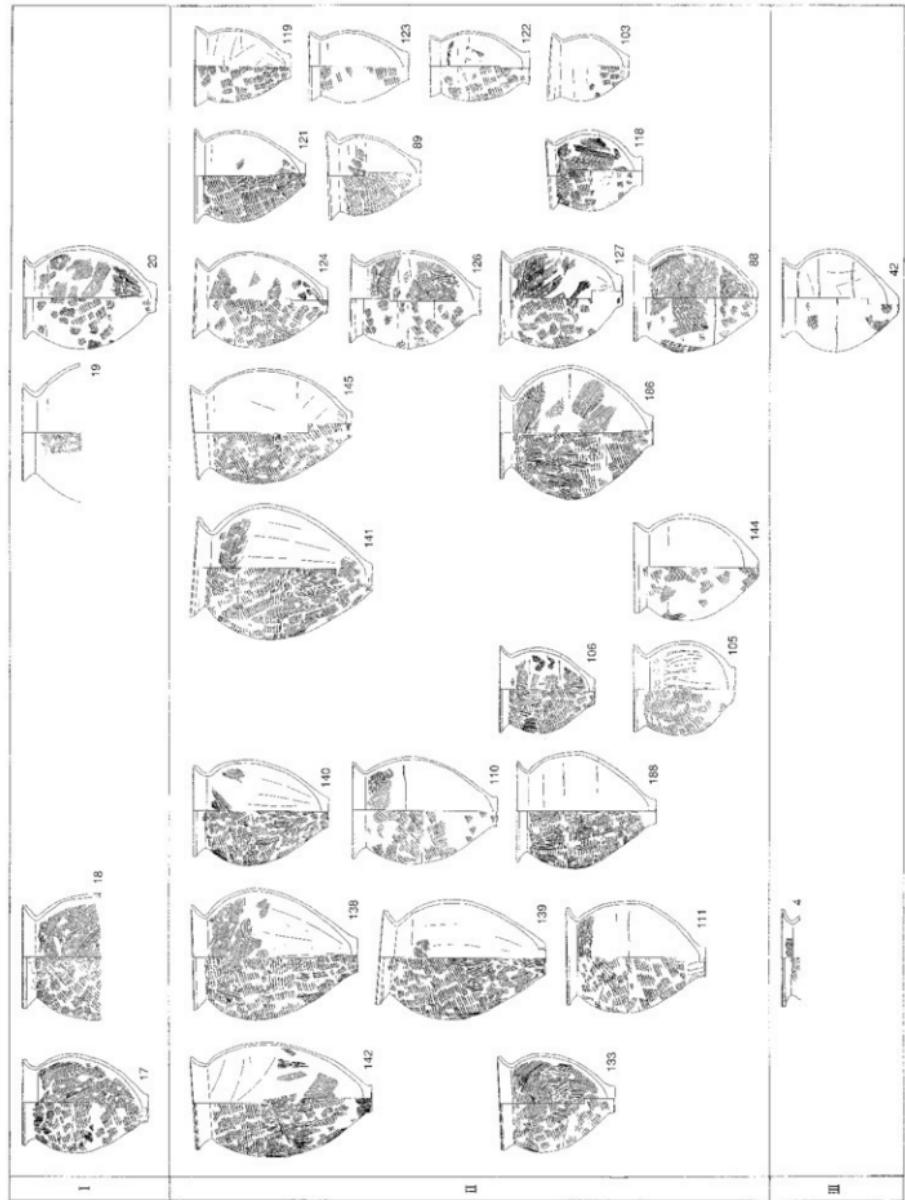


図96 桑生時代後期～後期後半の土器 (2) (土器スケールは1:8)

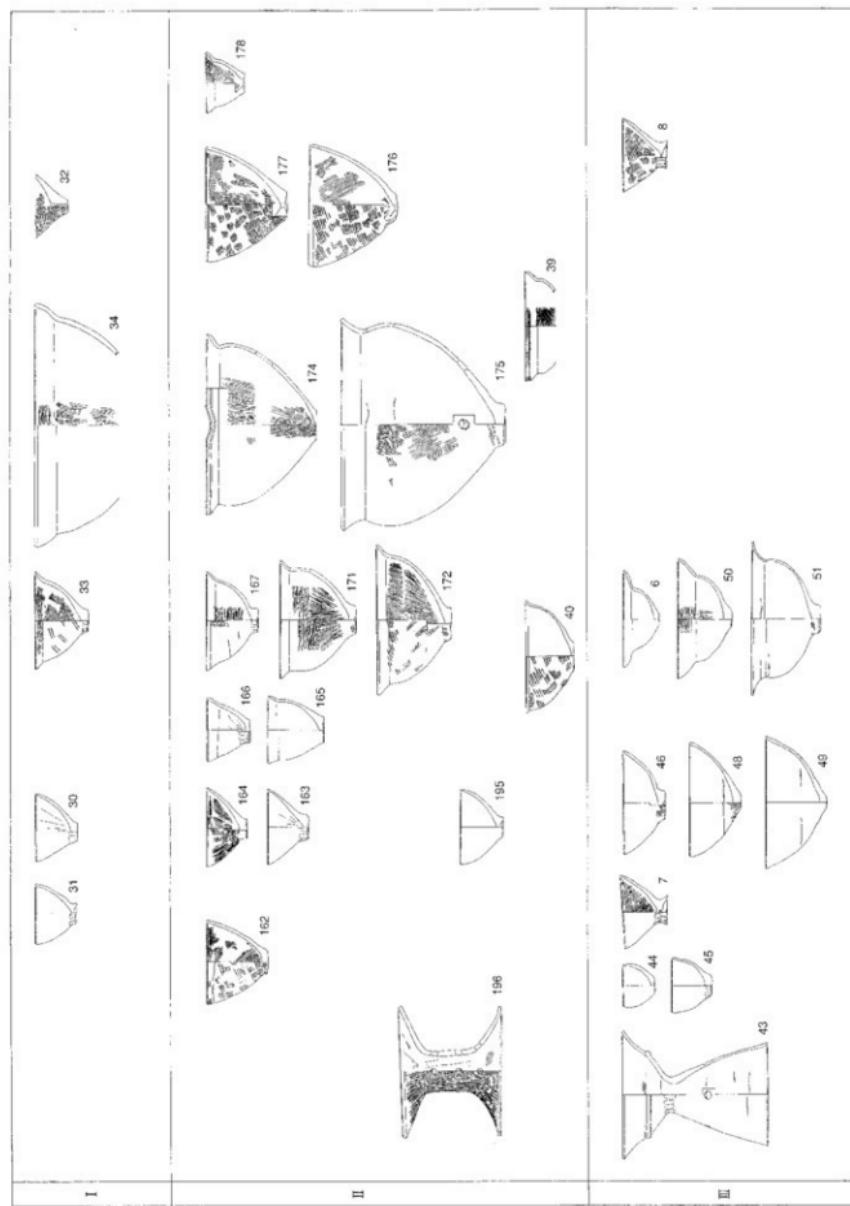


fig.97 弥生時代後期～後期後半の土器 (3) (土器スケールは1/8)

SB213・SB221は出土した上器が少なく、器種も乏しい。その中でも、SB213の鉢39は、口縁端部を上方に拡張し、凹線状を呈する。この形態は、丹波系と呼ばれるもので、玉津田中遺跡で示されている編作を参考にすると、V-4期に位置づけられる。また、SB221の広口壺53はSD209のものと比較して、頸部が短くなっていることから、新しい要素をもつと考えられる。しかし、出土量が少なく、時期を分けるには適当でないと判断し、今回はⅡ期の新しい段階へ位置づけている。

以上、弥生時代後期～後期後半の土器がまとめて出土している遺構を中心に概観してきた。その結果、概ね3時期に分かれると考えられる。遺構の時期としては、Ⅰ期がSB208、Ⅱ期がSD209・SD220、SB213・SB221、Ⅲ期がSB201・SB215という変遷が追えそうである。

## 2. 古墳時代中期～後期の土器

この時期の出土した土器は土師器の方が須恵器より多いため、まず土師器で比較を試みる。出土した土師器の中で最も多い器種は甕である。大型品では長胴形のものが見られるが、小型品・中型品は球形もしくは、扁球形の体部をもつ。外面はハケ調整で、内面は板ナデもしくはナデ調整で、ヘラケズリを施すものはない。SB206の小型の甕236は体部が球形で、調整も丁寧であるが、SB203の甕219はやや扁球形の体部をもち、調整が粗雑であり、後出的である。また、須恵器の出土していないSB219には長胴化した甕369があり、器形・調整がSB204の甕226に近いと考えられる。

SB206・SB209からは高环がまとめて出土している。大型の高环はどちらも環体部が屈曲した後外反するが、SB209の小型の高环は楕円形を呈するものがほとんどである。対して、SB206の小型の高环は、環体部の屈曲する高环が多い。大阪市内では環体部の屈曲する高环は後出すると考えられているが、玉津田中遺跡ではTK23・47型式併行期に先行するV-1期で確認されている。また、SB218でも環体部が屈曲する高环349があり、脚部にスカシ孔があり古い様相をもつ。その他、SB203の高环221は屈曲部が丸く、脚柱部内面のナデ調整が省略されるなど、新しい様相をもつ。

器種構成として环が増加するのは、大阪市内においてはTK43型式～TK209型式、玉津田中遺跡においてはⅡ-2期（TK23・47型式併行期）と考えられている。SB209・SD221からは环が多く出土している。SB209の环は環体部が深く、内外面にヘラミガキを施す丁寧な調整である。対して、SD221の环は環体部が浅く、粘土紐接合痕の残る粗製の环があり後出的である。

以上のように、土師器からはSB206→SB203、SB209→SD221、SB204=SB219という変遷が考えられるが、玉津田中遺跡の報告にもあるように、この時期の土器様式の変化には地域差が顕著で、変化の方向性が明確になっていないのが現状である。

次に共伴する須恵器を考えていきたい。須恵器は概ねTK23型式～MT15型式の範囲におさまるものと考えられる。須恵器の出土している遺構を比較すると、SB214の环蓋は天井部が平坦で、稜はやや鈍いものの、今回の報告資料の中では古い様相をもつと考えられる。対して、SB209の环蓋は口縁端部が丸く、稜は鈍い。また、天井部のヘラケズリの範囲が天井部の1/2程度と狭い。SB203の环蓋はSB209に近い時期と考えられる。

SB204の环身は口径が小さく底体部が丸く、器壁が厚い。対して、SB202の环身は底体部が

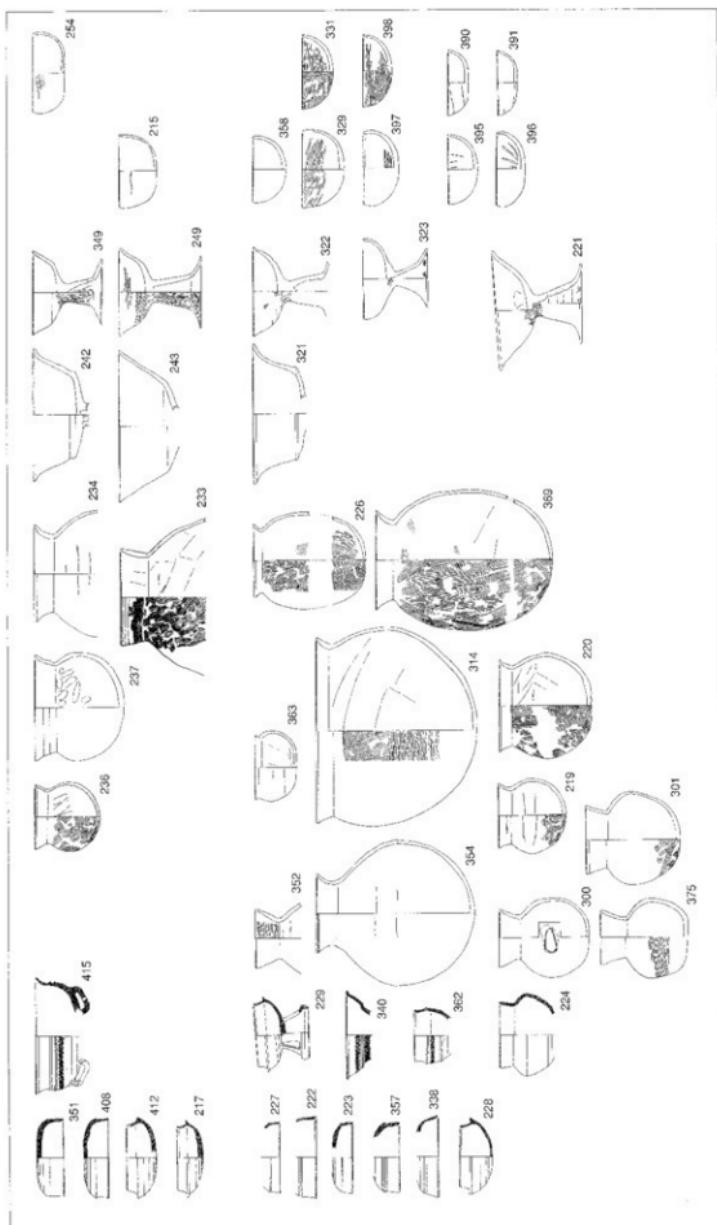


fig. 98 古墳時代中期～後期の土器 (土器スケールは 1/8)

やや平坦で、受け部のつくりが丁寧である。SB204からは他に短脚の有蓋高杯が出土している。SD221は口径の小さい壺身が多いが、たちあがり端部の鋭い410や、無蓋高杯415が出土し、溝であることからTK23型式～MT15型式と、時期幅があると考えられる。その他、SB217で出土している把手付椀362はTK47型式と考えられる。

以上、出土した須恵器から考えると、SB202・SB214→SB204・SB217・SB203・SB209の2時期に分かれると考えられる。ただし、これらの時期はTK23型式～TK47型式の範疇に含まれると考えられるため、大きな時期差があるとは言えない。

以上、土師器と須恵器の変化から考えられる古墳時代中期～後期の遺構は、SB202・SB206・SB218・SB214→SB204・SB217・SB219・SB203・SB209という2時期に大きくは分かれると考えられる。ただし、SB218・SB214は切り合いがあり、SD221はTK23型式～MT15型式と時期幅がある。

### 3. おわりに

吉田南遺跡は古くから神戸市内で知られる著名な遺跡のひとつである。これまで、資料化が進んでいないこともあって、明石川流域の歴史を解明する妨げになっていたことは否めない。今後、今回報告した資料が広く活用され、地域の歴史を含めた歴史解明に寄与できれば、莫大の幸せである。

最後に、今回発掘調査を担当し、整理・報告する機会に恵まれ、関係機関・先輩諸氏のご指導・ご協力をいただき、報告書にできたことを深く感謝いたします。

#### Ⅲ. 参考文献

- 多賀茂治「弥生時代後期～古墳時代前期の土器」『玉津田中遺跡 第6分冊』兵庫県教育委員会 1996
- 山田清朝「弥生時代後期～古墳時代初頭の土器」『口福寺遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2002
- 山本雅和「弥生時代後期の土器の検討」『今池尻遺跡 新方遺跡平松地点発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2003
- 黒田恭正「神戸市域（六甲山南麓地域）における弥生時代第V様式～布留式併行型の土器様式」『森南町遺跡』神戸市教育委員会 2005
- 菱田淳子「古墳時代中期～後期の土器」『玉津田中遺跡 第6分冊』兵庫県教育委員会 1996
- 京崎寛「古墳時代後半期の上器の変遷」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書 V』大阪市文化財協会 1993
- 辻美紀「古墳時代中・後期の上師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室 1999
- 山本雅和「松野遺跡の古墳時代の土器について」『松野遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2001
- 山本雅和「古墳時代後期の土器の検討」『今池尻遺跡 新方遺跡平松地点発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2003

# 写 真 図 版





VII区全景（北西から）

図版2



VII区全景（東から）



X区全景（南から）



XI区全景（東から）



XII区全景（南から）



SB208 (北西から)



SB208 (西から)

図版4



SB208に伴うSD211  
(南西から)



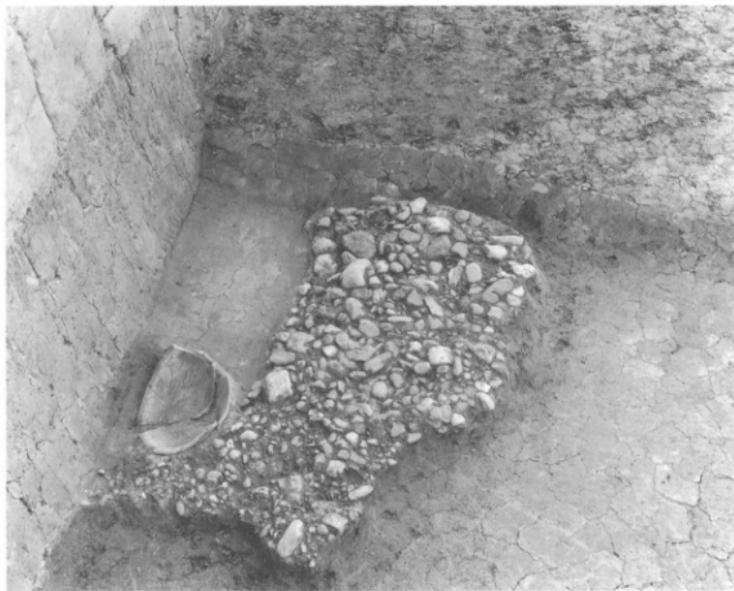
SB208北西隅発見状況  
(南西から)



SB208-p 12  
(南西から)



SB213（南西から）



SB213礫検出状況（南西から）

図版6



SB215炭化材検出状況（北東から）



SB215（北東から）



SB220（北東から）

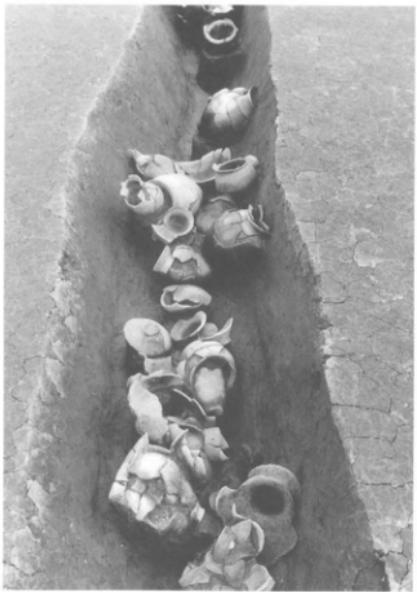


SB212（南西から）

図版8



SD209（東から）



SD209

図版10



SD218（南から）



SD220（北東から）



SB206炭化層検出状況（南東から）



SB206（南東から）

図版12



SB206カマド（南西から）



SB206貯蔵穴（北東から）



SB202 (北西から)



SB203 (南西から)

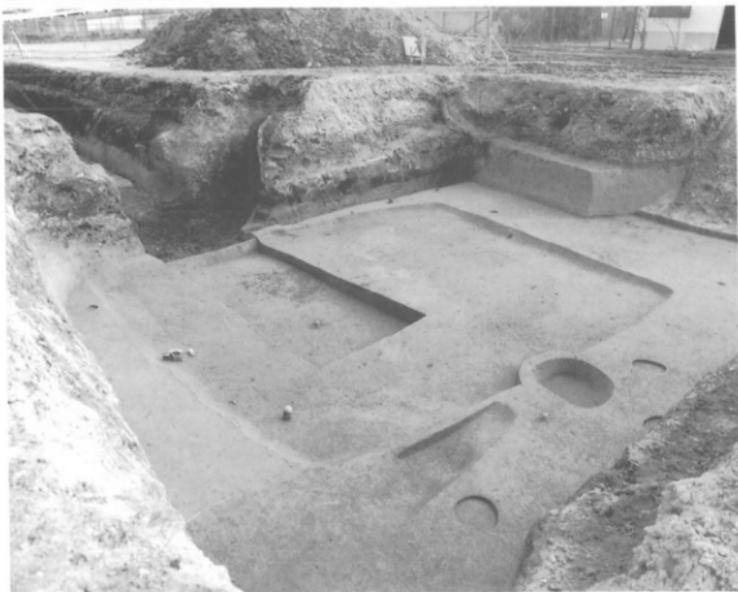


SB204 (北東から)

図版14



SB209（古）（北西から）



SB209（新）（北西から）



SB214（南東から）



SB218（北東から）

図版16



SB217（南西から）



SD221（北東から）